山形県埋蔵文化財センター調査報告書第35集

渡戸遺跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター
6-1995-580-01
6-1996-580-01

1996
580
6

1996

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

渡戸（わたど）遺跡

発掘調査報告書

平成８年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

蔵書
'96. 6. 25
財団法人
山形県埋蔵文化財センター
1996 ー

調査区全景空中写真(西より)

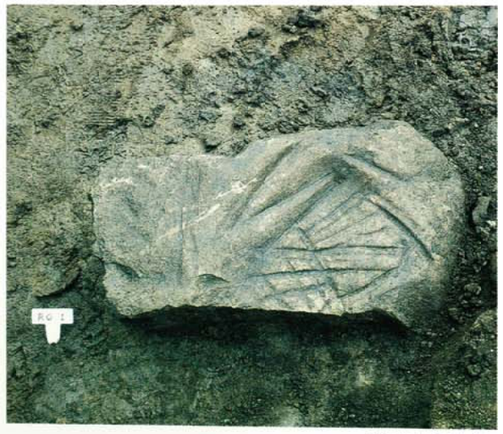
集石土坑・SK 9 (J—4 グリッド)

土偶

土器

クッキー状炭化物

遺物廃棄場



砥石出土状況

自然木調査状況

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、渡戸遺跡の調査成果をまとめたものです。

渡戸遺跡は山形県の東側ほぼ中央に位置する天童市にあります。天童市はいで湯と将棋駒の里として知られる、山形県における中心的な都市のひとつです。渡戸遺跡は天童市街地から東方、約4㎞ほど奥羽山地にはいった山口地区に所在し、押切川の形成した河岸段丘上に営まれています。

この度広域農道整備事業（村山東部地区）に伴い、工事に先立って渡戸遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代の遺物廃棄場・墓抗などの遺構が見つかり、縄文土器・弥生土器・須恵器などの遺物が出土し、縄文時代から古代までという長期間にわたり断続的に利用された遺跡であることがわかりました。特に、発掘地点の中央部を東西に流れていた、旧川道にそって形成された捨場からは、縄文時代後期の土器や土偶などの貴重な遺物が多数発見されました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へ伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は広域農道整備事業（村山東部地区）に係る「渡戸遺跡」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は山形県教育委員会の委託により、山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　　渡戸遺跡（CTDWD）　　遺跡番号335

所在地　　山形県天童市大字山口字渡戸

調査期間　　発掘調査　平成７年４月１日～平成８年３月31日

　　現地調査　平成７年５月８日～平成７年８月11日

調査主体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者

　　調査第一課長　　佐々木洋治

　　主任調査研究員　　野尻　　侃

　　調査研究員　　山口　博之

　　嘱託職員　　渡辺　　薫

4　発掘調査及び本書を作成するに当たり、山形県山形平野土地改良事務所、天童市教育委員会、天童市農林課など関係諸機関並びに、天童市の方々から協力をいただいた。また、現地調査にあたって、遺跡の立地に関する自然地理的観察については阿子島　功氏（山形大学）から、ご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は、山口博之、渡辺薫が担当した。編集は尾形與典が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6　委託業務は下記のとおりである。

　現地調査における平面図等の作成及び遺物実測の一部については、株式会社シン技術コンサルに委託した。

　出土木材・出土種子・花粉の同定並びに分析については株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＫ…土坑　　ＳＢ…建物跡　　ＳＴ…住居跡

ＳＬ…炉跡　　ＳＰ…ピット群　　Ｓ　…礫

ＲＰ…完形・一括土器・土製品　　ＲＱ…石器・石製品

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

（１）遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（２）グリッドの南北軸は、N―30°―Wを測る。

（３）遺構実測図は1/20、1/40、1/80、1/200縮図、その他で採録し、各挿図毎にスケールを付した。

（４）遺物実測図・拓影図は1/2、1/3、1/4、1/5で採録し、各々スケールを付した。
遺物図版については任意としたが、重要なものについては10cmのスケールをいれている。また、一覧表という形で各々の法量を採録してあるので参照されたい。

（５）本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

（６）土器の拓影の内、表裏を表したものについては、断面図を挟んで、右が表面左が裏面として、図を作製した。

（７）遺物観察表中の（　）内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。

（８）遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の概観
　1　遺跡の立地と環境 …… 1
　2　渡戸遺跡研究小史 …… 4
　3　調査の方法と経過 …… 5
　4　渡戸遺跡の層序 …… 8
Ⅲ　検出された遺構 ……11
Ⅳ　出土した土器 ……24
Ⅴ　出土した土偶と土製品 ……46
Ⅵ　出土した石器と石製品 ……56
Ⅶ　まとめ ……66
　抄録 ……67
　付編 ……69

挿　図

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　渡戸遺跡出土土器 …… 4
第３図　遺跡全体図 …… 6
第４図　遺構配置概要図 …… 7
第５図　Ａ～Ｊ―１～２グリッド
　東壁土層断面図 …… 9
第６図　Ｆ・Ｉ―５グリッド
　東壁土層断面図 ……10
第７図　遺構平面図 ……12・13
第８図　遺構平面分布図 ……15
第９図　遺構平断面図（１） ……16
第10図　遺構平断面図（２） ……17
第11図　遺構平断面図（３） ……18
第12図　遺構平断面図（４） ……19
第13図　遺構平断面図（５） ……20
第14図　遺構平断面図（６） ……21
第15図　遺構平断面図（７） ……22
第16図　主要出土遺物分布図 ……27
第17図　主要出土土器分布図 ……28
第18図　出土土器（１） ……29
第19図　出土土器（２） ……30
第20図　出土土器（３） ……31
第21図　出土土器（４） ……32
第22図　出土土器（５） ……33
第23図　出土土器（６） ……34
第24図　出土土器（７） ……35
第25図　出土土器（８） ……36
第26図　出土土器（９） ……37
第27図　出土土器(10) ……38
第28図　出土土器(11) ……39
第29図　出土土器(12) ……40
第30図　出土土器(13) ……41
第31図　出土土器(14) ……42
第32図　出土土器(15) ……43
第33図　出土土器(16) ……44
第34図　土偶分布図 ……49
第35図　出土土偶（１） ……50
第36図　出土土偶（２） ……51
第37図　出土土偶（３） ……52
第38図　出土土製品（１） ……53
第39図　出土土製品（２）・
　クッキー状炭化物 ……54
第40図　石器・石製品実測図（１） …58
第41図　石器・石製品実測図（２） …59
第42図　石器・石製品実測図（３） …60
第43図　石器・石製品実測図（４） …61
第44図　石器・石製品実測図（５） …62
第45図　石器・石製品実測図（６） …63
第46図　石器・石製品実測図（７） …64

表

表１　土坑計測値一覧表 ……23
表２　出土土器計測値一覧表 ……45
表３　土偶・土製品計測値一覧表 …55
表４　石器・石製品計測値一覧表 …65

図　版

図版１　空中写真遺跡全景
図版２　空中写真遺跡範囲・遺跡遠景
図版３　Ｆ―４・Ｅ―４グリッド東西壁、調査区東壁
図版４　土器捨場調査状況
図版５　土偶(RP83)出土状況、土器(RP42・43)出土状況
図版６　自然木出土状況（Ｇ―６グリッド）
図版７　泥炭層調査状況（Ｇ―６グリッド）、自然遺物出土状況（クルミ）、
　自然遺物出土状況(種子)、土器出土状況(RP98)、完掘状況
図版８　遺物出土状況(RP29・30)、RP34出土状況、RP16出土状況、RP109出土状況、
　RP88出土状況
図版９　RP54出土状況、RP53出土状況、RP48出土状況、RP60出土状況、
　クッキー状炭化物出土状況、石斧出土状況、石皿出土状況、砥石出土状況
図版10　遺構調査状況
図版11　遺構調査状況、SK１検出状況、SK１調査状況、SK39調査状況、SK40調査状況

図版12　SK 9 検出状況、SK 9 調査状況、SK35調査状況、SK35完掘状況、
SK 2 検出状況、SK 3 検出状況、SK2・3調査状況、SK38調査状況
図版13　出土土器(RP34)、出土土器(RP14)、出土土器(RP60)、
出土土器(H・G—3グリッド)、同内面写真
図版14　出土土器(RP43)、出土土器(RP16)、出土土器(G—6)、出土土器(F—5)、
出土土器(RP98)、出土土器(RP109)、出土土器(RP99)、出土土器(G—5)
図版15　出土土器(H—3)、出土土器(G—5)、出土土器(RP78)、出土土器(H—5)、
出土土器(RP90)、出土土器(RP88)、出土土器(G—3)、出土土器(X—O)、
出土土器(RP30)、出土土器(G—6)、出土土器(E—5)、出土土器(H—4)、
出土土器(H—4)、出土土器(RP89)、出土土器(G—5)
図版16　土偶集合写真、土偶頭部、土偶体部、土偶下肢、土製円盤
図版17　出土土偶(RP22)、出土土偶(RP53+RP83)、出土土偶(RP61+RP12)、
出土土偶(G—3+H—3)、スタンプ状土製品(RP50)、
土版(RP 9)、土版(RP 5)、土版(RP 8)
図版18　石鏃、石錐、石匙、石匙、石斧、凹石、石皿、石皿(RQ12)、
石皿(RQ33+RQ10)、石皿(RQ17+RQ22)、石皿(RQ43)、
砥石(RQ14)、砥石(RQ20)、アスファルト付着石鏃、アスファルト付着石匙、
アスファルト付着石匙

I　調査に至る経過

天童市の北東部、奥羽山脈に接するあたりに位置する山口地区は、平地と山地が接する境に位置する。渡戸遺跡はこの山口地区の北側、上流から流れる押切川の形成した河岸段丘上に位置し、縄文時代晩期を主体とする遺跡として従来から知られていた。

渡戸遺跡の調査は、広域営農団地農道整備事業（村山東部地区）を原因として、農道にかかる遺跡範囲について、発掘調査を実施し記録保存することを目的として実施された。調査実施までの経過は次のとおりである。

・平成6年10月24日～25日……山形県教育庁文化財課による事業区域内の試掘調査により、縄文時代後期の集落跡を確認。
・平成7年1月18日……山形県埋蔵文化財センターと事業主体の山形平野土地改良事務所との第1回目発掘調査事前打ち合わせ。
・平成7年3月24日……山形県埋蔵文化財センターと事業主体の山形平野土地改良事務所との第2回目発掘調査事前打ち合わせ。
・平成7年4月19日……山形県埋蔵文化財センターと山形平野土地改良事務所・天童市経済部農林課・天童市教育委員会・東南村山教育事務所との発掘調査事前打ち合わせ。
・平成7年5月8日～同8月11日……現地調査実施。

II　遺跡の概観

1　遺跡の立地と環境

渡戸遺跡の形成に最も大きくかかわってきたのは、遺跡の北を流れ押切川である。押切川はその名のとおり、遠く奥羽山地に源を発しながら、急峻な山地を開析し、その土砂を平野部へと押し出し、扇状地を形成する。急峻な山地から平野部へと一気に押し出された土砂が、渡戸遺跡の基底となっている。その後押切川は幾度か流路を変えつつ河岸段丘を形成した。正確には判別できないものの、数段の河岸段丘の形成が見て取れる。渡戸遺跡の今回の調査地点はその最も低い段丘面に所在し、標高は185m～186mを測る。押切川の現川床からの比高は約5m、遺跡の地山は段丘礫であり、一部には岩盤の見られる箇所もある。今回の発掘区は河岸段丘の一部と、旧河道の一部を調査したことになる。もとの地権者の情報では、畑には一部砂が深いところがあり、「ごぼう」や「長イモ」の栽培に適していたとのことであった。実際に砂の堆積が深い箇所が発掘区中央に検出された。それは旧河道であり、砂は川の流れによる堆積であることが分かった。

旧河道の形成は発掘区の中央付近に見られ、調査では湧水に悩まされた。しかしこのために植物質の遺存状況は良好であり、旧河道の一画には泥炭層の形成が見られた。さらに、旧河道に向かって北側から遺物の廃棄が行われている状況が伺えた。遺物の廃棄が行われ

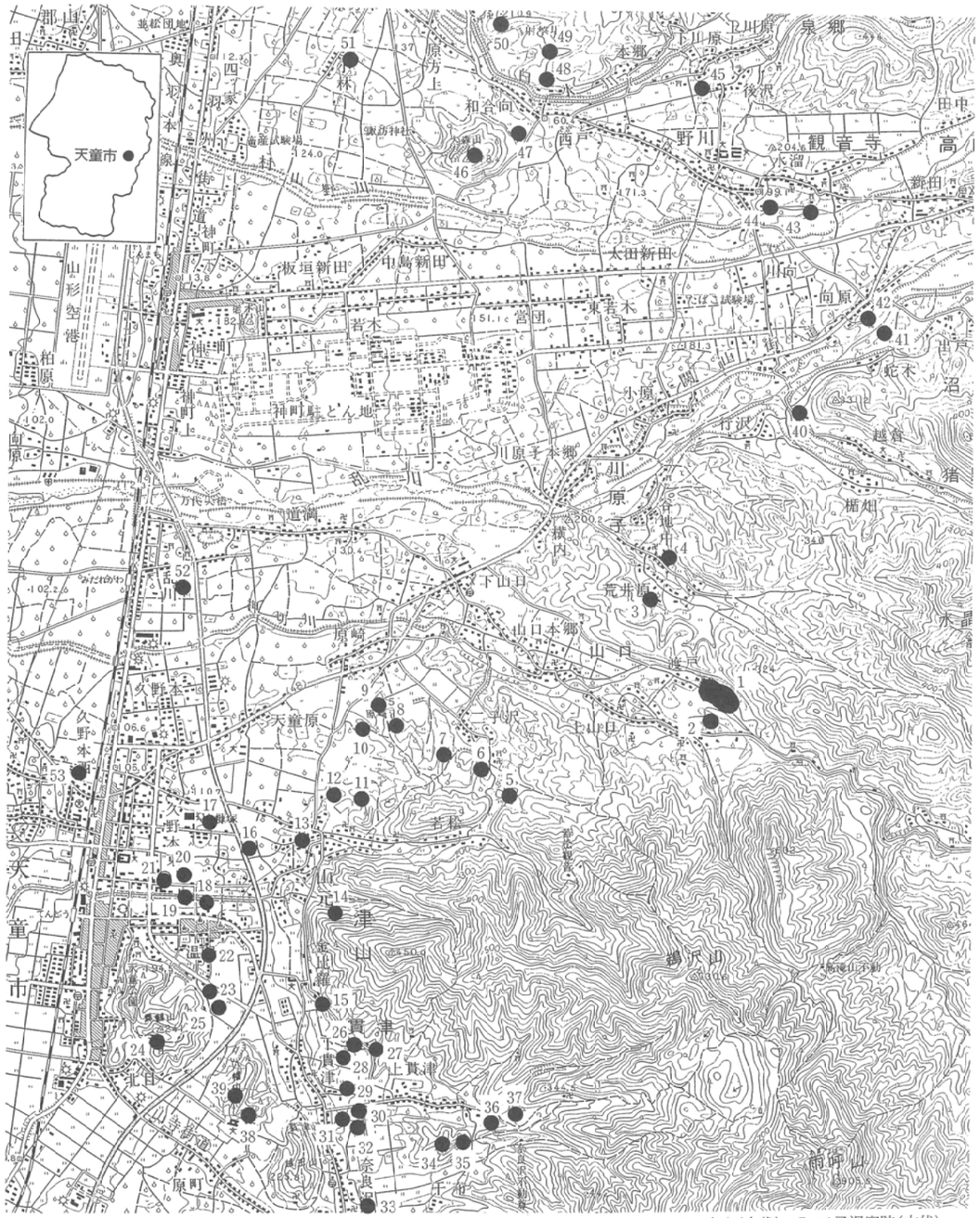
たと考えられる箇所には土坑が営まれ、土坑の多くは集石を持つが、目立った共伴遺物は存在しなかった。

今回の調査では、農道整備にかかる路線幅（約58m×約116m）の一部が対象となった。調査区の面積は1,500㎡、そしてここから得られた遺物は、整理箱229箱であった。渡戸遺跡は表面採集資料をもとにした資料紹介も何度か行われ、約100,000㎡にもなる、縄文時代晩期の大集落跡として知られていた。しかし、縄文時代後期の遺物については従来知られていなかった。今回の調査で初めて確認されたものでる。

周辺に目を向ければ、渡戸遺跡を含む奥羽山地周辺には多くの遺跡が分布している。これを図に表したのが第１図である。渡戸遺跡の周辺に最初に遺跡が営まれたのは縄文時代早期のことであった。渡戸遺跡から５㎞ほど上流に溯った、田麦野地区に所在する「かくまくぼ遺跡」である。この遺跡からは縄文時代早期中葉の貝殻沈線文土器群が得られている。次の縄文時代前期と中期の遺跡の様相は明らかではないが、縄文時代中期から後期あるいは晩期にかけては、２「森遺跡」・９「杉ノ木山遺跡」・17「糠塚遺跡」などの遺跡が奥羽山地の山中の平坦地と、山裾にかけて分布する。やや平地には、21「綿掛Ｂ遺跡」があり縄文時代～弥生時代にかけて営まれている。「綿掛Ｂ遺跡」の周辺には、18「千苅遺跡」・19「千苅条里遺跡」・20「綿掛Ａ遺跡」など古代の遺跡が多く営まれている。縄文時代の遺跡はその生産のありかたと関係してか山地に多く分布し、弥生時代には稲作の普及にともなって、平地に遺跡が営まれ、古代に入ると開発と生産の中心が平地に移行していったため、山中にはほとんど遺跡の所在をみいだせなくなる、という姿を遺跡の立地から伺うことができる。

この周辺が縄文時代と同様な活発な活動を見せるのは、古代の末から中世にかけてである。この様相を伺い知ることのできる一つに、奥羽山地の山裾に多数分布している古代の窯業遺跡の存在がある。５「谷地中窯跡」・６「瀬戸山古窯」・７「二子沢窯跡」・８「原崎窯跡」などが上げられる。これら奥羽山地の平地からの傾斜変換点付近に営まれた古窯跡群は、ほぼ９世紀中頃から10世紀にかけての、限定された時期に営まれたもので、造営された数も数十基を越える数が予想され、当地域は古代村山郡域の一大窯業センターであったことが想定される。

中世に入ると若松観音と地元で呼ばれる、「若松寺」に関係して営まれたであろう中世遺跡が幾つか見受けられる。「若松寺」は最上三十三観音の第一番札所であり、奥羽山地がわに山を越えた場所に所在する、山形市山寺「立石寺」と密接な関係のもとに栄えた、中世村山地域を代表する寺院のひとつである。この「若松寺」との関係のもとに営まれたのが10「田呑墳墓」・11「山居墳墓群」などの、中世墳墓群である。低いマウンドを持ち方形あるいは円形の外形を呈する。開墾以前は多数の中世墳墓が見られたが、現在ではほとんど失われている。12「山家城」などの中世城館も、中世後期には営まれている。



1.渡戸遺跡(縄文)　2.森遺跡(縄文)　3.荒井原遺跡(古代)　5.谷地中窯跡(古代)　6.瀬戸山古窯(古代)　7.二子沢窯跡(古代)
8.原崎古窯跡(古代)　9.杉ノ木山遺跡(縄文)　10.田呑墳墓(中世)　11.山居墳墓群(中世)　12.山家城(中～近世)
13.山元遺跡(古代)　14.毘沙門寺遺跡(中～近世)　15.石打場遺跡(古代)　16.光戒壇遺跡(古代)　17.糠塚遺跡(縄文)
18.千苅遺跡(古代)　19.千苅条里遺跡(古代)　20.綿掛Ａ遺跡(古代)　21.綿掛Ｂ遺跡(縄・弥)　22.塚田遺跡(縄文)
23.鍬ノ町遺跡(縄文)　24.天童城(中～近世)　25.鍬ノ町条里遺跡(古代)　26.山崎Ｃ遺跡(古代)　27.山崎Ｄ遺跡(縄文)
28.山崎Ａ遺跡(縄文)　29.山崎Ｂ遺跡(古代)　30.白山堂Ａ遺跡(中世)　31.白山堂遺跡(縄文)　32.白山堂Ｂ遺跡(中世)
33.奈良沢東遺跡(縄文)　34.新城山館(中～近世)　35.新城山(縄文)　36.新庄(縄文)　37.東新寺廃寺(古代)　38.八幡山古墳(古墳)
39.八幡山墳墓群(中～近世)　40.猪野沢横台(縄文)　41.沼沢・要害楯(縄文・中世)　42.向原(縄文)　43.観音寺白山山経塚(中世)
44.野川要害楯(中世)　45.泉郷後沢(中世)　46.大森山経塚(中世)　47.大森東遺跡(縄文・中世)　48.田追遺跡(縄文)
49.田追窯跡(古代)　50.田島山館(中～近世)　51.小林Ａ遺跡(縄文)　52.乱川墳墓群(古代)　53.押切遺跡(古代)

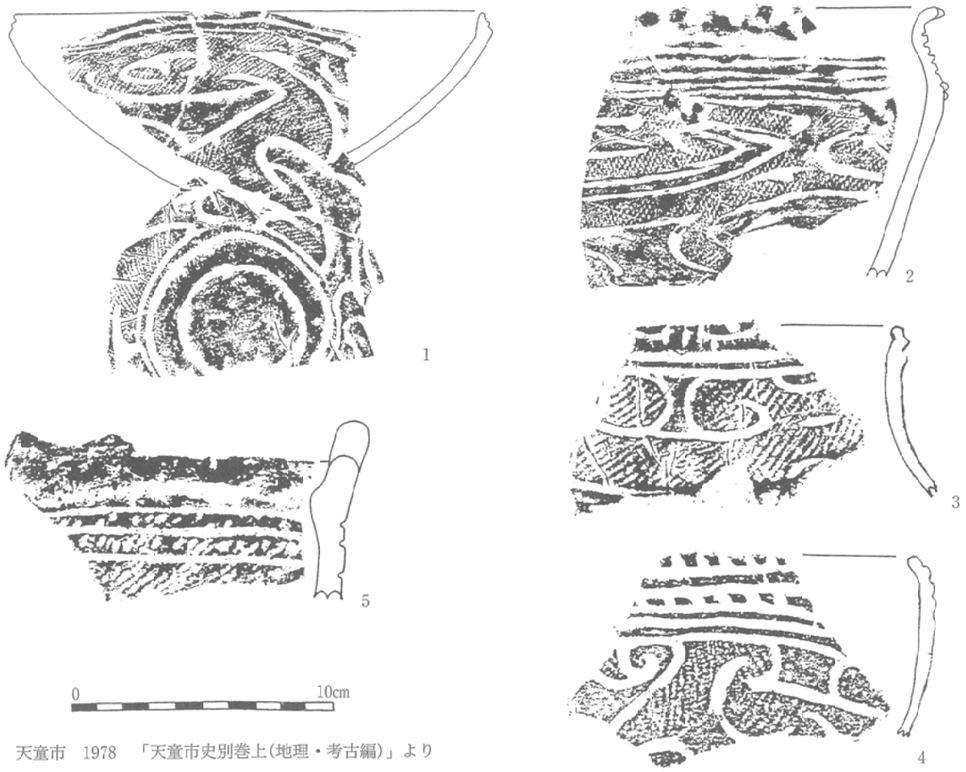
第１図　遺跡位置図

2　渡戸遺跡研究小史

渡戸遺跡の調査に至るまでの研究史について触れておきたい。渡戸遺跡は、縄文時代晩期の集落跡として知られていた（第２図）。表面採集資料をもとにした資料提示も、「天童市史（考古資料編）」などで行われている。第２図の１から５に表した資料もその中で紹介されたものである。ここに図示した土器群はほぼ大洞C_1からC_2式の、縄文時代晩期中葉の土器群に比定することが出来よう。しかしながらこのほかの時期に亘る資料としては、縄文時代中期の資料が少数得られているに過ぎなかった。

地元の方々も渡戸遺跡の開墾や開発にともなって、多種多様な遺物を採集している。これらは村落内の各家に所蔵されている他に、社のご神体として、石棒が祀られたりなどもしている。これらの遺物も縄文時代晩期あるいは中期の遺物が主体的である。これは実際に遺物が採集出来るのは、河岸段丘での上位の面であり、ここからは縄文時代晩期の遺物が主体的に採集される。この面を中心として遺物が採集されて来たためであろう。

今回の調査では縄文時代後期中葉の良好な資料が得られたわけだが、従来今回の発掘調査地点については、河岸段丘の一番下であることも手伝ってほとんど遺物が採集されることはなかった。縄文時代後期の遺物は、今回の調査でほとんど初めて確認されたものであり、山形県内でも類例が少ない貴重な資料である。このことは、渡戸遺跡の年代観に新しい視点をもたらすこととなったとともに、遺跡の範囲がさらに拡大することを確認させることになった。



天童市　1978　「天童市史別巻上(地理・考古編)」より

第２図　渡戸遺跡出土土器

3　調査の方法と経過

調査にあたり遺跡の立地する地形を加味し、諸記録の基準として５メートル方眼のグリッドを設置した（図３）。グリッドの基準軸について南北軸をA～Z、東西軸を１～９として表し、交点を左上に見た位置を、そのグリッドのグリッド名としてとらえることとした。

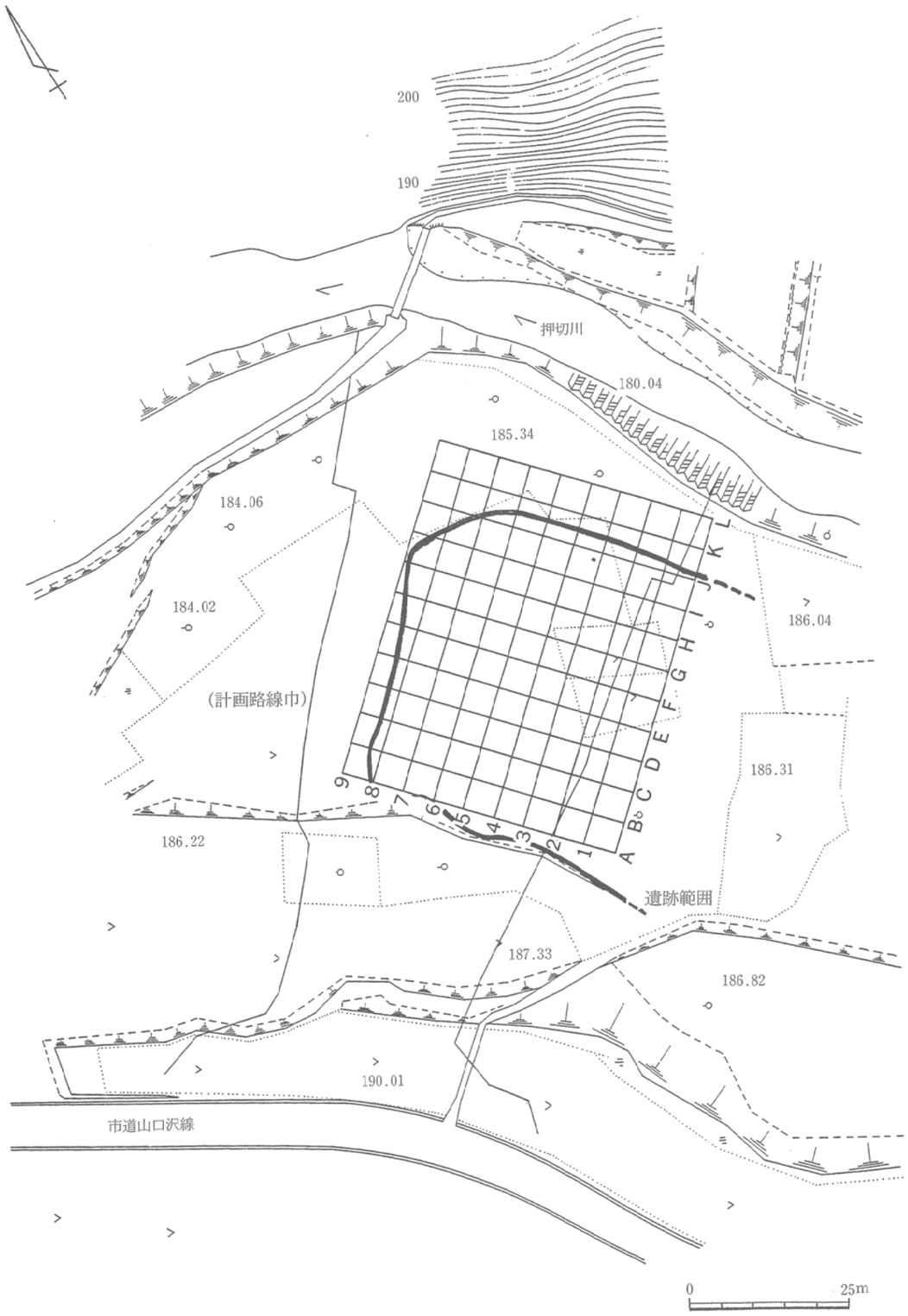
調査区内の環境整備の後、発掘区内の微地形や遺構・遺物の様相を探る目的から、幅約50cmのトレンチを、発掘区の外周全体と、さらに補助的に南北方向に３本設定した。同時に文化財課の試掘坑をも再調査し状況を再確認した。これらの結果、発掘区の南側と北側に拳大から小児頭大の礫が密集し、中央には砂質の土壌が堆積しながら、ほとんど礫は見られないという状況であることが判明した。中央に旧河道が東西にはしり、それをはさんで南北に段丘礫が存在する地形であることが予測された。

礫の分布する箇所には遺物はほとんど分布しなかったため、重機を使用して表面の土を排土し、調査を進めることとした。旧河道の地区については、表土を重機で取り除いた後、人手で旧河道底面まで掘り下げることとした。しかしながら、旧河道の深度が予想以上に深く、砂層と礫層の互層となっており、人力での作業が進みにくい状況であったため、重機を再導入して、旧河道に堆積していた砂と礫を排土することとした。

調査の具体的な進行としては、重機により表土を取り除き、次には人手で土の色や土の質に着目しながら、ていねいに面削りを進め少しずつ掘り下げて精査した。発見された遺構と遺物は、記録保存の目的のため写真や図面に記録した。

調査の開始にあたり、遺跡付近の字限り図を天童市教育委員会から提供していただいた。これによれば、調査区についてはほとんど明治時代からの地形が残っており、ほとんど改変されていない状況が伺えた。調査に当たっての聞き取りでも、旧地形は改変されていないとのことであった。遺跡の遺存は良いことが予想された。

調査の進行に伴って調査区内の、内容や性格が明らかとなってきた。第４図に遺構配置を概念化した図を提示したが、A～D—２～９グリッドとH～K—１～９グリッドでは礫が集中している状況が見られた。この両地区は中央にはしる旧河道の河原であることがわかった。これらのうちA～D—２～９グリッドにおいては遺物の出土がほとんど見られなかった。しかし、H～K—１～９グリッドの一部においては、礫がまばらな箇所が存在し、そこには遺構が集中していた。ここからは外形は円形を呈しながら、袋状の掘方を持ち、土坑内には集石を持つという、特徴的な土坑を多数検出できた。この土坑群の旧河道寄りの斜面には、G～H—２～８グリッドにわたって、最大の厚さが約50cm程にもなる、遺物廃棄場が形成されていた。旧河道の右岸である、土坑の集中箇所から、遺物の廃棄がなされている状況が伺えた。今回の出土遺物のほとんどがこの土器捨場からのものである。D～H—２～９グリッドには旧河道が検出された。この埋没河川には少なくとも３回の氾濫と静穏な時期があったことがわかった。川底まで掘り進めたところ、湧水が激しく、調査が難航した。しかし水位が高いために、E—５グリッドで泥炭層を検出することができた。ここから、自然木や種子など多数の自然遺物を得ることができた。



第３図　遺跡全体図

第４図　遺構配置概要図

4　渡戸遺跡の層序

渡戸遺跡は押切川の段丘上に営まれた遺跡である（巻頭カラー写真）。このため数段の河岸段丘の形成が見られる（第３図）。今回の発掘区の立地する箇所は、その最も河川に近い、低位の段丘面である。

基本層序を見てみれば、遺跡の地山を成すのは段丘礫である。その上位に、河川によって運ばれたと考えられる、礫層や砂層そして黒色土などの堆積があり、これが遺物包含層となる。中央にはしる旧河道では、礫層や砂層そして黒色土などが互層となっており、数回の氾濫と静穏な時期の繰り返しが見られた。旧河道の川床では湧水が多く、一部には泥炭層の形成が見られた。

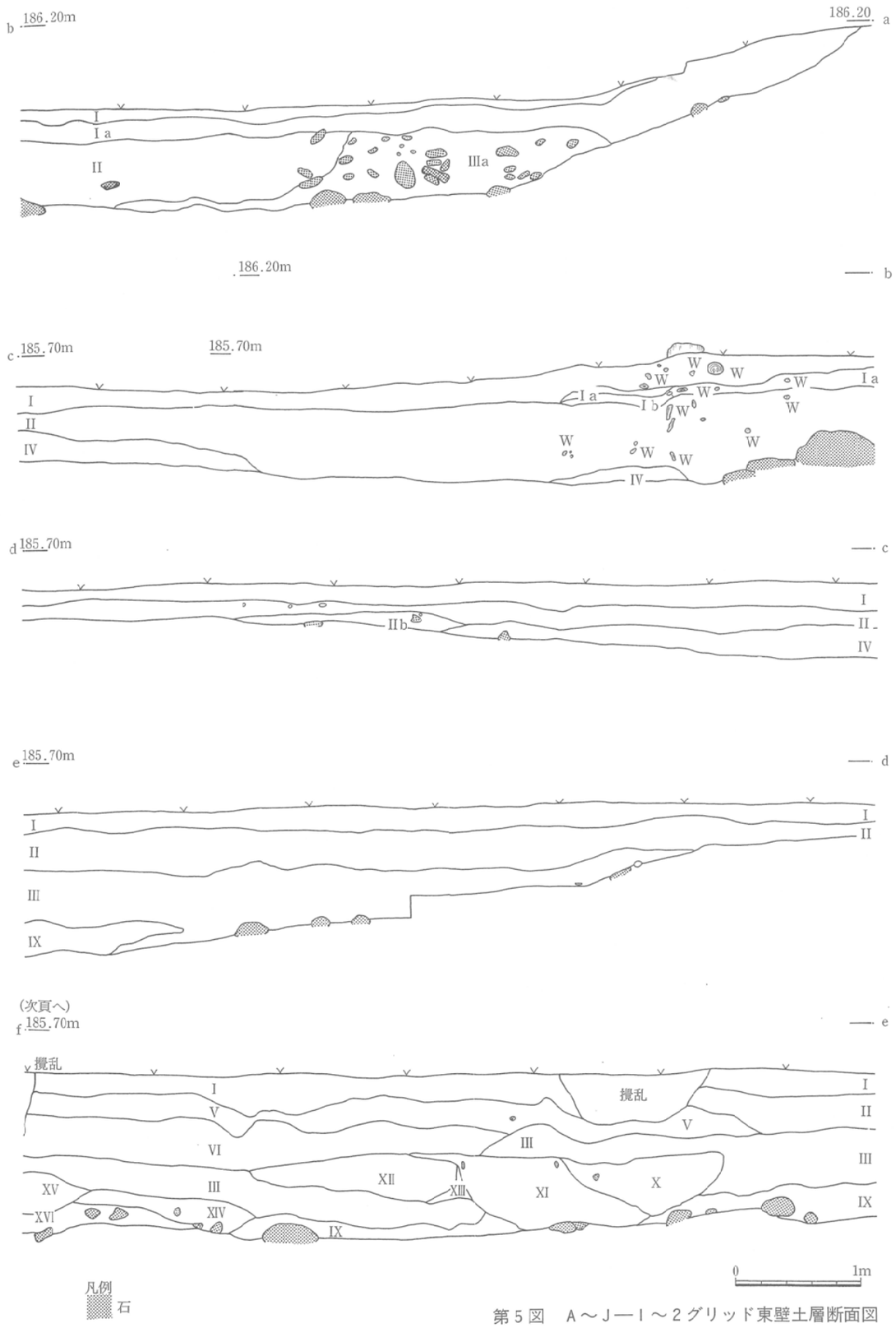
発掘区は、畑地として耕作されていたため、平坦になっているが、川床を成すと考えられる礫の存在状況から見れば、高低があるため、本来の微地形は平坦ではなかったものとおもわれる。

次に、Ａ～Ｊ―１～２グリッドの東壁の土層断面図（第５・６図）によりながら、旧河川の埋没状況について述べていきたい。また、Ｆ・Ｉ―５グリッド東壁の土層断面図（第６図）によりながら、捨場の遺物の堆積状況について述べていきたい。

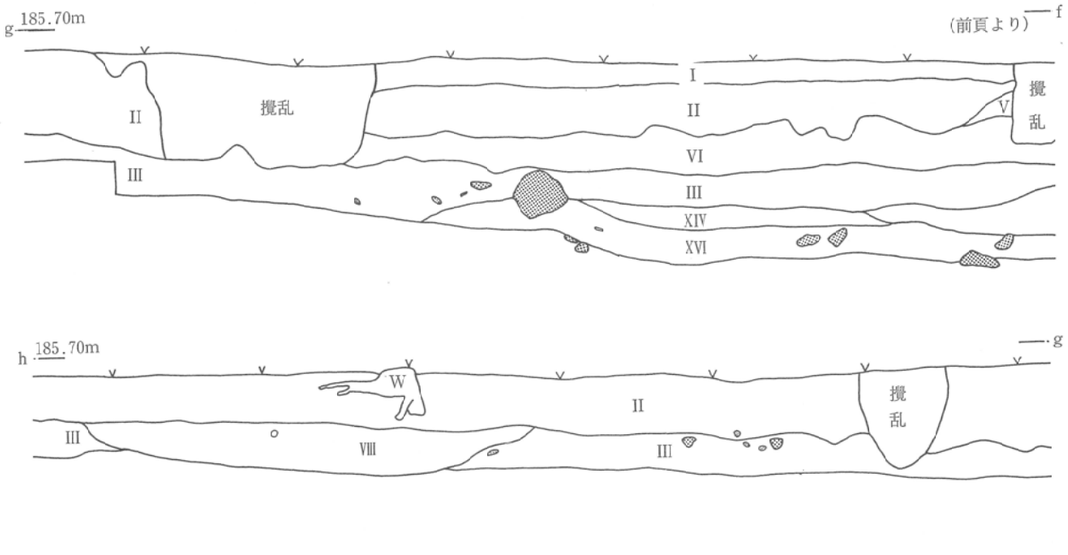
Ａ～Ｊ―１～２グリッドの東壁の土層断面図は、発掘区全体の東壁を記録したものである。この中の基底面に見える石の表示の部分が段丘礫である。Ａ～Ｊ―１～２グリッドの東壁の全体に渡って分布している。Ｅ～Ｈ―２グリッドにかけて凹んでいる部分が見られるが、ここが旧河川の河道である。川床の直上の第XVI層が遺物の廃棄層である。これは、Ｇ・Ｈ―２～８グリッドにかけて形成されていた。最大の厚みは50cmほどであり、ほとんどが土器のみで構成されている。ここに廃棄されている土器は、細片や磨滅した個体もあるが、大きい破片や表面の磨滅していない個体も多い。旧河川の中央部で石斧や磨石が出土しているが、いずれも磨滅は少なく、水の流れの緩やかな時期に、斜面から廃棄されたものと考えられる。

河川の堆積状況としては、基底面の直上の第XVI層が黒色のシルト質の土層であり、その直上のVIII層・IX層・XII層・XIII層には、流水によると考えられる、砂層が堆積している。さらにそれに隣接して、XI層・X層という礫を含む層が存在する。これは洪水などの時に堆積したものと考えられよう。VIII層・IX層・XII層・XIII層・XI層・X層には遺物はほとんど含まれない。氾濫そして静穏な時期を繰り返していたことがわかる。渡戸遺跡の主体を成す、縄文時代後期の土器群は、基底面の直上の第XVI層から中心的に出土している。一部に弥生式土器や須恵器が見受けられるが、弥生式土器はV層あるいはVI層からの出土と考えられ、縄文時代後期の一群の土器とは層位差があり、流れ込みであろう。おなじく須恵器に関しても流れ込みであろうと考えられる。

Ｆ・Ｉ―５グリッド東壁では、３層・５層・６層から遺物を検出できたが、間に４層という無遺物層を挟むものの、土器の様相は変わらず、接合もあったためほとんど時期差は認められないと考えられよう。また、向かって左手の側から廃棄されている事が分かる。



第５図　Ａ～Ｊ―１～２グリッド東壁土層断面図

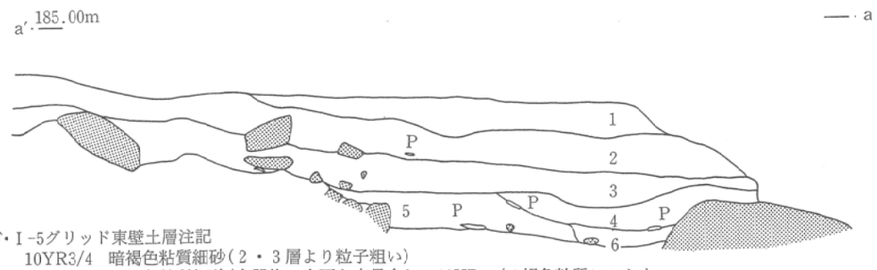


調査区東壁土層断面　土層注記

I　10YR3/4　暗黒褐色粘質シルト(上部に草根はいりこむ 耕作土)
Ia 10YR3/4　暗褐色粘質シルト(2～10mm大の小礫混じり。木根がはいりこむ)
Ib 10YR3/4　暗褐色粘質シルト(上部に草根がはいりこむ。10mm大の小礫が少量混じる。しまりがない。耕作土)
II　10YR3/4　暗褐色粘質細砂(1層よりもやや暗い色調。2～5mm大の小礫混じる。炭化粒少量混じる。1層よりもしまる。耕作土)
III　10YR2/3　黒褐色粘質細砂(炭化粒少量、土器片含む。硬くしまっている。遺物包含層)
IIIa 10YR2/3　黒褐色粘質シルト(3～20cm大の礫、砂利が多量に混じる。)
IV　10YR3/4　暗褐色粘質シルト(根による撹乱を受ける。しまりがない)
V　10YR2/3　黒褐色粘質細砂(2層が斑状に混じる。炭化粒を少量混じる)
Vb 10YR3/4　暗褐色粘質細砂
VI　10YR4/4　褐色細砂
VII　10YR3/4　暗褐色粘質シルト(根による撹乱を受ける)
VIII　10YR3/3　暗褐色粘質細砂(硬くしまっている)
IX　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質細砂
X　10YR4/4　褐色粗砂(5～10mm大の砂利が下部に多量に混じる)
XI　10YR3/4　暗褐色粘質細砂(5～10mm大の小礫が混じる)
XII　10YR4/6　褐色中砂
XIII　10YR3/4　暗褐色粘質細砂(12層が斑状に混じる)
XIV　10YR4/4　褐色粘質細砂
XV　10YR4/4　褐色中砂
XVI　10YR2/2　黒褐色粘質シルト(炭化粒を含み、土器片を多量に含む。粘質味強い)

凡例
石

F・I-5グリッド東壁土層断面図



F・I-5グリッド東壁土層注記

1　10YR3/4　暗褐色粘質細砂(2・3層より粒子粗い)
2　10YR3/3　暗褐色粘質細砂(土器片、小石を少量含む。10YR 4/4 褐色粘質シルトを斑状に含む)
3　10YR2/3　黒褐色粘質細砂(5～10cm大の礫を北側に含む。2～5mm大の小礫が南側に多く混じる。土器片含む。1層よりも粘質味強く、5より硬くしまる。)
4　10YR4/6　褐色粗砂(20mm大の礫が多く混じる。)
5　10YR3/3　暗褐色粘質細砂(土器片含む。15cm大の礫が少量混じる。)
6　10YR3/1　黒褐色粗砂(炭化粒、土器片を含む。)

0　1m

第6図　F・I—5グリッド東壁土層断面図

III　検出された遺構

渡戸遺跡の調査で検出された遺構は、土坑が34基、性格不明土坑が3基、遺物廃棄場が1箇所であった（図7）。また、遺構は発掘区全域に分布しているわけではなく、第4図に遺構分布範囲として表した、限られた範囲に分布していた。これを拡大したのが第9図である。遺構の種類についても、住居跡やピットなどの生活に直接結び付く遺構は、ほとんど見られなかった。土坑は集石を持つ特徴ある一群が主体となっている。土坑の様相については表1として一覧化しておいた。なお、遺跡はさらに東側につながるため、あくまでも一部の調査であることを確認しておきたい。

・土坑と性格不明土坑について

最初に土坑と性格不明土坑についてまとめておきたい。第9図は土坑が分布する地区について表したものであるが、H～J—2～7グリッドに集中することが分かる。この地点は平坦であり、遺跡の基底をなす礫までの間に、若干の土壌の堆積が見られる地点である。このため土坑の遺存が良く、この地点のみで集中して土坑が検出されたという可能性も在るが、発掘区の他の箇所では、H～J—2～7グリッドのように遺物が集中する箇所は検出されない。このことから、当初からこの箇所でのみ遺構が営まれていたと考えたい。

検出された土坑と性格不明土坑を第9図～第14図にまとめた。これらはいくつかの型式に分類することができる。

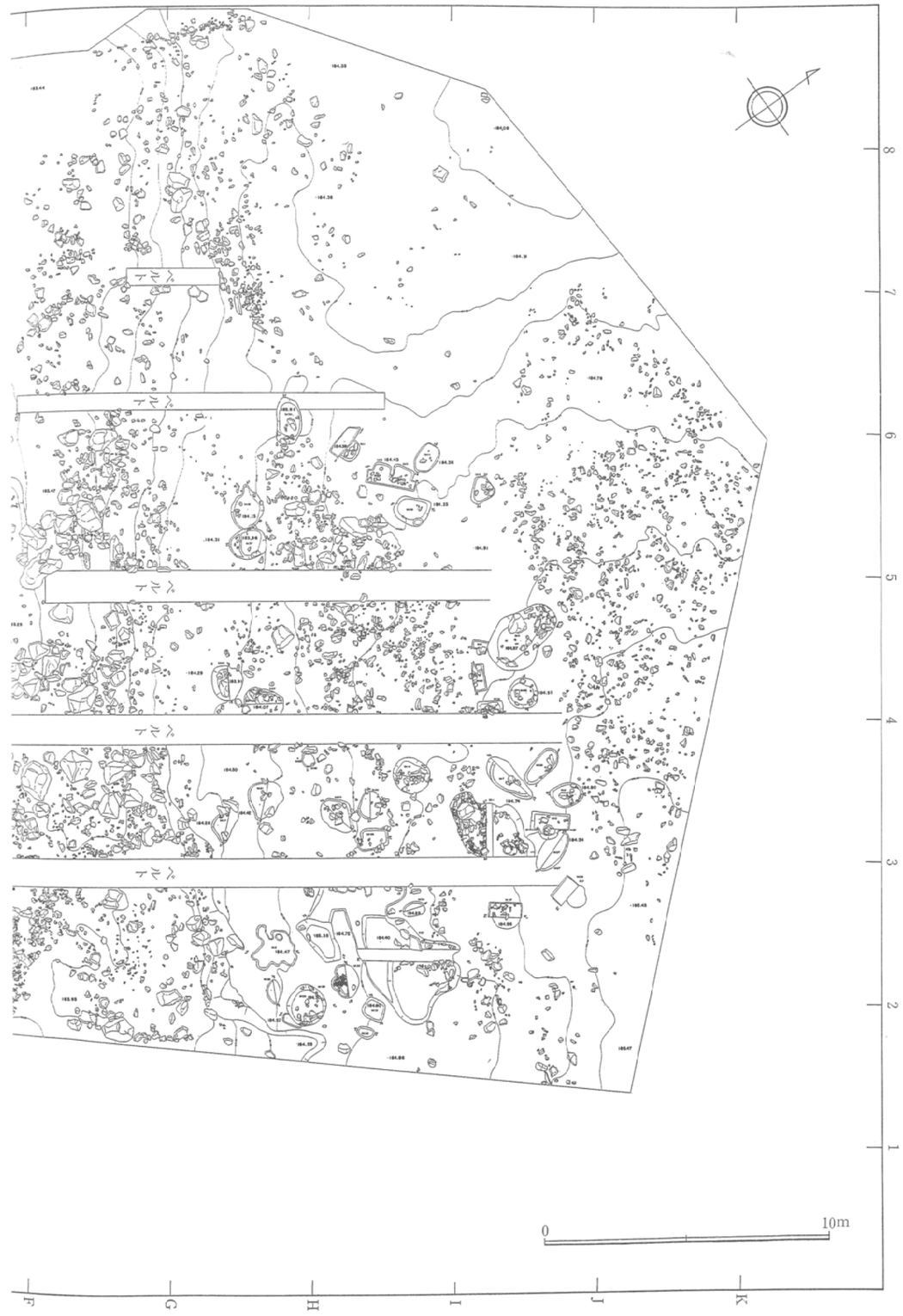
・第1類；平面形が50cm～80cmの円形を呈し、20cm～30cmの半円形の掘り込みを持つもので、検出面より上には拳大から小児頭大の礫数個による集石を持ち、覆土中にも拳大から小児頭大の礫が入るもの。
（第9図SK1・SK2・SK3、第10図SK40・SK39・SK9、第11図SK41・SK35・SK8、第12図SK38・SK30、第37図SK37・SK25）

・第2類；平面の長軸120cm程であり、短軸が50cm～60cm程の、楕円形を呈し、覆土中には、礫は明確には持たないもの。
（第12図SK7、第13図SK27）

・第3類；平面が不整形であるもの。
（第14図SX3・SX1）

第1類と第2類は、先に述べた土坑として確認したものであり、第3類は性格不明土坑として確認したものに当てはまる。

この中で、最も多数検出されたのが、第1類として分類した土坑である。平面形は50cm～80cmの円形であり、地上には拳大から小児頭大の礫、数個による集石を持つものが大半である（巻頭カラー・図版11・12）。SK1では小児頭大の礫が6個円形に配置されていた。SK2・SK3・SK9・SK41・SK35・SK8・SK38・SK30・SK37・SK25でも同様な礫の配置がみられる。検出面より上に表れている礫は、2～3個から8個前後が多い。これを取り去ると覆土中の礫が表れる（巻頭カラー）。



第７図　遺構平面図

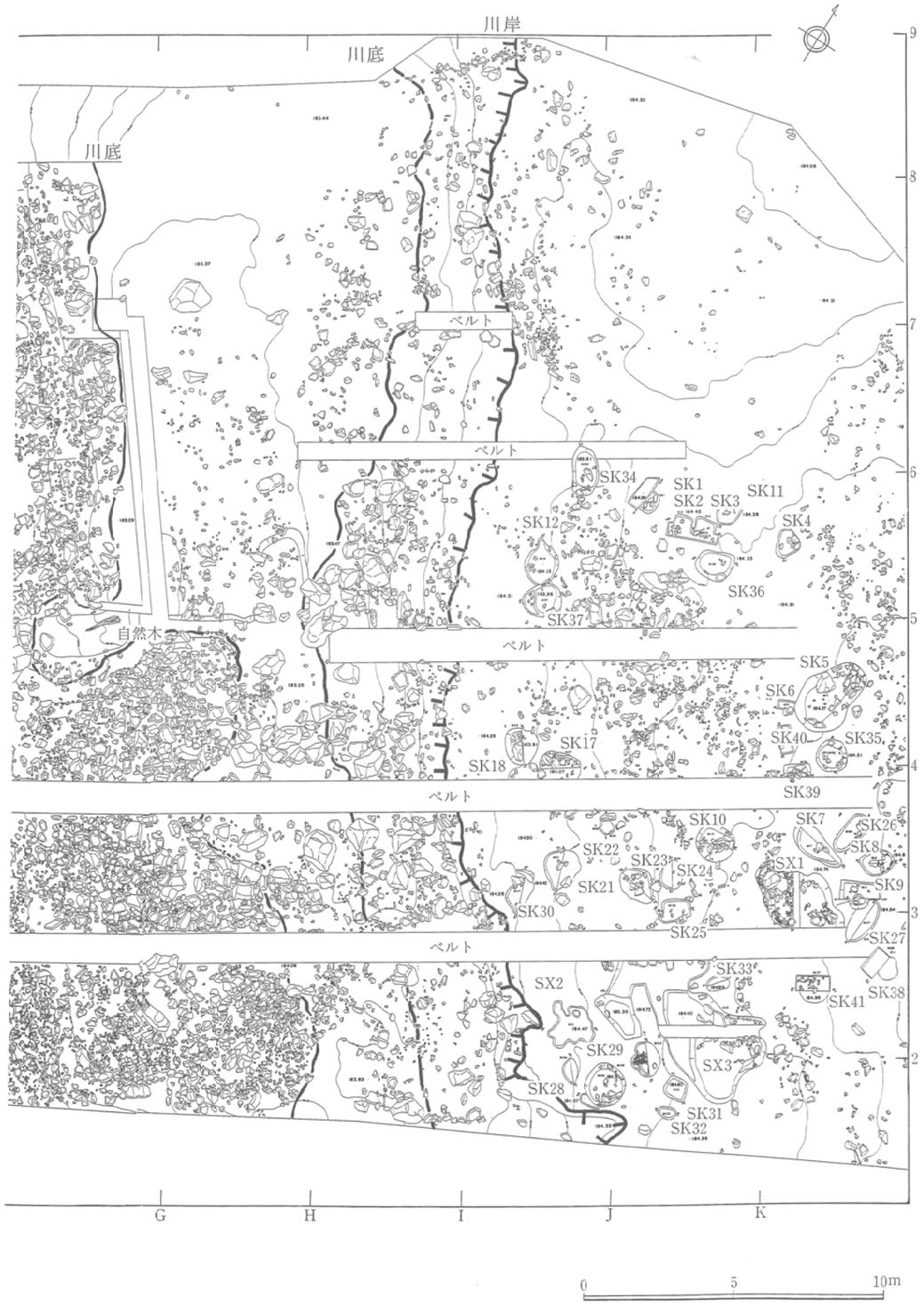
SK40・SK39では明確な掘り方を確認できなかったが、覆土中の集石の様子を見ると、円形の掘り方があったと予想される。掘り込みは20cm～30cmの半円形を呈している。覆土中には拳大から小児頭大の礫が、密集して入っているものと、密集しないものがある。覆土は大半のものは１層のみの構成であり、黒っぽい土壌が充満している。土坑の内部には伴出遺物はほとんどない。同様の土坑は秋田県の南部の奥羽山地側、「八木遺跡」でも確かめられている（秋田県文化財調査報告書第181集）。ここは縄文時代後期の前半を中心とする遺跡であり、渡戸遺跡とは時期的にも近接する。遺構の様相も近似している。八木遺跡ではこれらの遺構について、土坑墓の可能性を指摘している。

・遺物廃棄場

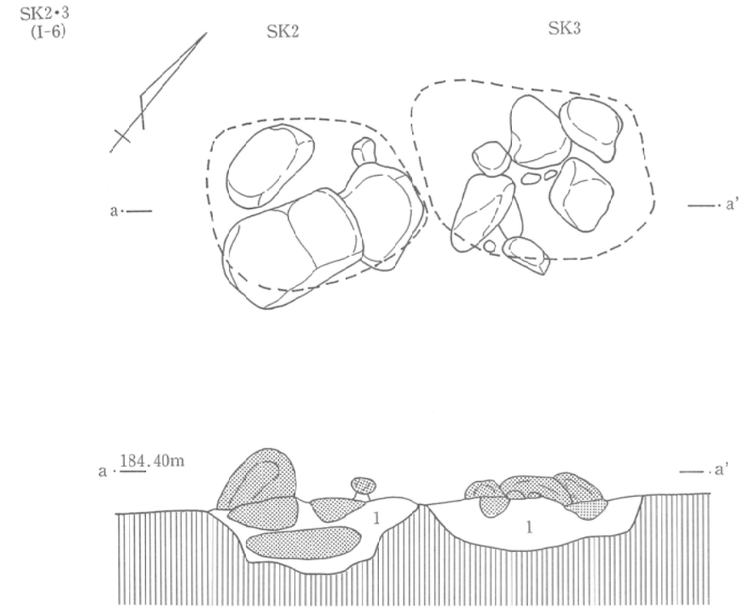
次に遺物廃棄場の様相についてまとめたい。発掘区のなかの土坑の営まれる地点は、第８図のＧラインを境として、急激に川に向かって落ち込んで行く地点でもある（第８図）。この土坑と遺物廃棄場は、どういう関係があるのだろうか。遺物の廃棄はＧラインを境として見た場合に土坑分布域側の、北側の川岸から行われている。土坑群と遺物廃棄場の関係は明確ではないものの、両者が近接する位置関係からすれば、伴出している遺物は同時期であるため、土坑群の祭祀などにかかわって、捨場が形成された可能性も指摘できよう。また、土偶の出土状況などに注目した場合、ここには体の一部分だけが捨てられ、土偶の全身が捨てられているわけではない。このため、丹念に接合しても全身が揃うということはなかった。このことから、この捨場を形成する上で、ただ廃棄するといったことではなく、なんらかの選択行為があったことも伺える。

・泥炭層について

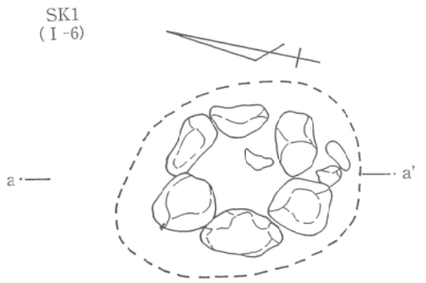
Ｅ―６グリッドの現表土下1.5m～２ｍほどの地点に、泥炭層の形成がみられた（第15図・巻頭カラー・図版６・図版７）。範囲は約３㎡という狭い面積であった。発掘区の中央を走る、旧川道の川床部分にあたり、湧水が激しい箇所であった。このため自然木、種子などの自然遺物が、多量に遺存していたものと考えられる。これらの自然遺物が大量に遺存していた層は、Ｅ－６グリッド西壁土層断面図（第15図）の６層である。検出された自然遺物については、「パリノ・サーヴェイ株式会社」に委託し、自然科学的分析を行った。なお結果については、付編として掲載した。調査ではまず、長さ１ｍ最大幅70cmの自然木（RW１）が検出された（第15図）。その後周囲を拡張した所、種子や土器などの遺物が出土した。自然木のすぐ下には、RW11～RW22がRW１を支えるように残っていた。RW１の樹種はケヤキであり、水辺には生えないため、人為的に運ばれたものと考えることもできる。想像をたくましくすれば、RW11～RW22とRW１は、木道とその基礎の可能性を考えることもできよう。そして、この周囲の箇所に遺跡周辺から、様々な自然遺物が流れ込み堆積したものであろう。遺存していた自然遺物で特徴的なのは、種子類の多さである。食用の種子だけでも、オニグルミ・クワ属・マタタビ属・ブドウ属・トチノキなどが確認された。これらは当時の植物利用の実態の一面を反映しているのであろう。また、食という視点からは、第39図に提示したクッキー状炭化物も重要である。



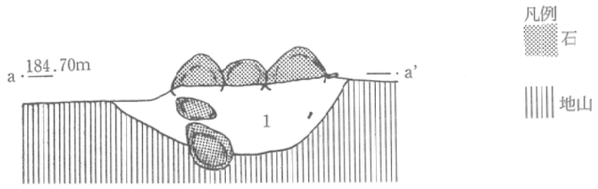
第８図　遺構平面分布図



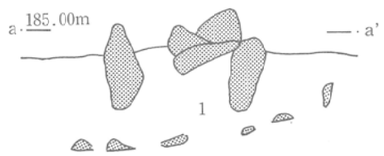
SK2・3土層注記
1　10YR3/4 暗褐色細砂（２～５㎜大の小礫が混じる、硬くしまっている）



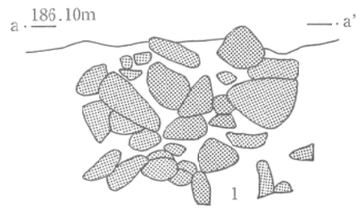
SK1土層注記
1　10YR3/4 暗褐色粘質細砂（炭化粒少量含む。土器片含む）



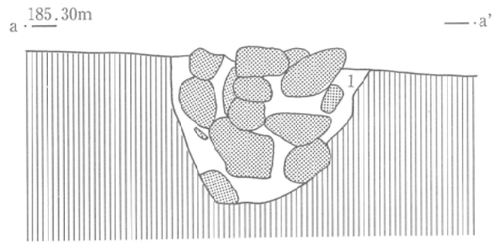
第９図　遺構平断面図（１）



SK40土層注記
1　10YR4/4 褐色細砂



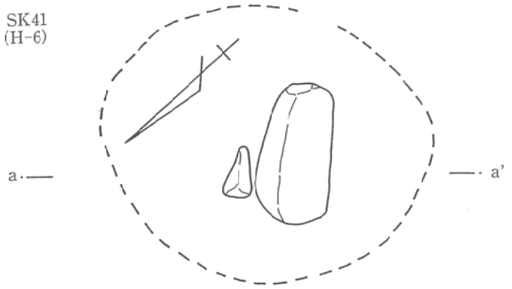
SK39土層注記
1　10YR3/4 暗褐色細砂

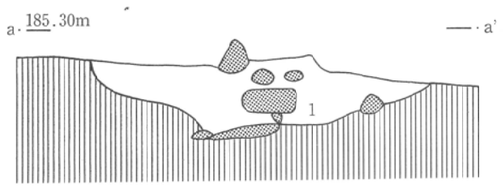


SK9土層注記
1　10YR3/4 暗褐色粘質細砂（炭化粒を含む）

第10図　遺構平断面図（２）

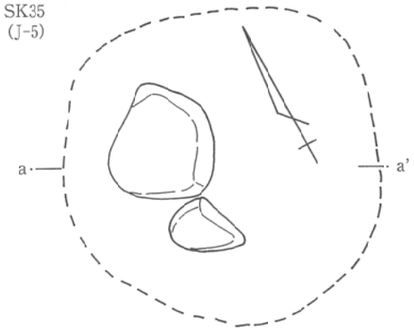
SK41
(H-6)

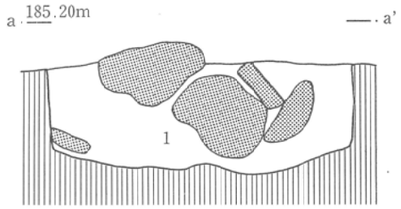




SK41土層注記
1　10YR3/4 暗褐色細砂(炭化粒を少量含む。土器片を含み、硬くしまっている)

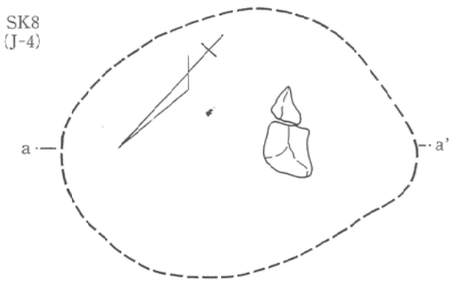
SK35
(J-5)

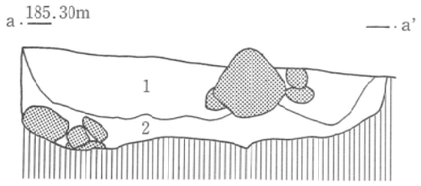




SK35土層注記
1　10YR3/4 暗褐色細砂(炭化粒少量含み、硬くしまっている)

SK8
(J-4)





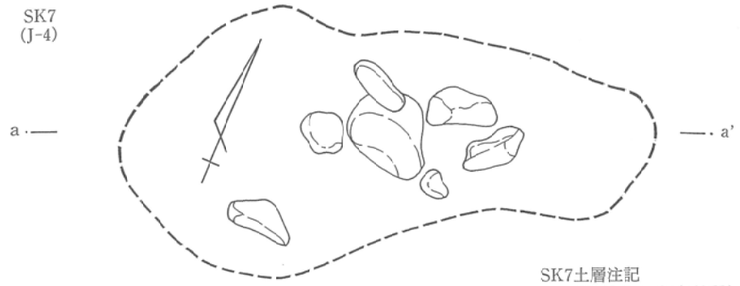
SK8土層注記
1　10YR3/4 暗褐色細砂(2cm大の礫が少量混じる。炭化粒を少量含む)
2　10YR4/4 褐色細砂(1層が斑状に混じる)

凡例
石
地山

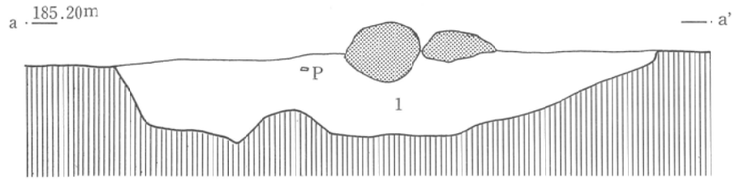
0　1m

第11図　遺構平断面図(3)

SK7
(J-4)

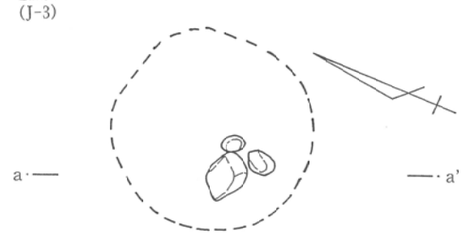


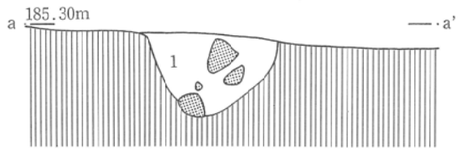
SK7土層注記
1　10YR2/3 黒褐色粘質細砂(炭化粒を少量含み、土器片を含む)



凡例
石
地山

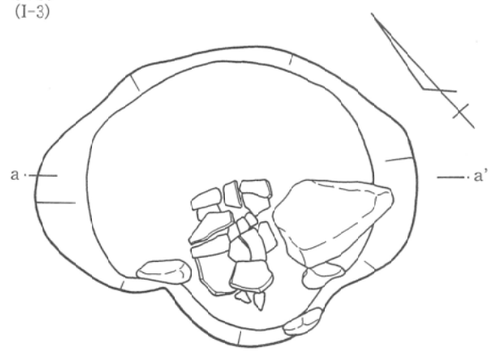
SK38
(J-3)

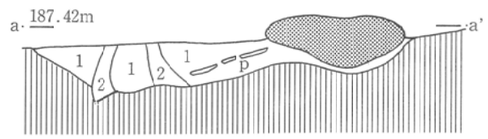




SK38土層注記
1　10YR3/4 暗褐色粘質細砂

SK30
(I-3)

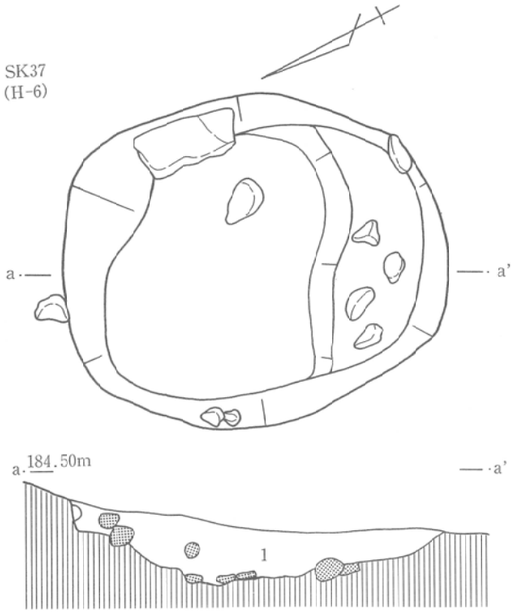




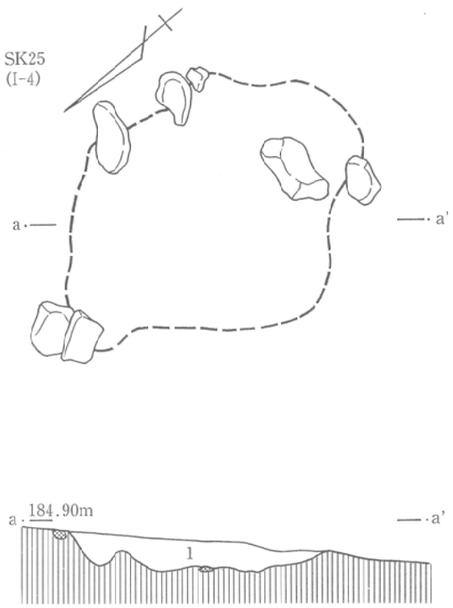
SK30土層注記
1　10YR3/4 暗褐色細砂(炭化粒、土器片を含み、硬くしまっている)
2　10YR3/3 暗褐色細砂(根による攪乱)

0　1m

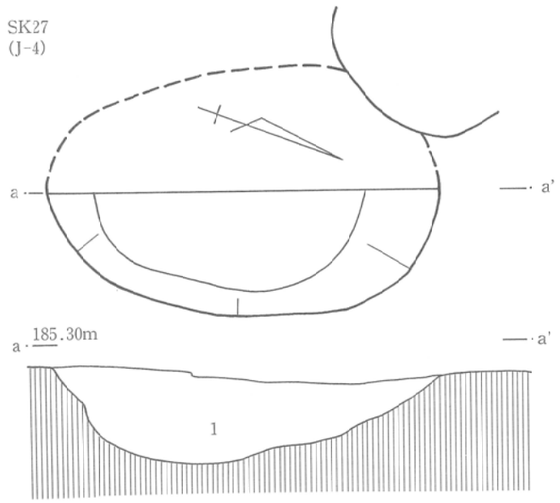
第12図　遺構平断面図(4)



SK37土層注記
1　10YR2/3　黒褐色細砂（５～10cm大の礫が混じる）



SK25土層注記
1　10YR3/4　暗褐色粘質細砂（炭化粒を少量含む）

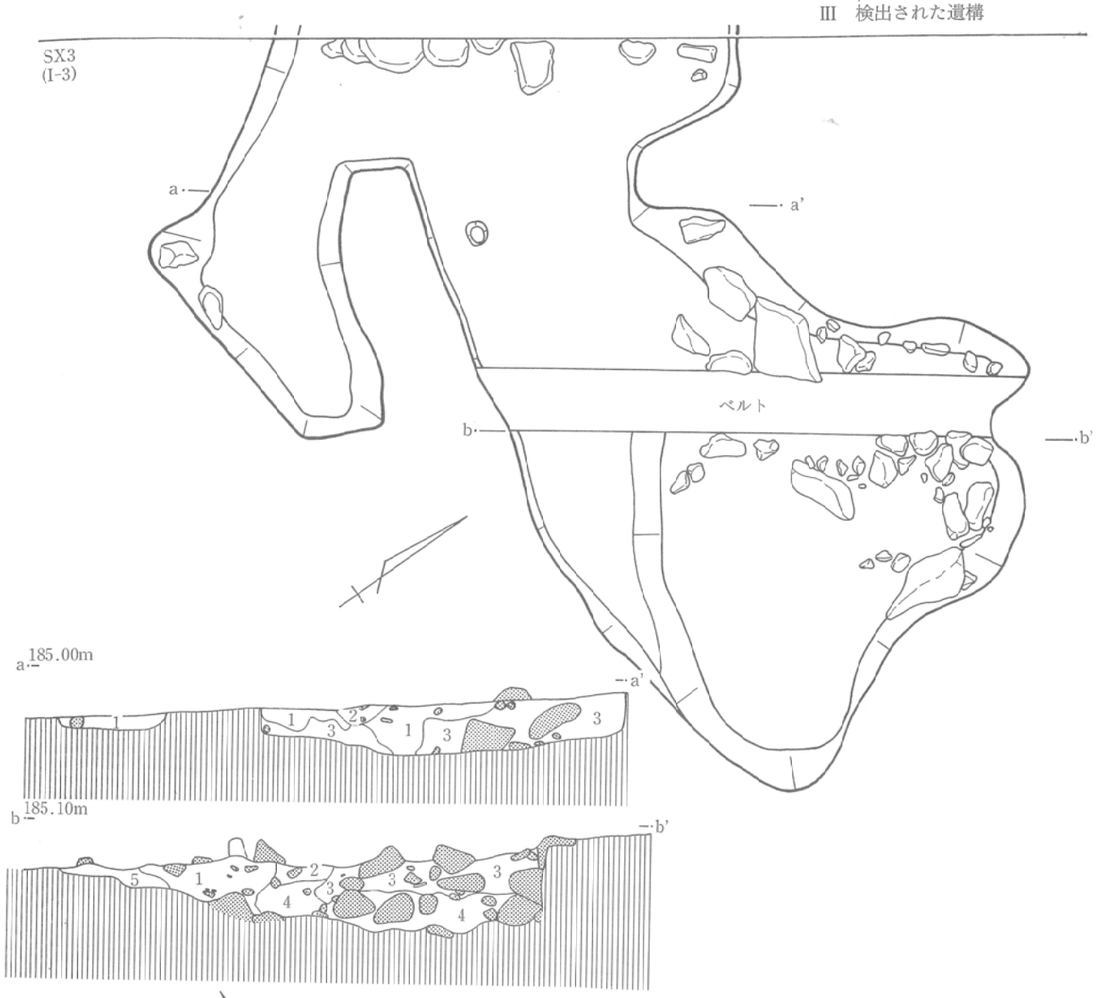


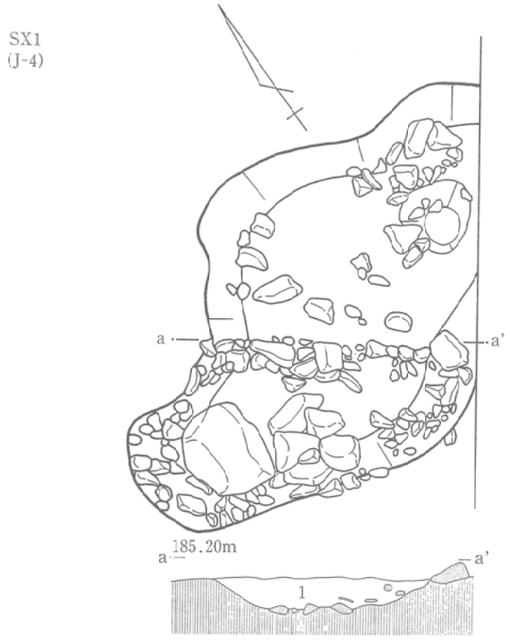
SK27土層注記
1　10YR3/4　暗褐色細砂（土器片含む）

凡例
石
地山

0　1 m

第13図　遺構平断面図（５）





SX3土層注記－a
1　10YR3/4　暗褐色細砂（３～５cm大の礫が混じる。10YR4/4　褐色細砂が斑状に混じる。炭化粒を少量含み、土器片を含む。）
2　10YR3/4　暗褐色細砂（10YR4/6　褐色細砂が斑状に混じる。炭化粒を少量含む）
3　10YR4/4　褐色粘質細砂（１層が斑状に混じる。炭化粒を少量含む）

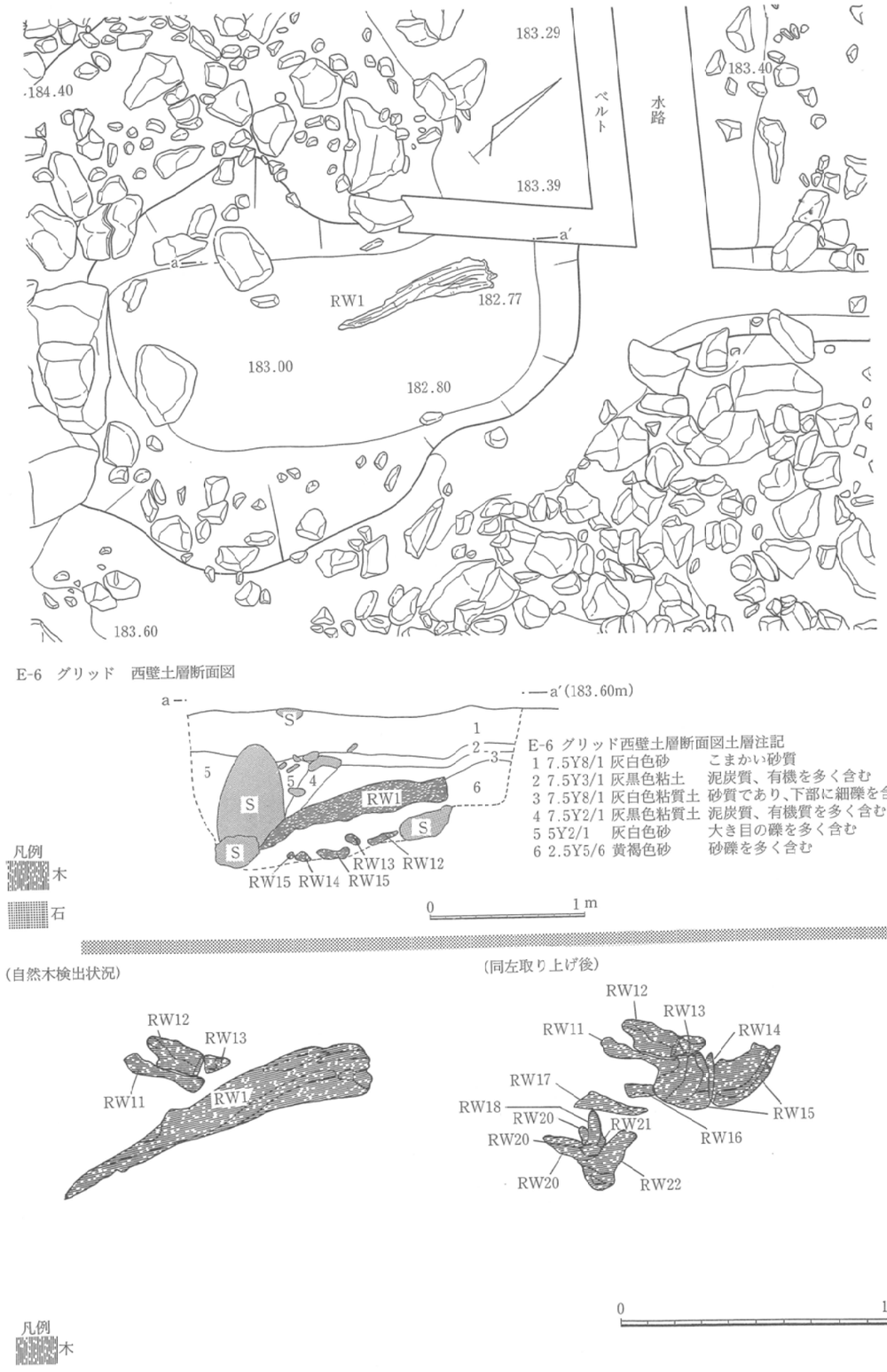
SX3土層注記－b
1　10YR2/2　黒褐色粘質細砂（５cm大の礫が混じる。炭化粒、土器片を含む）
2　10YR3/4　暗褐色細砂（炭化粒を少量含み、硬くしまっている）
3　10YR2/3　黒褐色細砂（１層より粒子が粗く、15cm以上の礫が混じる。炭化粒を含み、土器片を多く含む）
4　10YR4/4　褐色粗砂（２～５mm大の小礫が多量に混じる。北側は15～30cm大の礫が多量に混じる。）
5　10YR4/4　褐色細砂

SX1土層注記
1　10YR3/4　暗褐色細砂（土器片、炭化粒含み、３cm大の礫が少量混じる）

凡例
石
地山

0　1 m

第14図　遺構平断面図（６）



第15図　遺構平断面図(7)

表1　土坑計測値一覧表（凡例）

・形状として、その確認面の平面形により、円・楕円そして、それ以外の形であるものを不整形としてまとめた。
・大きさで（　）としてあるものは、残存値である。

No.	検出地区	形状			大きさ（cm）			備考	挿図
		円	楕円	不整形	長軸	短軸	深度		
SK 1	I—6	◎			57	(45)	30		9
2	I—6	◎			65	(33)	21		9
3	I—6		◎		73	(38)	34		9
4	J—6		◎		101	79	32		
5	J—5		◎		271	189	64		
6	J—5			◎	55	(32)	21		
7	J—4		◎		204	87	30		12
8	J—4	◎			106	85	32		11
9	J—4	◎			68	(34)	48		10
10	I—4	◎			132	121	70		
11	I—6		◎		112	72	26		
12	H—6				155	116	25		
13	H—5	◎			123	111	4.3	RQ42	
14	H—5		◎		138	(96)	36		
15	H—4				58	(28)	13		
16	H—4		◎		127	77	13		
17	H—4	◎			136	126	17		
18	H—4	◎			55	42	19		
19	I—4		◎		140	103	2.6		
20	I—4		◎		97	79	14		
21	I—4			◎	110	77	14		13
22	J—4		◎		153	70	72		
23	J—4		◎		157	83	60		13
24	H—3		◎		87	51	25		
25	H—3	◎			146	138	3.3		
26	I—3		◎		117	97	20		12
27	I—2	◎			81	73	21		
28	I—2		◎		61	42	17		
29	I—2		◎		78	50	8		
30	H—7		◎		164	86	30		
31	J—5	◎			107	105	37	RQ13・43	11
32	I—6		◎		118	100	38		
33	H—6		◎		131	110	25	RQ37・RP86	13
34	J—3	◎			77	(57)	33		12
35	J—5			◎	91	(45)	54		10
36	J—5			◎	97	46	32		10
37	H—6	◎			98	(40)	30		11
SX 1	J—4			◎	(189)	245	31	RQ12・39	14
2	H—3			◎	158	160	15		
3	I—3			◎	355	330	49	RP86	14

Ⅳ　出土した土器

渡戸遺跡からは整理箱で229箱という多量の遺物が出土し、その大半は土器である。出土した土器の総数のうち約95％以上が、遺物廃棄場（第８図）と表示した、G～H―２～８グリッドからの出土である。残りの地区からは約５％ほどが出土したに過ぎない。今回の調査区の全体の面積は、約1,500平方メートルである。G～H―２～８グリッドに所在する、遺物廃棄場は約175平方メートルであり、その面積の全体面積に対する比率は11％に過ぎない。約11％の面積から、約95％の土器が出土しているということは、今回の発掘調査にかかる地点の特殊性として、特筆されるであろう。 第16図に主要遺物平面分布図を載せた。これはG～H―２～８グリッドに所在する、遺物廃棄場における、主要遺物の分布状況を表示したものである。土器の主要な遺物をその出土地点毎に整理したのが、第17図である。主要な遺物については、表２として計測表を作製した。

土器はたいていは破片に分かれて出土している。隣接する２グリッドから得られた破片が接合する事例もある(51)。しかし、２グリッド以上の距離を持って接合するものは少なく、廃棄は一か所から行われたことが推測される。また全体的に時期的にも近接している時期の遺物が多いため、長期間継続的に使用された捨場ではないことも推測できよう。

土器は時期的特徴で第Ⅰ群土器～第Ⅴ群土器に大別し、それぞれに描出された文様あるいは器形の特徴などによってさらに各類に細別した。完形土器あるいは破片資料についてはその掲載箇所毎に、グリッド名などについて注記した。

第Ⅰ群土器（縄文時代後期中葉の土器）

縄文時代後期の磨り消し縄文や貼り瘤をもつ土器を本類とした。土器捨場から検出されている。本遺跡の中心となる土器群である。文様の特徴によりさらに各類に細別する。

・第１類土器（94～98）

地文に太い沈線を持ち、直線や曲線で区画した中を、磨り消すなどの手法で、文様を描くものであり、器壁はほかの類に比較して厚い。器形としては大ぶりな深鉢がある。底部と口縁部形態は明らかではない。出土量は少ない。

・第２類土器（99～103）

浮線上に連続した押圧で鎖状のモチーフを作ったり、２本の平行する沈線間に連続した圧痕を施すもので、器形としては大ぶりな深鉢がある。口縁部には半円などに突出する装飾がのる。出土量は少ない。

・第３類土器（１、104～123）

地文に縄文を持ちながら、数条の平行沈線で、直線や曲線の文様を描くものであり、沈線間は狭くかつ集合沈線化している。文様帯には矩形の磨り消し縄文や、細い帯状の縄文帯を描き、曲線的になる場合もある。無文帯を竹管で充塡したり、連続した刺突をもつものもある。出土量はやや多い。

・第４類土器（２、３、124～136）

地文に縄文を持ちながら、沈線の区画により直線や曲線の文様を描くものであり、文様帯には、細い帯状の縄文帯を描き、曲線的になる場合もある。口縁部には、大ぶりな波状の突起がつくものと、分厚くかつ大ぶりな装飾突起が付くものがある。器形は深鉢と壺型土器がある。深鉢は、直立しながら頸部で、ややすぼまりながら外反するものと、胴部で丸みを持ちながら、ゆるやかに口縁部にかけて開くものとがある。壺型土器では肩に段があるものと、口縁部に向かってゆるやかに伸びるものとがある。出土量はやや多い。

・第５類土器（４、５、12～16、18～22、25～26、28～30、35、139～168）

第４類と同様な文様構成を持つものであるが、縄文による文様構成が曲線的なものをまとめた。縄文による文様構成が半孤を繰り返す鉢型の土器（12、13、14）が見受けられる。器形は深鉢と鉢型土器・壺型土器がある。第４類に比較してやや器形が大ぶりになる。また、頸部で内湾する器形（143、145、146）がある。皿型あるいは大きい椀となる器形(165～167・169)がある。なお、高台を持ち椀がのる器形があり、脚部（33、34、36～42）が出土している。これらは、第４類～第６類のいずれかに含まれるものと考えておきたい。この類の出土量は多い。

・第６類土器（170～189）

第４～５類土器と同様な文様構成を持つものであるが、文様が曲線的であり、無文帯や磨り消しの幅が狭いものである。口縁部には断面形が鶏卵状をなす扁平な突起（174、177）が付く。器形の大小はあるがいずれも深鉢型を呈する土器である。この類の出土量は少ない。

・第７類土器（７、８、27、178～189）

第４～５類土器と同様な文様構成を持つものであるが、縄文が残されている箇所には、節の細かい羽状縄文が施される。口縁部は大ぶりな波状を呈するもの（187、188）と、断面形が鶏卵状を呈する大ぶりな突起（180）がつくものの２種がある。この類の出土量は少ない。

・第８類土器（46、190～196）

頸部に無文帯によって区画された、幅広の縄文帯や集合沈線帯（194）に垂下する、蛇行する沈線を持つもので、やや内湾する深鉢と、小型の椀（46）や大ぶりな壺（195）などの器形がある。出土量は少ない。

・第９類土器（47～49、197～233）

頸部の縄文帯に数条の沈線を巡らせたものに、垂下する蛇行する沈線を持つものである。一部には沈線間を垂直に区切るだけ（232）の構成もある。個別的な構成は第８類土器に似るが、沈線間は狭くなっている。口縁部の突起は大きい。出土量は多い。

・第10類土器

集合沈線により文様を構成するものであり、鋸歯状の構成（237、238、240～242）をとるものや、刺突との併用（234）などもある。器形は深鉢型であり、口縁部には大ぶりな突起が付く。特殊な器形として器台になるもの（238、242）もある。出土量は少ない。

・**第11類土器**（11、243～248）

細い集合沈線とＳ字状沈線の組み合わせ（243～247）と、ボタン状貼付（248）により文様を構成するもので、器形は壺型となる。おそらくは注口土器となるものと考えられる。出土量は非常に少ない。

・**第12類土器**（51、52、249～255）

表面は無文であり、内面に平行する沈線とＳ状沈線や縄文を併用した文様をもつもの。大ぶりな鉢型の器形となる。

・**第13類土器**（43、44、256～284）

地文の縄文を沈線で区画した後、沈線間を磨り消すことによって文様を構成するもの。残された区画された縄文部分に連続した刺突をもつ。深鉢型の器形が多いが、朝顔型に開く深鉢に台がついたもの（43）などもある。口縁部には数単位の大ぶりな突起を持つ。突起は扁平で断面形が鶏卵状のもの（256～261）、断面形が筒状になるもの（264）、円孔をもつもの（264）など、数種類がある。また、縄文地文に刺突のみで構成されるもの（279～284）もある。この類の出土量は多い。

・**第14類土器**（17、54、285、286）

連続押圧と磨り消しによる曲線的な縄文を持つものである。深鉢型（17）と壺型（54）の器形がある。この類の出土量は少ない。

・**第15類土器**（287、288）

隆線により、文様を施したものであり、出土量は少ない。

・**第16類土器**（55～78、303～317）

器面が縄文あるいは無文などの装飾となるため、特徴的な文様を持たない土器群を一括した。深鉢型の土器には、頸部で屈曲しながら立ち上がり、口縁部にかけて無文帯を巡らすものが特徴的である（58、59、307、308）。撚糸文（314）や櫛描き（55、303～305）のものも少数ある。壺型土器（70、71）や底の丸い椀型（73～77）が少数ある。

・**第17類土器**（80～93）

注口土器の注口部分を一括した。

第Ⅱ群土器（縄文時代後期中葉から末葉の土器・289、290）

貼り瘤を持つ一群である。出土量は非常に少ない。

第Ⅲ群土器（縄文時代晩期の土器・17、291～299）

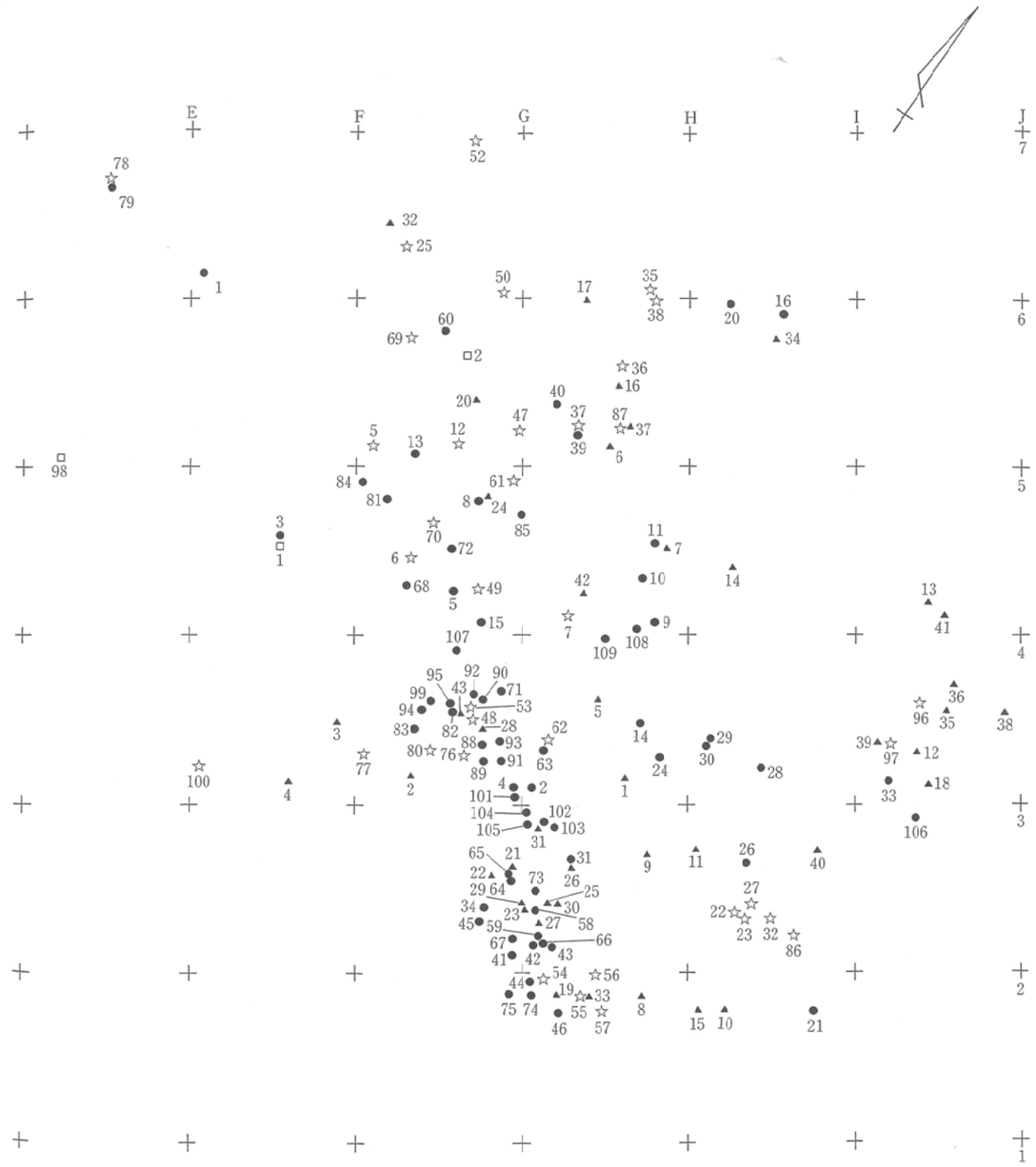
三叉文を持つもの（291、292）やＣ字文をもつもの（296）、さらに工字文（297、298）や変形工字文（293）などがある。299は注口土器の頸部と思われる。出土数量は非常に少ない。

第Ⅳ群土器（弥生時代の土器・301、302）

半裁竹管文により、重層した弧線を横位に描くものであり、２点のみの出土である。

第Ⅴ群土器（古代の土器・300）

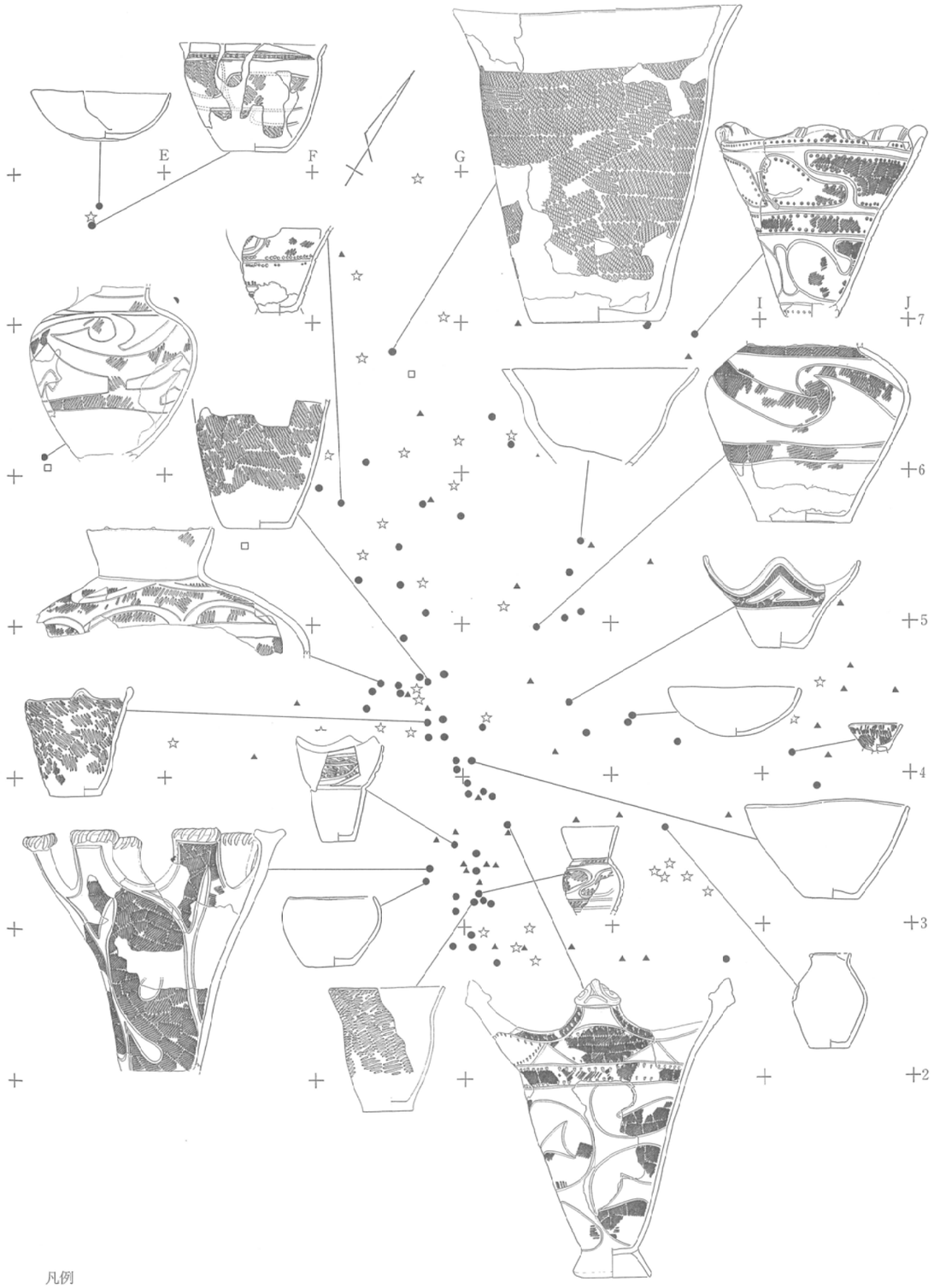
須恵器破片が１点得られている。



凡例

☆ 土偶(RP)
● 土器・土製品(RP)
▲ 石器・石製品(RQ)
□ 自然遺物(RN)

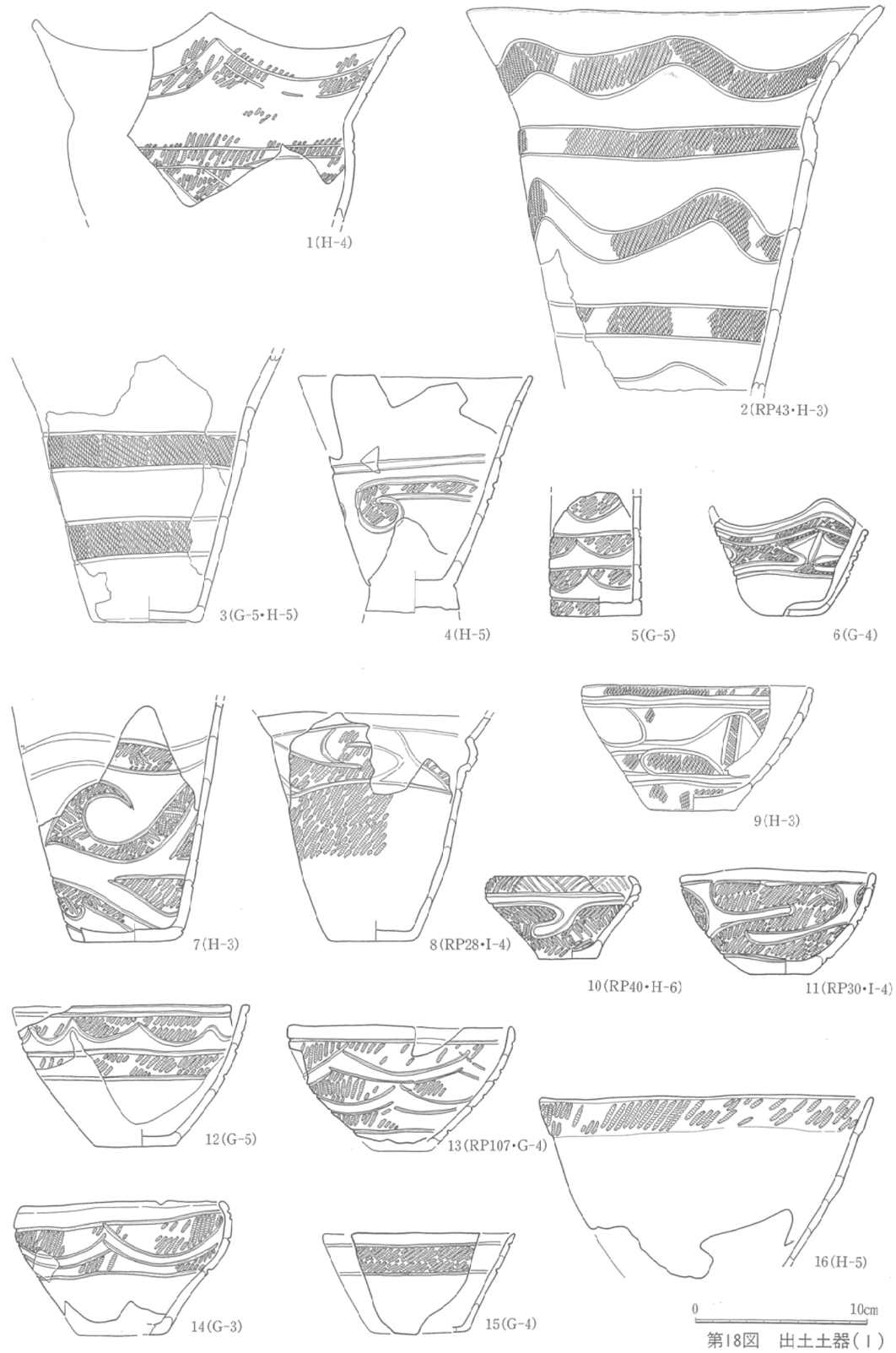
第16図　主要出土遺物　分布図



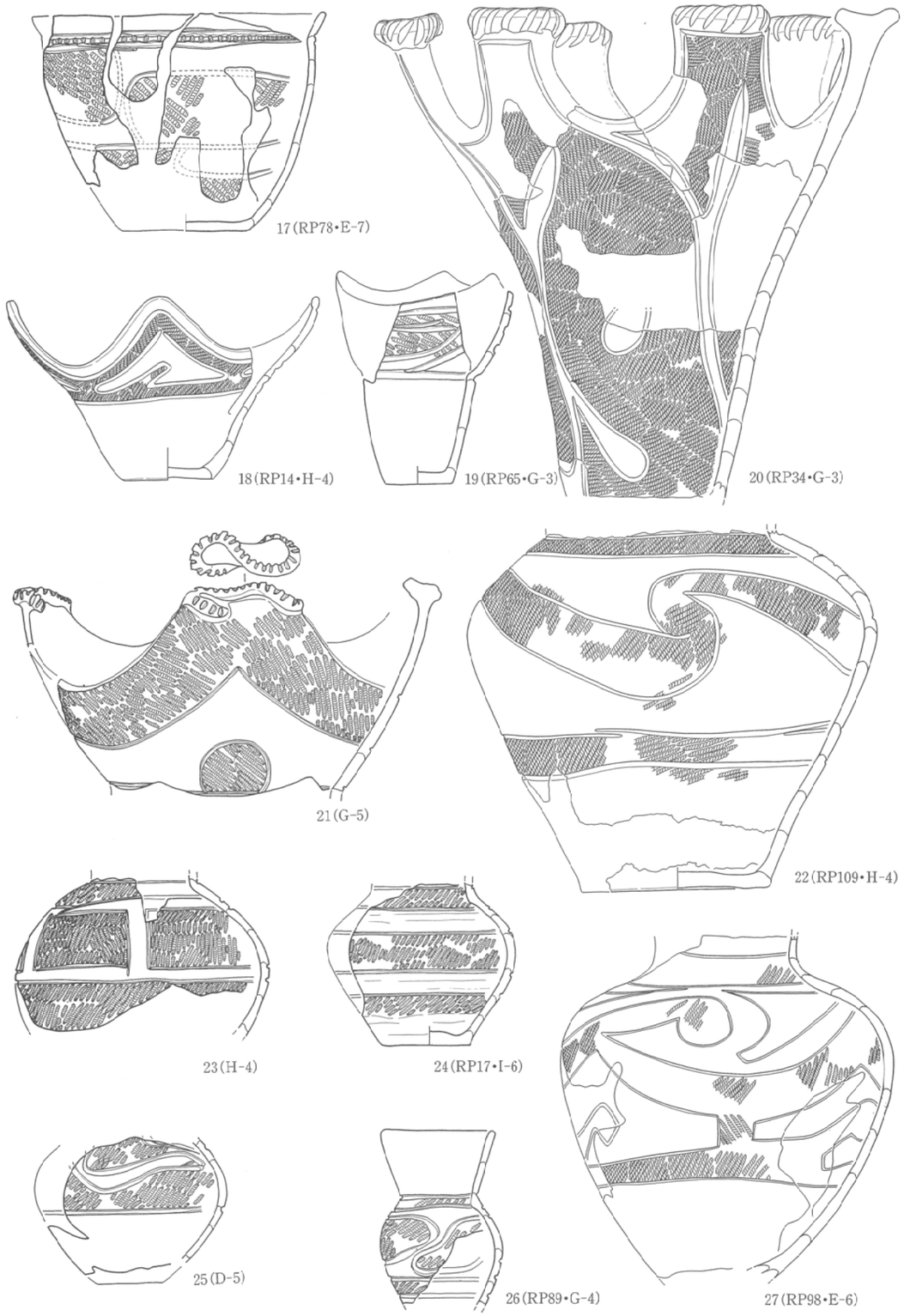
凡例

- ☆ 土偶
- ● 土器・土製品
- ▲ 石器・石製品
- □ 自然遺物

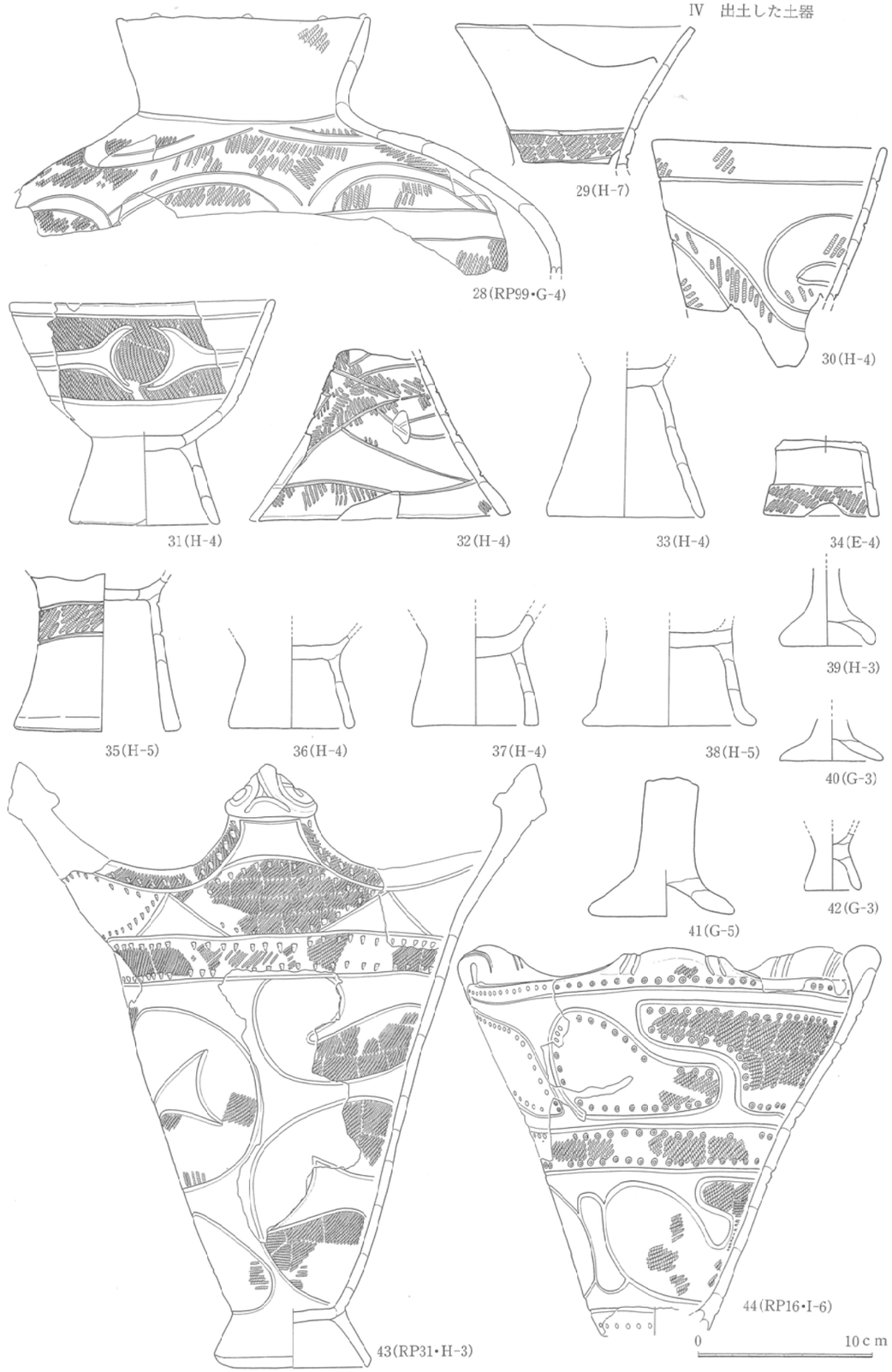
第17図　主要出土土器　分布図



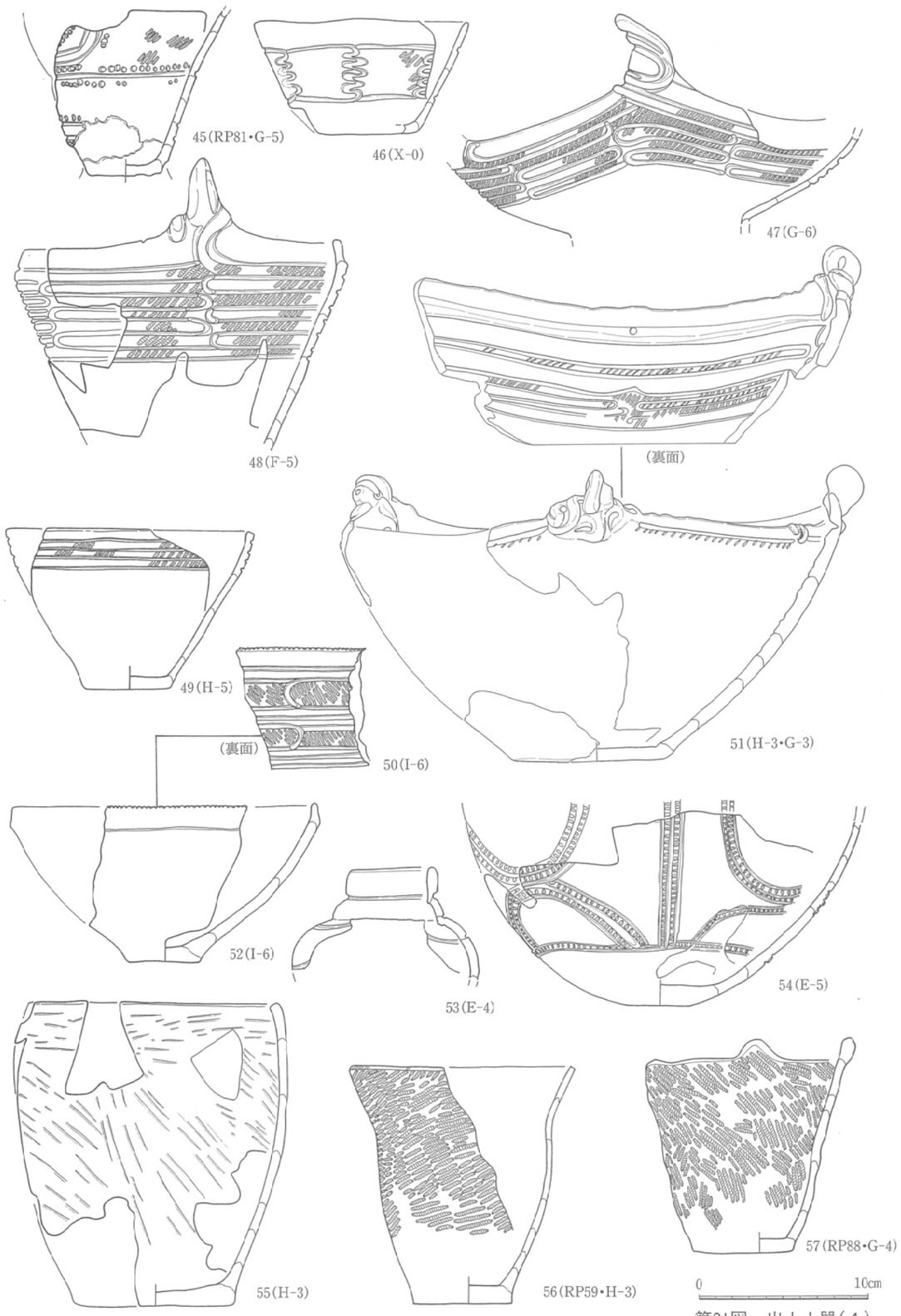
第18図　出土土器(Ⅰ)



第19図　出土土器(2)

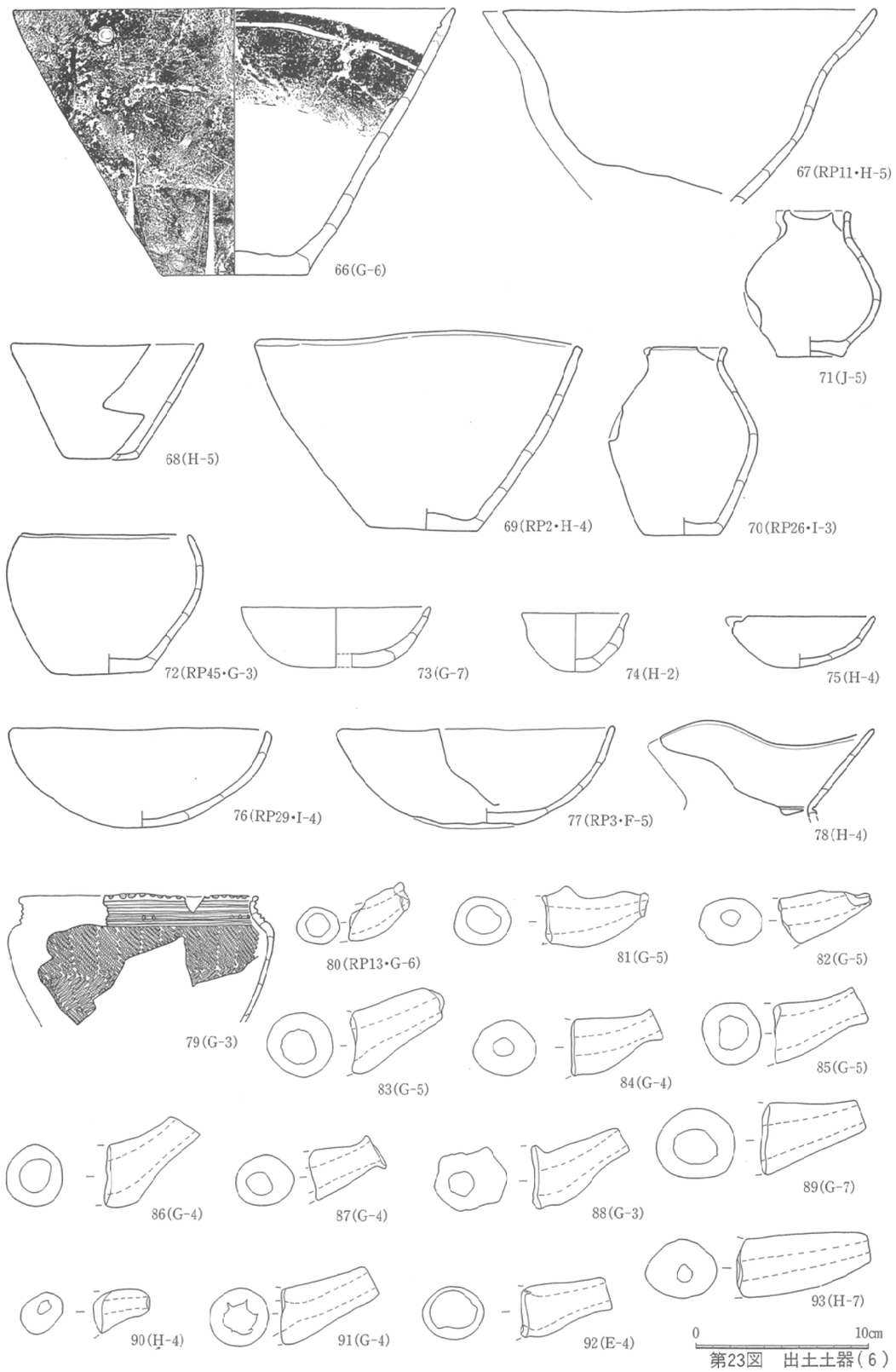


第20図　出土土器(3)

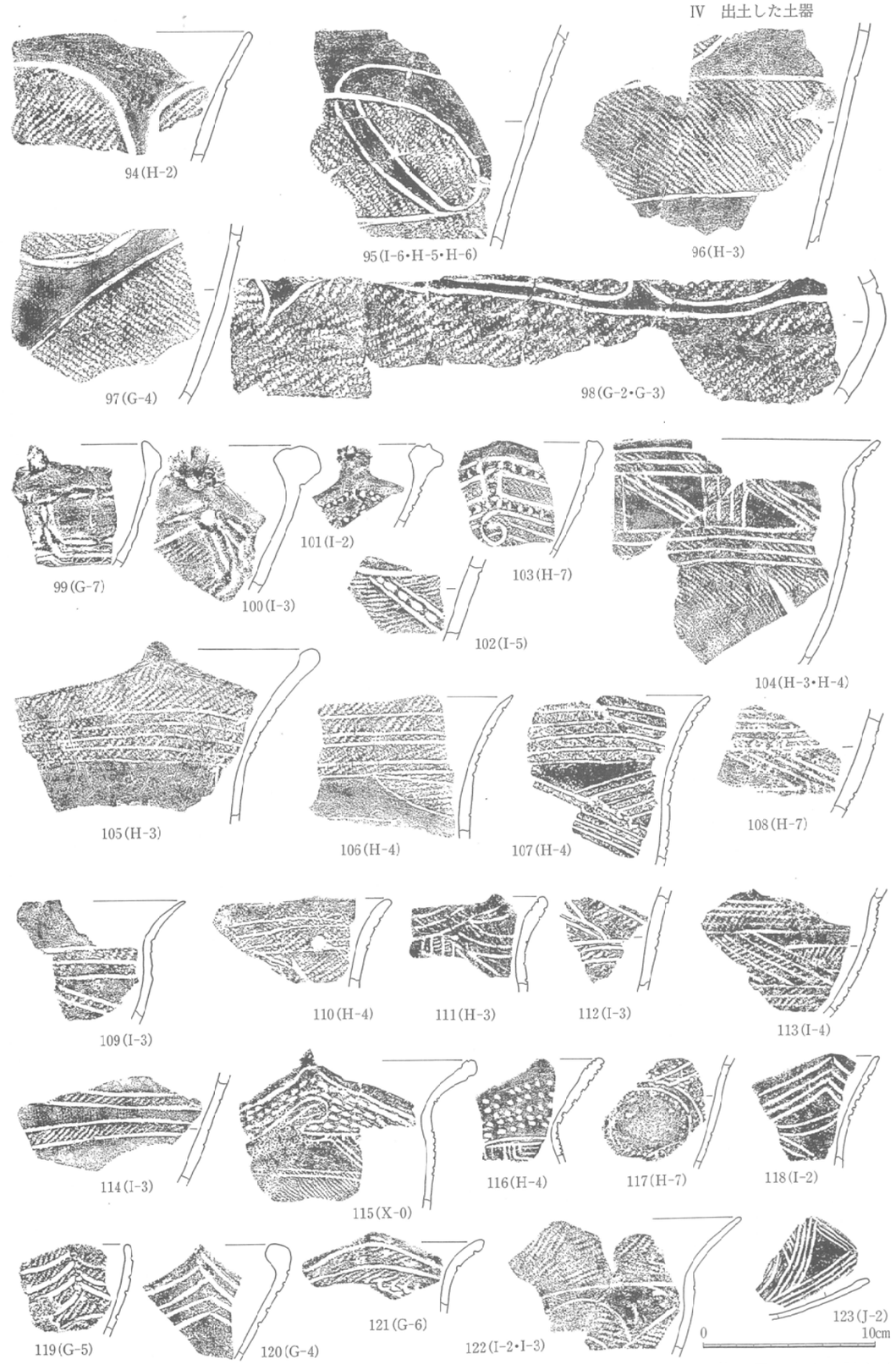


第21図　出土土器(4)

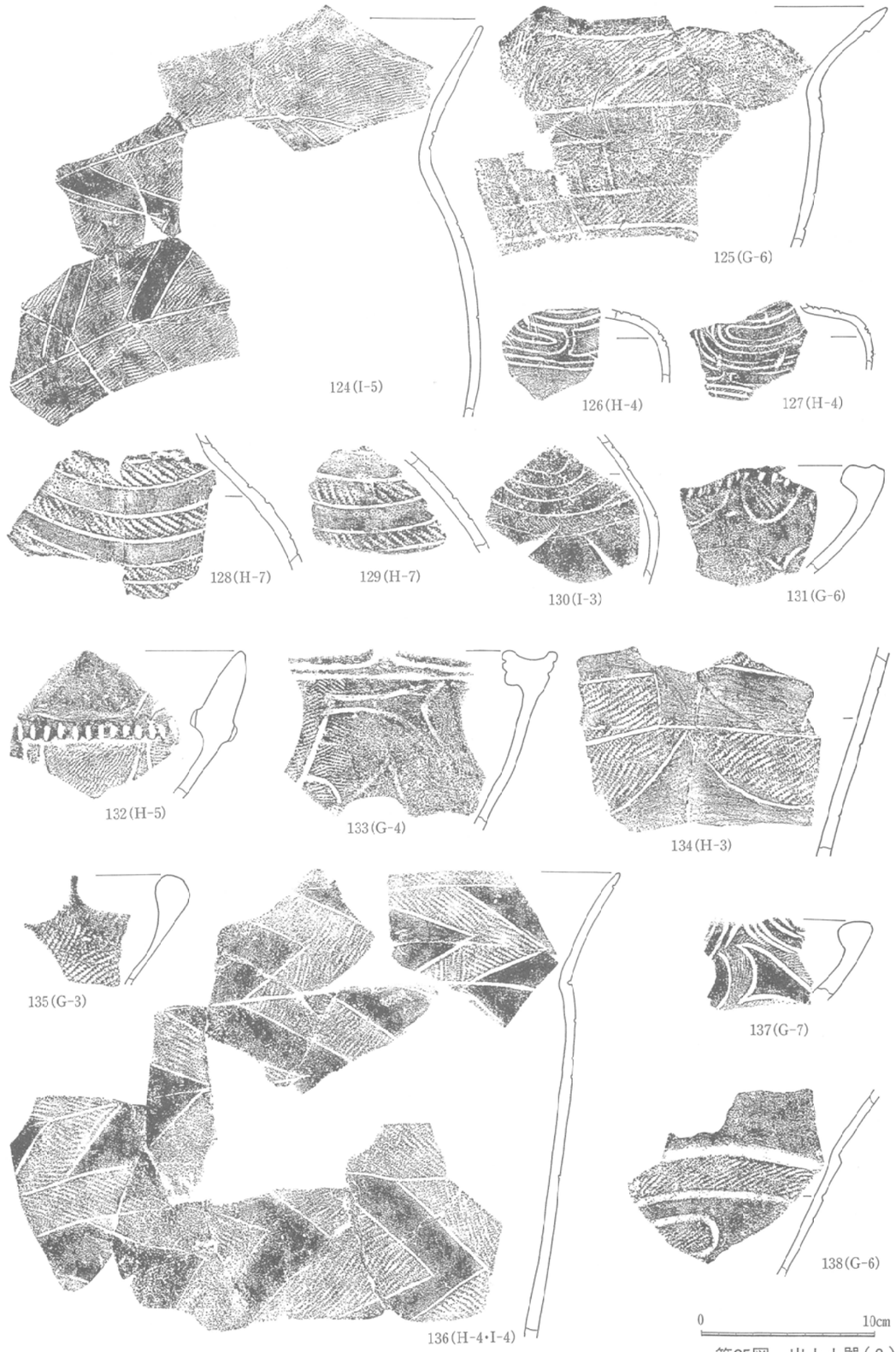
第22図　出土土器(5)



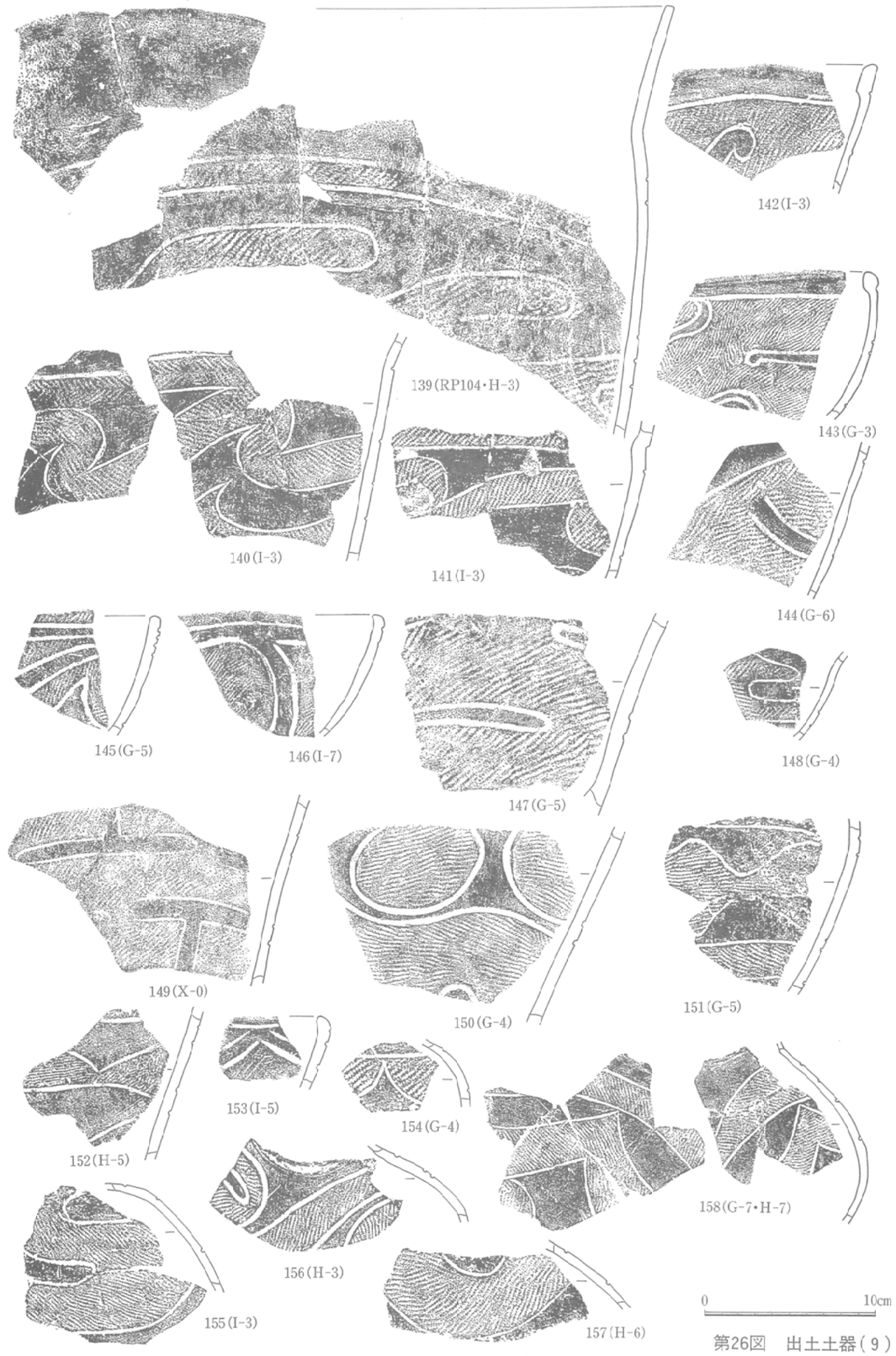
第23図　出土土器（６）



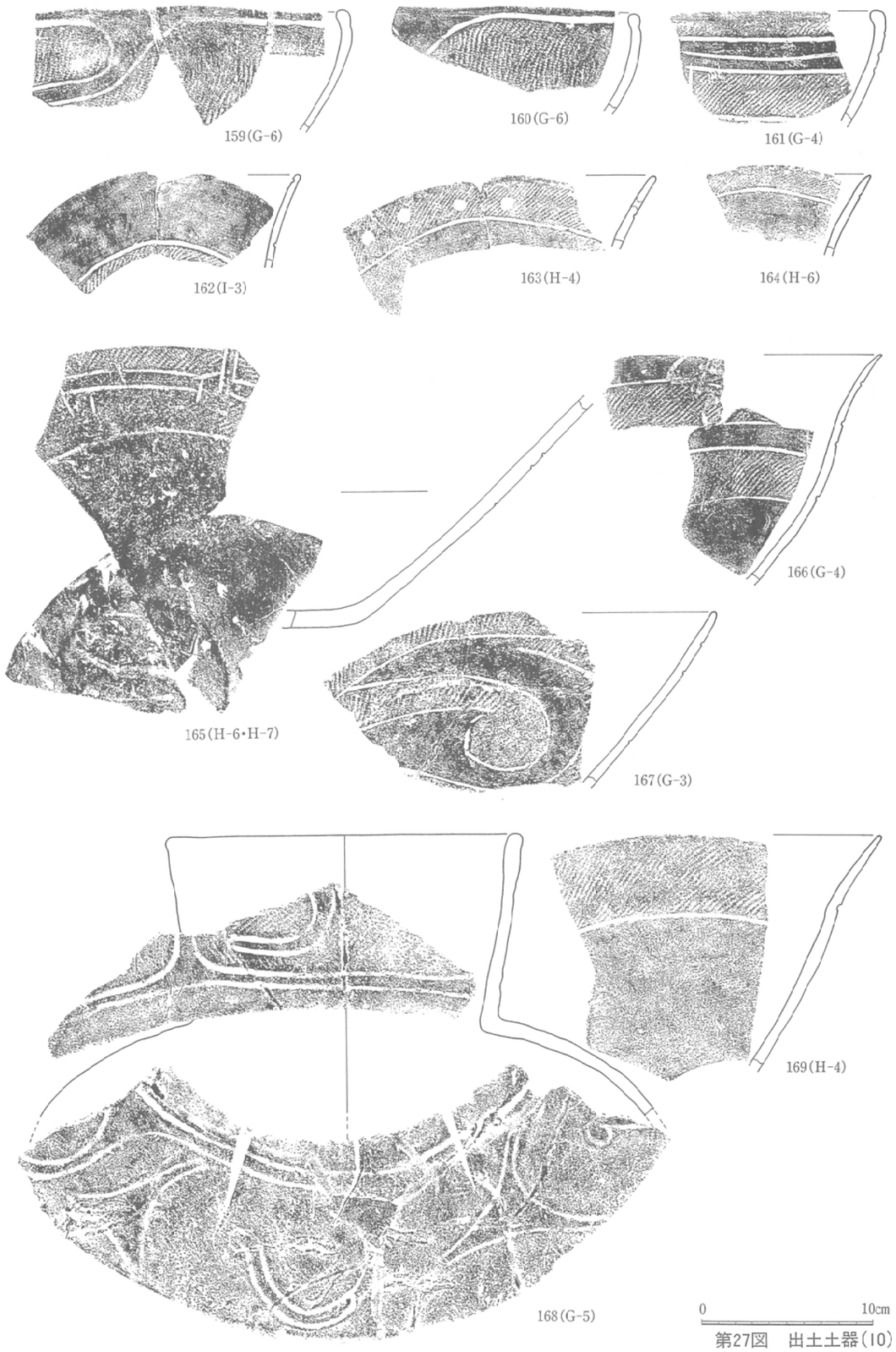
第24図　出土土器（７）



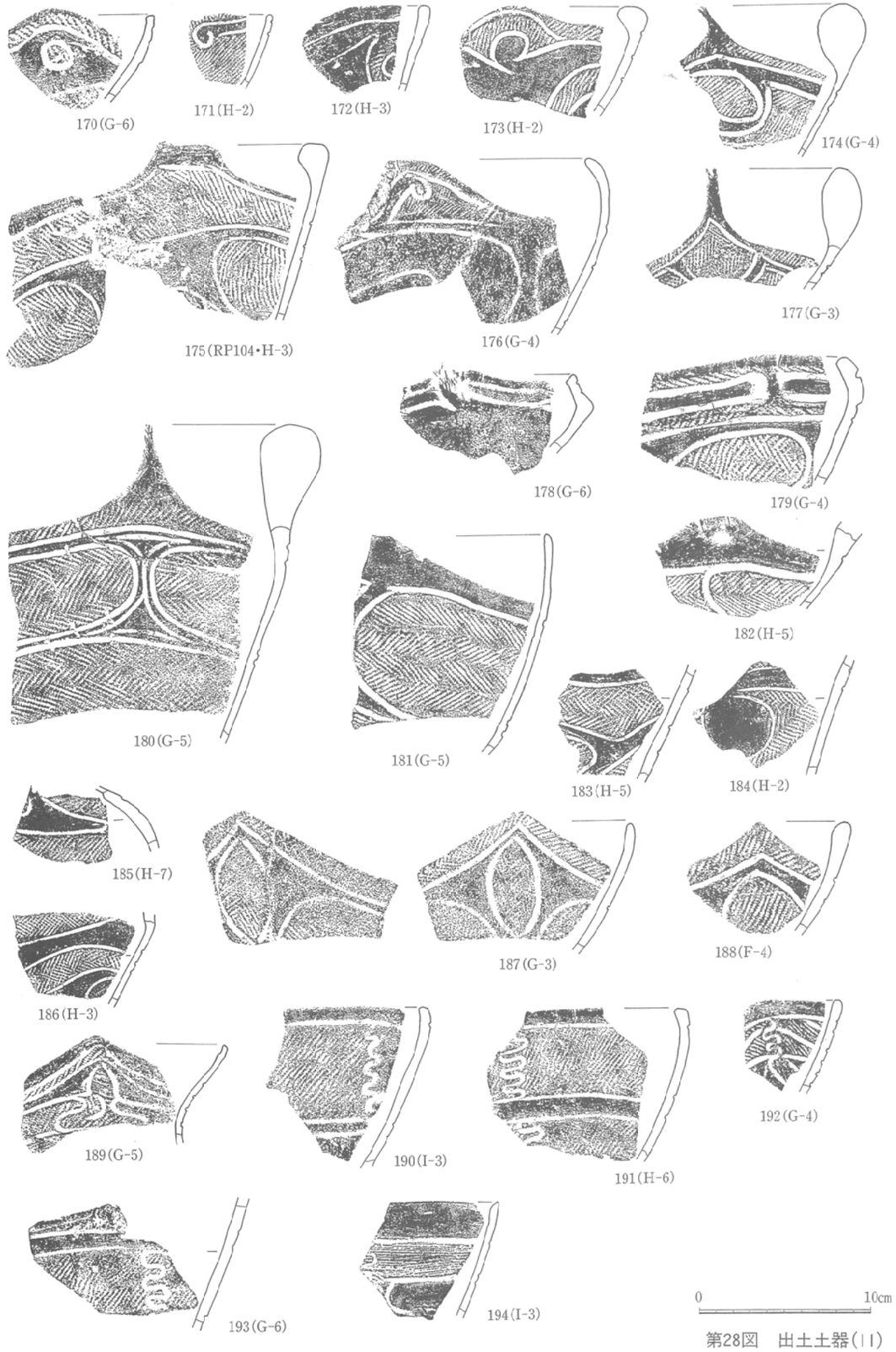
第25図　出土土器（８）



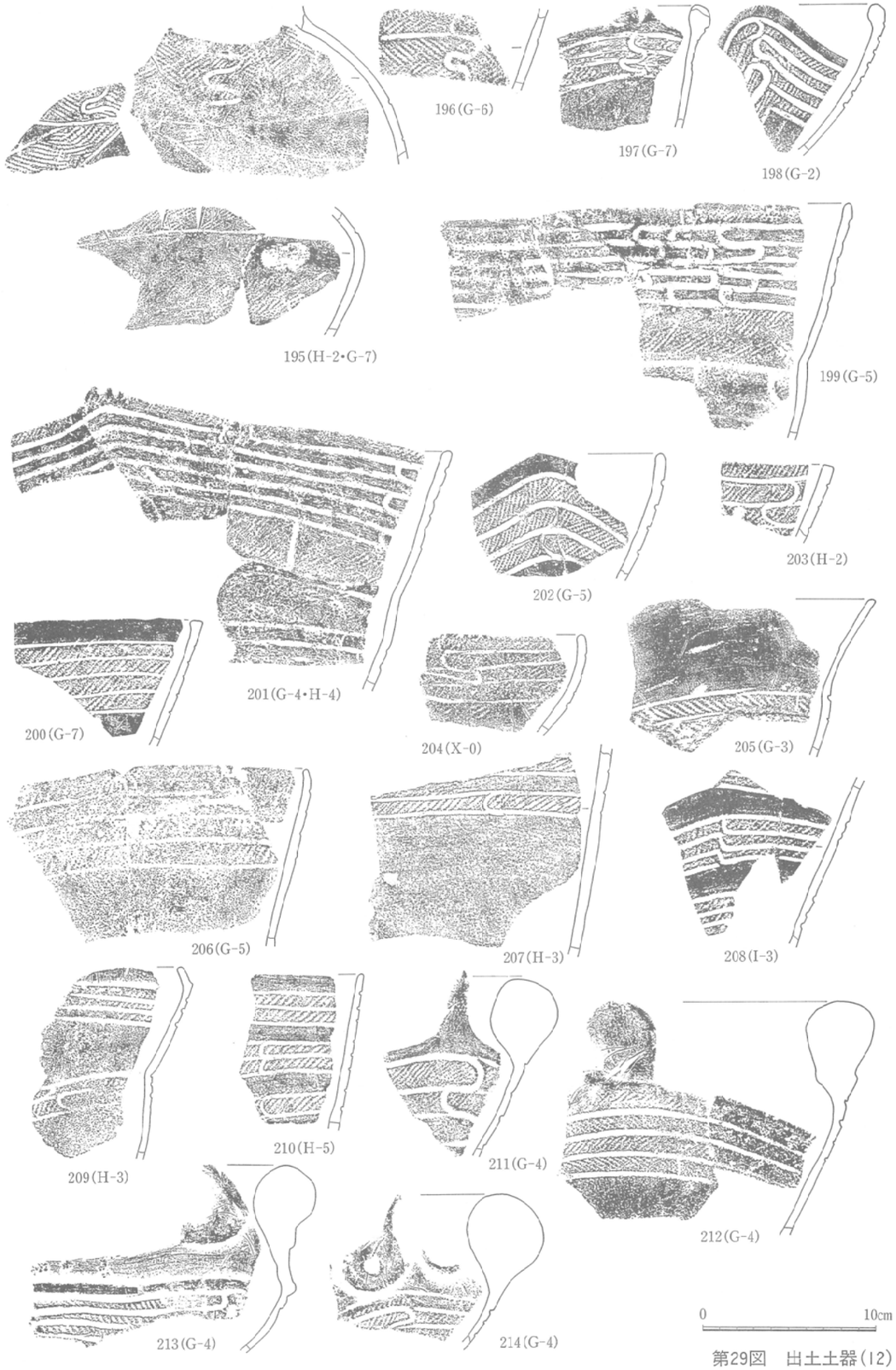
第26図　出土土器（９）



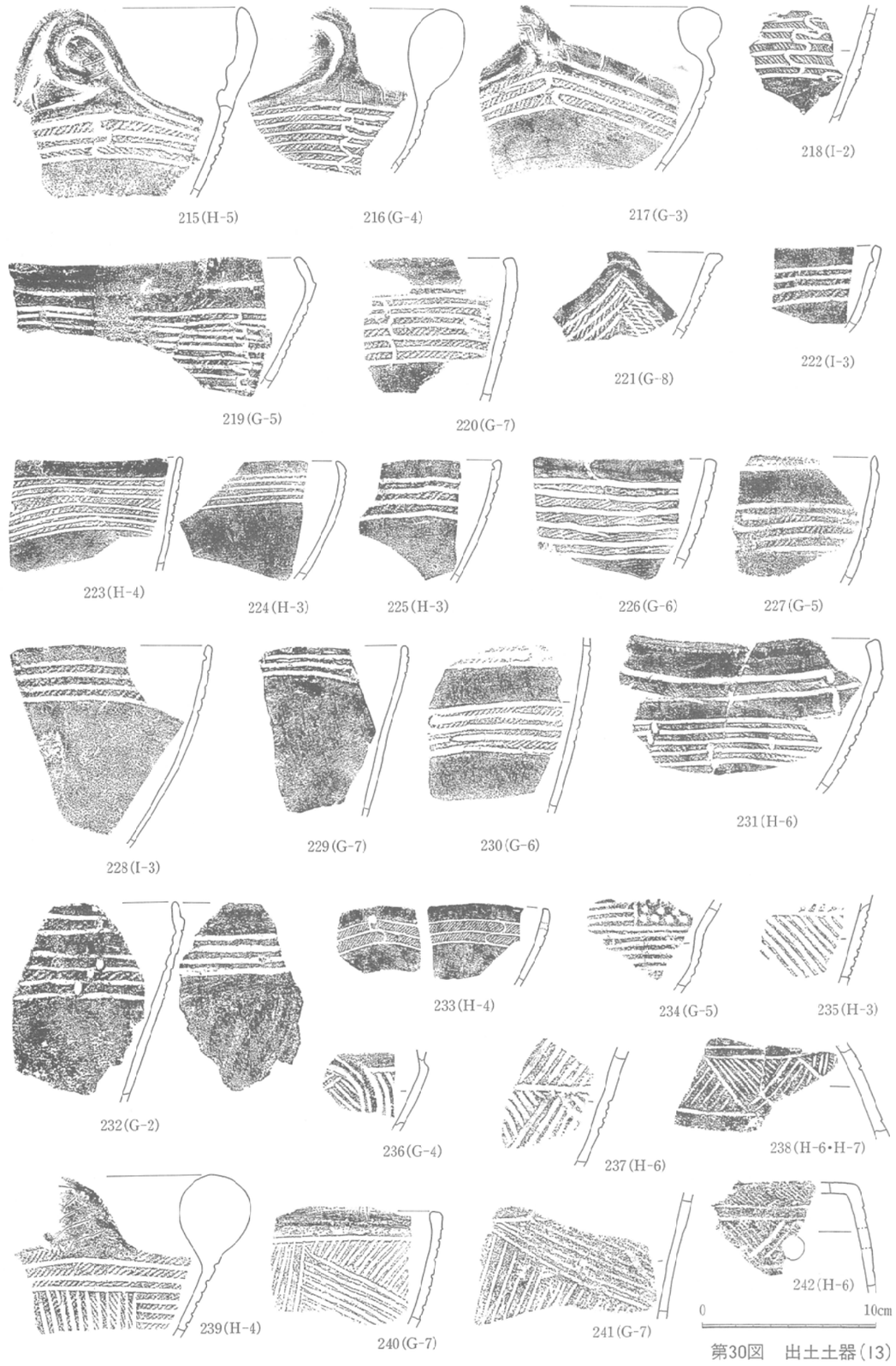
第27図　出土土器(10)



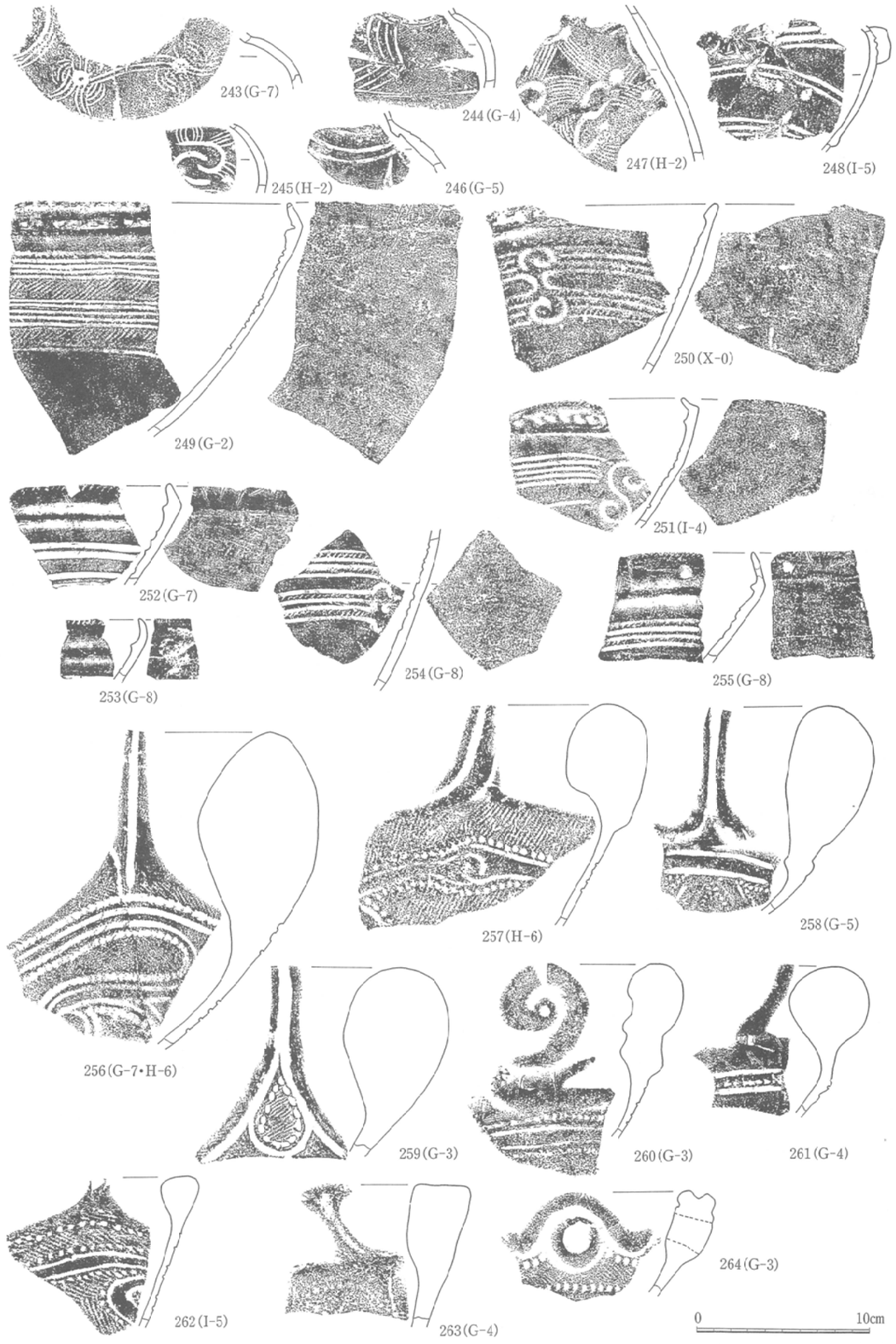
第28図　出土土器(11)



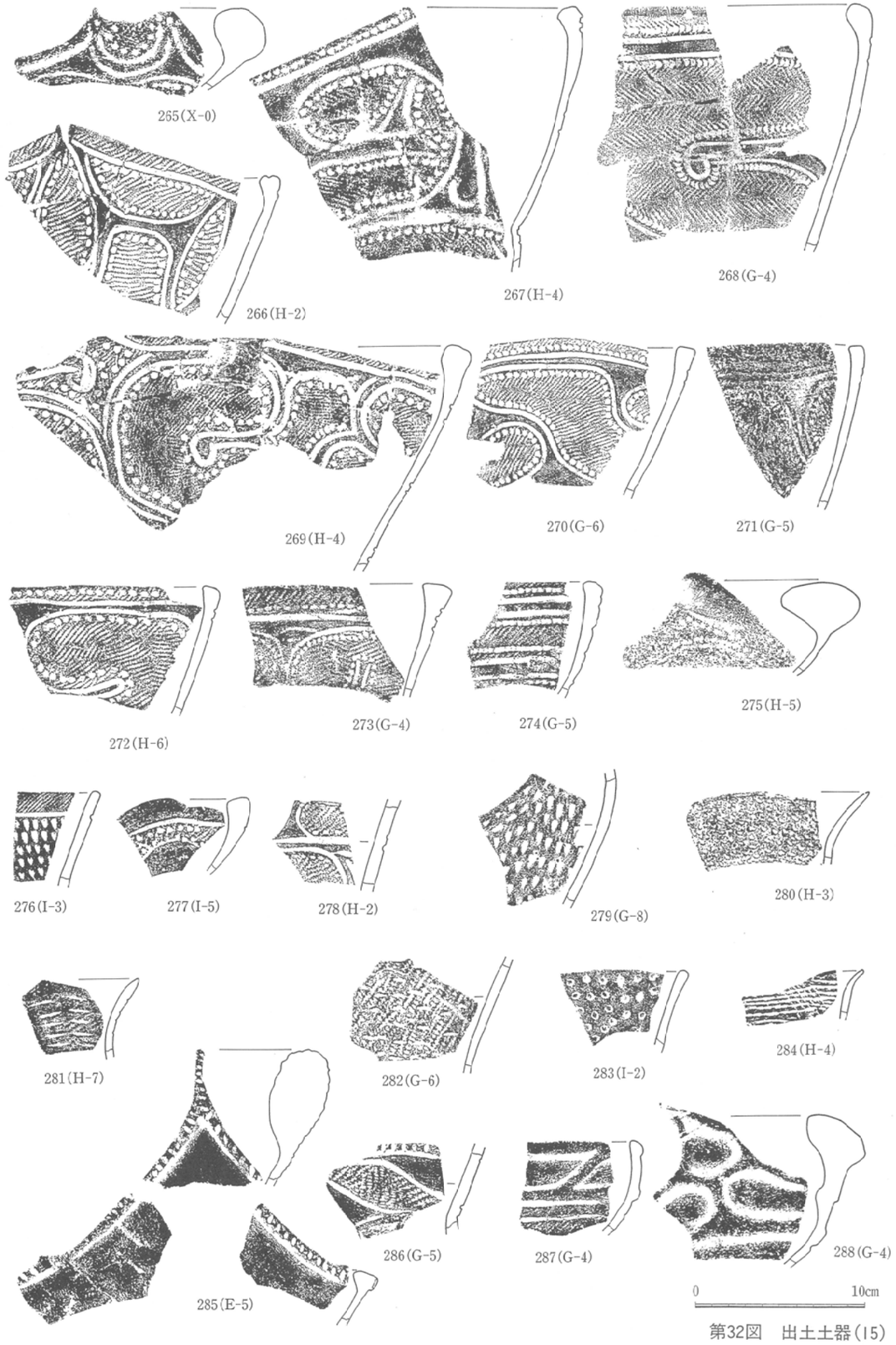
第29図　出土土器(12)



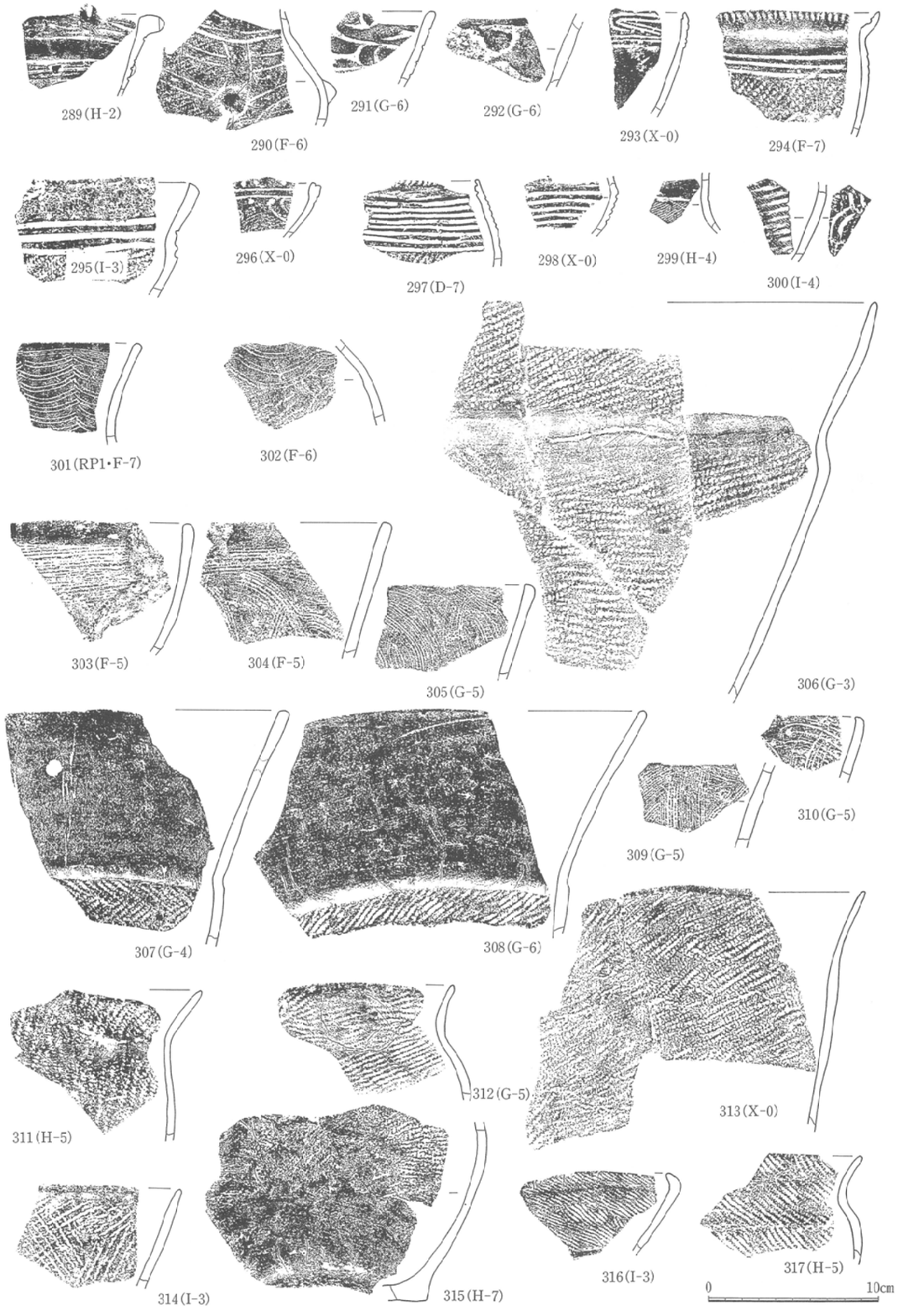
第30図　出土土器(13)



第31図　出土土器(14)



第32図　出土土器(15)



第33図　出土土器(16)

表2　出土土器計測値一覧表（凡例）

・出土土器について、器高はその高さ、見かけの最大の幅を最大幅、底部の大きさを底径とした。
・大きさで（　）としてあるものは残存値である。

No.	出土区	RPno	大きさ（cm）			挿図
			器高	最大幅	底径	
1	H—3	43	22.5	24.5	(11.8)	18—2
2	G—3	34	28.3	30.3	(8.7)	19—20
3	H—3	31	30.0	29.8	9.0	20—43
4	G—6	—	15.6	25.0	8.5	23—66
5	G—4	—	9.6	16.8	(10.3)	22—64
6	G—5	85	10.0	15.8	6.0	
7	I—6	16	22.5	23.3	5.9	20—44
8	G—4	99	14.5	31.3	—	20—28
9	H—3	—	16.2	32.0	9.5	21—51
10	G—6	60	36.3	33.1	13.7	22—58
11	H—5	—	10.8	23.5	13.4	19—21
12	H—5	—	9.0	14.2	5.0	21—49
13	H—4	—	3.2	8.7	—	23—75
14	G—3	—	6.7	12.6	5.5	18—14
15	H—5	—	8.8	9.1	(7.5)	
16	H—7	—	8.3	7.2	(5.7)	
17	H—3	—	8.4	7.7	4.5	22—60
18	G—3	—	4.0	11.6	3.8	
19	H—3	—	18.1	13.3	9.8	21—55
20	G—4	90	15.1	14.8	7.8	22—62
21	F—5	—	16.1	19.5	11.0	21—48
22	H—5	—	10.7	14.3	(10.4)	18—16
23	H—3	59	14.1	13.4	5.2	21—56
24	H—3	—	12.7	15.0	8.6	20—31
25	I—4	28	13.0	13.0	5.1	18—8
26	H—7	—	15.1	12.8	5.3	22—59
27	H—5	—	15.6	15.3	6.2	18—3
28	E—6	98	20.5	18.5	(7.0)	19—27
29	H—4	109	21.0	23.3	10.3	19—22
30	F—5	3	5.2	15.2	(6.0)	23—77
31	J—4	33	3.2	6.4	3.0	22—61
32	I—4	29	5.5	15.0	—	23—76
33	G—4	107	7.0	13.0	3.4	18—13
34	G—5	81	9.5	11.8	3.8	21—45
35	I—2	21	5.4	10.5	4.0	
36	I—3	26	10.6	8.0	4.8	23—70
37	H—4	2	11.3	19.7	6.8	23—69
38	H—3	—	7.3	13.5	5.0	18—9
39	H—4	14	10.7	18.2	5.3	19—18
40	H—5	—	13.5	13.4	5.2	18—4
41	G—4	88	11.2	12.1	6.0	21—57
42	H—4	—	9.5	13.8	(5.0)	20—32
43	G—5	—	7.8	14.0	4.5	18—12
44	H—3	—	13.5	—	9.8	
45	G—6	—	—	24.0	—	21—47
46	E—5	—	9.5	19.0	5.2	21—54

No.	出土区	RPno	大きさ（cm）			挿図
			器高	最大幅	底径	
47	G—4	89	10.0	6.3	(4.6)	29—26
48	G—3	65	9.8	—	4.2	19—19
49	I—6	17	19.2	10.8	5.2	19—24
50	H—6	40	5.2	9.3	3.5	18—10
51	I—4	30	6.0	11.3	3.8	18—11
52	G—3	45	8.8	9.8	6.5	23—72
53	G—5	72	10.0	18.7	12.2	
54	H—5	11	11.8	22.0	—	23—67
55	G—6	—	12.5	20.0	—	
56	E—7	78	12.2	16.6	7.2	19—17
57	G—6	60	23.2	29.8	—	22—63
58	G—5	—	23.7	—	12.5	22—65
59	G—5	—	17.5	36.5	—	
60	H—3	—	12.5	—	(6.2)	
61	G—3	—	8.8	11.6	(7.0)	
62	H—3	—	10.3	10.5	6.0	18—7
63	H—7	—	8.2	13.5	(6.6)	20—29
64	G—5	—	8.8	9.5	(5.9)	
65	G—3	—	7.5	—	9.2	
66	I—5	—	8.5	15.8	11.0	
67	X—0	—	6.4	12.5	(6.1)	21—46
68	G—4	—	6.2	8.2	(4.3)	18—6
69	G—5	—	7.0	5.0	5.5	18—5
70	J—5	—	8.8	7.8	4.2	23—71
71	G—5	—	7.8	8.0	—	20—41
72	H—4	—	11.2	—	—	18—1
73	G—4	—	7.6	—	—	18—15
74	H—4	—	8.7	—	—	19—23
75	D—5	—	7.2	—	—	19—25
76	H—4	—	10.3	13.4	—	20—30
77	H—4	—	9.0	9.2	9.2	20—33
78	E—4	—	4.3	6.4	6.4	20—34
79	H—5	—	8.9	9.5	9.5	20—35
80	H—4	—	6.0	7.0	7.0	20—36
81	H—4	—	6.4	7.3	7.3	20—37
82	H—5	—	6.4	9.8	9.8	20—38
83	H—3	—	4.7	(4.5)	—	20—39
84	G—3	—	2.9	5.3	5.3	20—40
85	G—3	—	3.4	3.1	3.1	20—42
86	I—6	—	9.6	—	6.0	21—50
87	E—4	—	6.8	—	—	21—53
88	H—5	—	6.8	—	—	23—68
89	G—7	—	4.9	—	—	23—73
90	H—4	—	5.6	12.4	—	23—78
91	G—3	—	6.7	—	—	23—79

Ⅴ　出土した土偶と土製品

今回の渡戸遺跡の調査では、土偶55点（図示可能な個体は49個）、スタンプ状土製品１点、土版３点、土錘１点、土製円盤139点が出土した。出土はすべてＧ・Ｈ―２～８グリッドを主体とする、遺物廃棄場からである。これら出土した土偶と土製品などの遺物は、共伴した土器群の様相から見たとき、ほぼ同一時期と考えられる。とくに土偶の出土点数の多さは、調査面積に比べた場合特徴的である。さらに、土偶の出土位置を分布図（第34図）として表したときには、特徴的な事柄をも見ることができる。

ここで取り上げた遺物については、表３に計測値を一覧表として表しておいたので参考にされたい。

・土偶（第34図、第35～37図、図版16・17）

出土した土偶の時期は、伴出土器から縄文時代後期の中葉にほぼ限定できる。最初に全体的な特徴について述べたい。頭部形態では、首が長く突き出すものがある。顔の表現としては、逆三角形に近いものが多い。頭頂部の表現は山型に尖るものや、髷を結ったようなもの、直線状のものなどがある。乳房は大きく円錐状に発達している。沈線や列点で正中線を描く。肩などの体部には列点による文様を持つものが多い。腰部には沈線で連続した鋸歯状の三角形を描く。脚部は直立するものと、屈折するものとがある。全体的な身体表現としては、直立するものと、屈折するものとの２種類がある。

アスファルトの付着のある個体も見えるが、破損部分の接着としての使用と、目や口の部分にアスファルトを施すものもあることから、破損部分の接着としての使用以外のものもあることがわかる。

出土した状況としては、いくつかのまとまりを見いだすことができる。さらに土偶の各部分の出土個体数を比較したところ、出土した部分には偏りがあることがわかった。次に個別的な特徴について述べたい。

（頭部形態）

頭部は10個体ほど出土しており（１～10）、約20％である。髷を表現しながら、頭頂部が山型に突出するもの（７、８）。髷を表現しながらも、頭頂部の突出は明瞭ではなく、ターバン状に屈曲するもの（１、２、３、４？、５？、７？、９？、10？）。おそらくハート型の、頭部表現をとるもの（６）。などに類別することができる。首の表現は、垂直に前につき出すもの（６など）と、やや角度をもって突き出すもの（１～５など）がある。刺突による加飾は、首の付け根にまで及ぶものもある（２、４、６）。

目や鼻の表現について見れば、目の表現の場合刺突で表現している（１、２、３、５、６、７、８）ものがほとんどであるが、円形に明瞭に刺突する場合と、あまり明瞭でない場合とがある。目の表現が省略されている（９、10）場合もある。鼻は全体的にすっきりと通っており、鼻孔は刺突によって明瞭に表現されている。ただし表現が明らかではない（９、10）ものもある。顔面の表現として沈線を施す場合もある（７、８）。目と口にアスファルトを施すもの（８）もある。

（体部形態）

肩から胸さらには腹部までの部分を体部とした。この部分は13個体出土しており（11～22、24）、約26％である。いずれも中実である。形状は板状に作られるもの（12、13、14、15、17、18？、19、20）と、やや厚みをもって作られるもの（11、16、21、22）とがある。厚みをもって立体的に作られるものは沈線による正中線をもち（11、22）、下腹部が隆起することから、妊娠状態を表現しているものと考えられる。乳房も大きく表現されている。板状に表現される土偶では、同じく妊娠状態を表現しているものもある（17、19）が、下腹部の隆起は一部（15）を除いて低い傾向がある。４個体に分離して出土したものが、接合したものもある（16）。

加飾は刺突と沈線による。肩から胸に集中してみられるもの（12、14）と、正中線と体側の線に沿って、連続刺突を加えながら、さらに乳房を強調するように囲むもの（15、17）がある。腰部の周囲には連続した鋸歯状の沈線を持つもの（15、20、24）と、腰の回りに連続した刺突を施すもの（19）がある。

（手と足の表現）

肩部を含めた手は13個体出土している（23、25～36）。全体に占める比率は約26％である。文様は刺突または半裁竹管文（27、28）で、施されているものと、無文となるものの２種がある。これは、体部の状況と共通する。肩部の表現では、やや怒り肩をなし、そのまま垂直に手先に向かって伸びるもの（23、27、28）。なで肩になりながら指先に向かって伸びるもの（25、３０、31）がある。手のひらの表現では、腕の先をつまみ出し、押圧を加えながら外反させるものと（26～28、33、34、36）、腕の先端を二頭に分けるものがある（25）。また、腕の先端に丸く沈線を巡らすものもある（35）。足指は明確に作り出されるものがあるものの、手指の表現はいずれも十分ではない。

足は13個体出土している（37～49）。全体に占める比率は約26％である。文様は施されない。おそらく腰部分で消失するものであろう。大ぶりなもの（39）と、小ぶりなもの（43、49）、中間のものとに分かれる。足指の表現は明確でないものが多く、沈線によって足の先端に垂直な短い刻みを施す、表現が明確なもの（46、47）とがある。

足の傾きに注目したとき、足の位置に対して体の位置が傾くもの（39、40、41？、42、43、44？、49）と、足の位置に対して体の位置が垂直なもの（45～48）とに分けることができる。足の位置に対して体の位置が傾くもののうちには、ひざ頭に腕との接着痕を持つものがある（39、40）。このことから、座った姿勢から、腕を伸ばし、ポーズを取る土偶の存在を考えることができよう。屈折像土偶が含まれているものであろう。

（土偶の姿勢について）

屈折像土偶と考えられるものは破片でしか出土していないが、推定してみたい。屈折像土偶の頭部としては１を考えたい。体部は17に代表されるようなやや屈曲した体部が考えられよう。脚部は同じく39のような形態となろう。また腕は、41などから推定すれば、ひ

ざの上に交互に重ねて置く場合と、顔の前にひざにつけた腕を伸ばし、合掌するなどの姿勢が考えられる。

また、第35図右下に表したような、直立するものもある。

（分布と接合について）

土偶の出土はG・H―2～8グリッドを主体とする、遺物廃棄場からであり、その他の箇所からの出土は、非常に少ない。これを表したのが第34図である。この図を見ると、Ⅰ―3グリッド、G―4グリッド、H―3グリッドに集中している箇所がある事が分かる。Ⅰ―3グリッドでは、約1mの範囲から5点の土偶が出土している。G―4グリッドでは、同じく1mの範囲から4点の土偶が出土している。H―3グリッドでは約1.5mの範囲から6点の土偶が出土している。その他はG―5～G―7グリッドにかけてまばらに分布している。Ⅰ―3グリッド、G―4グリッド、H―3グリッドの出土事例は、まとまった廃棄の姿を想定させる。さらにはⅠ―3グリッド、G―4グリッドの出土土偶のうち、RP22とRP55は接合する（第35図右下）。時期的にも近接している可能性を伺わせる。また、同一個体と思われる土偶もある（図版17、上4点）。これらは接合はしないものの、胎土と文様の状態が同じである。いずれも近接した位置にある。

さて、各部分の個体数について先程述べたが、単純に完形土偶が破壊されたとすると、頭部（1）、体部（1）、手（2）、足（2）となるはずであるが、出土土偶の各部位の比率はばらつきがある。また、同一個体であるにもかかわらず接合するものは非常に少ない。このことは、廃棄にかかわるときには、全身を捨てることはしないとか、捨てる箇所を決めるなどという行為があったことも想定できる。なお、捨場はさらに東側に伸びるためここの調査も行われたときには、さらに廃棄に関する事実が得られるものであろう。

・スタンプ状土製品（50）

1点得られている。つまみを作り出し、中央付近に貫通孔をもつ。連続した山状の文様が、楕円形をなす底部に刻み込まれている。

・土版（51、52、54）

3点得られている。表面に渦巻きを持ち底面には、山型に沈線を組むもの（51）。星形の文様をもつもの（52）。大ぶりで薄く、表面には鋸歯状の山型文をもち、裏面には文様をもたないもの（54）がある。

・土錘（53）

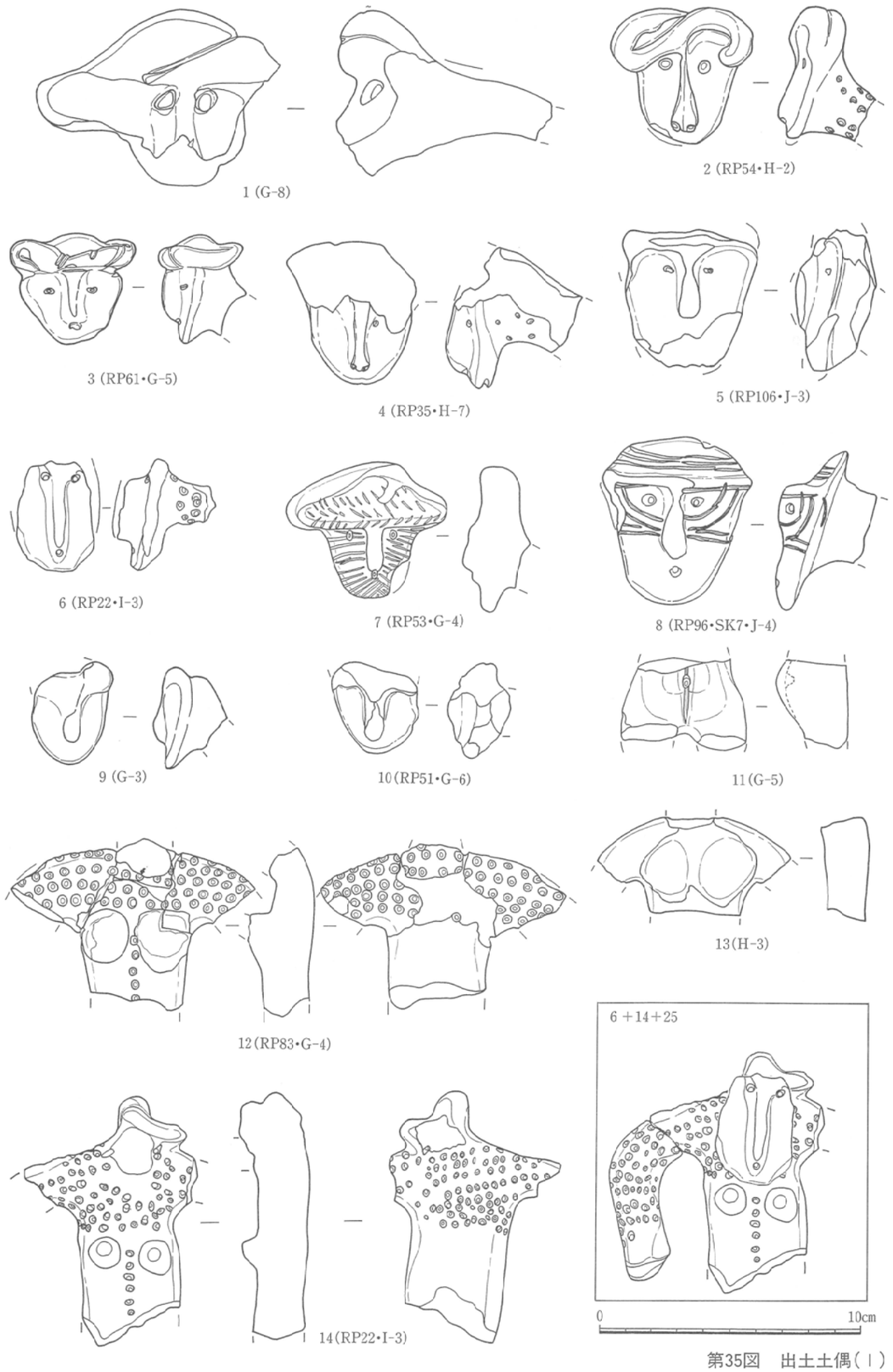
1点得られている。楕円形の形状をなし、十字に沈線が廻るものである。

・土製円板（55～139）

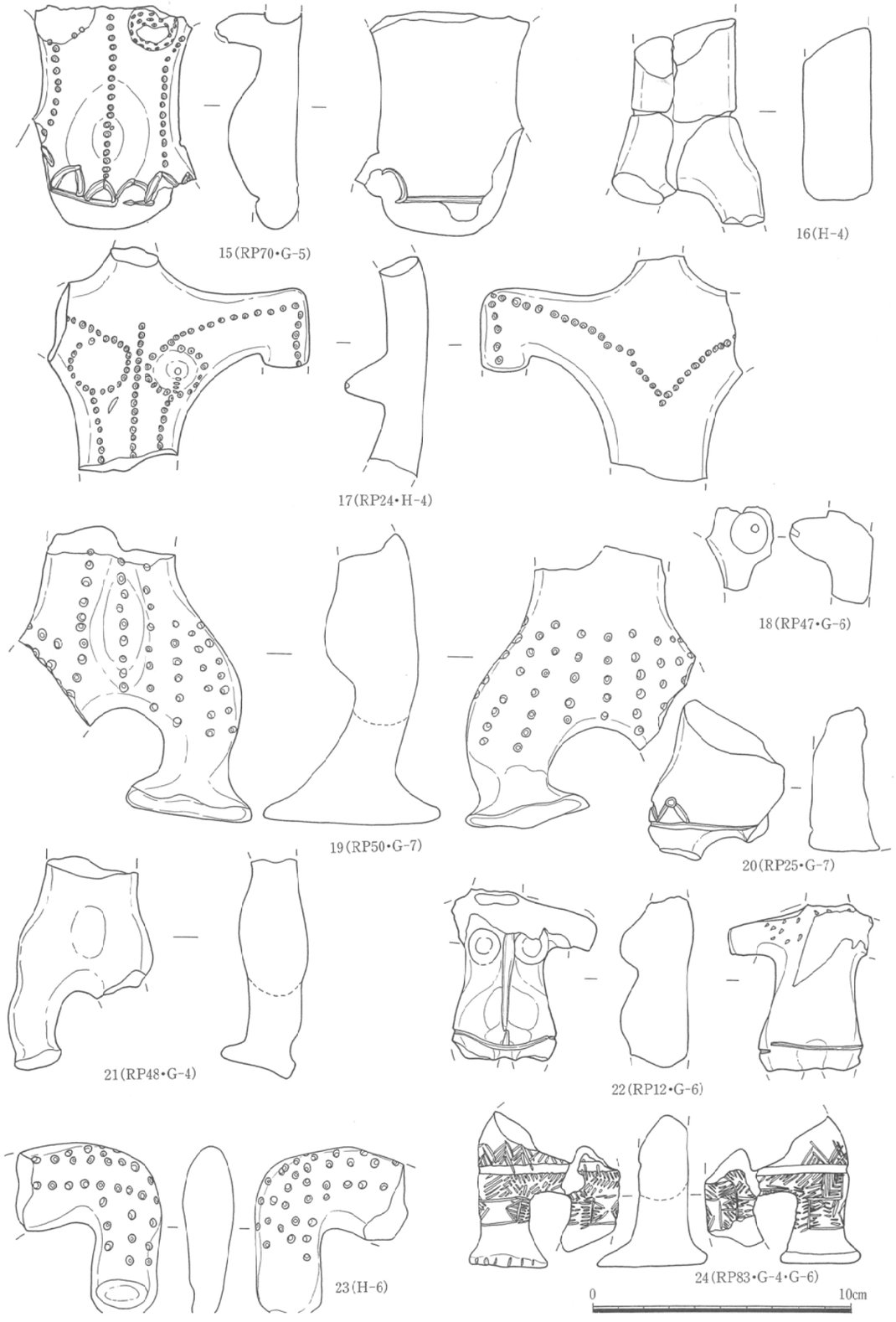
85点得られている。土器の体部や底部を成形し円形にしたものである。大きさには、6cm内外のもの（55～62）、4cm内外のもの（63～82）、3cm内外のもの（83～114）、2cm内外のもの（115～139）がある。

凡例
☆ 土偶
● 土器・土製品
▲ 石器・石製品
□ 自然遺物

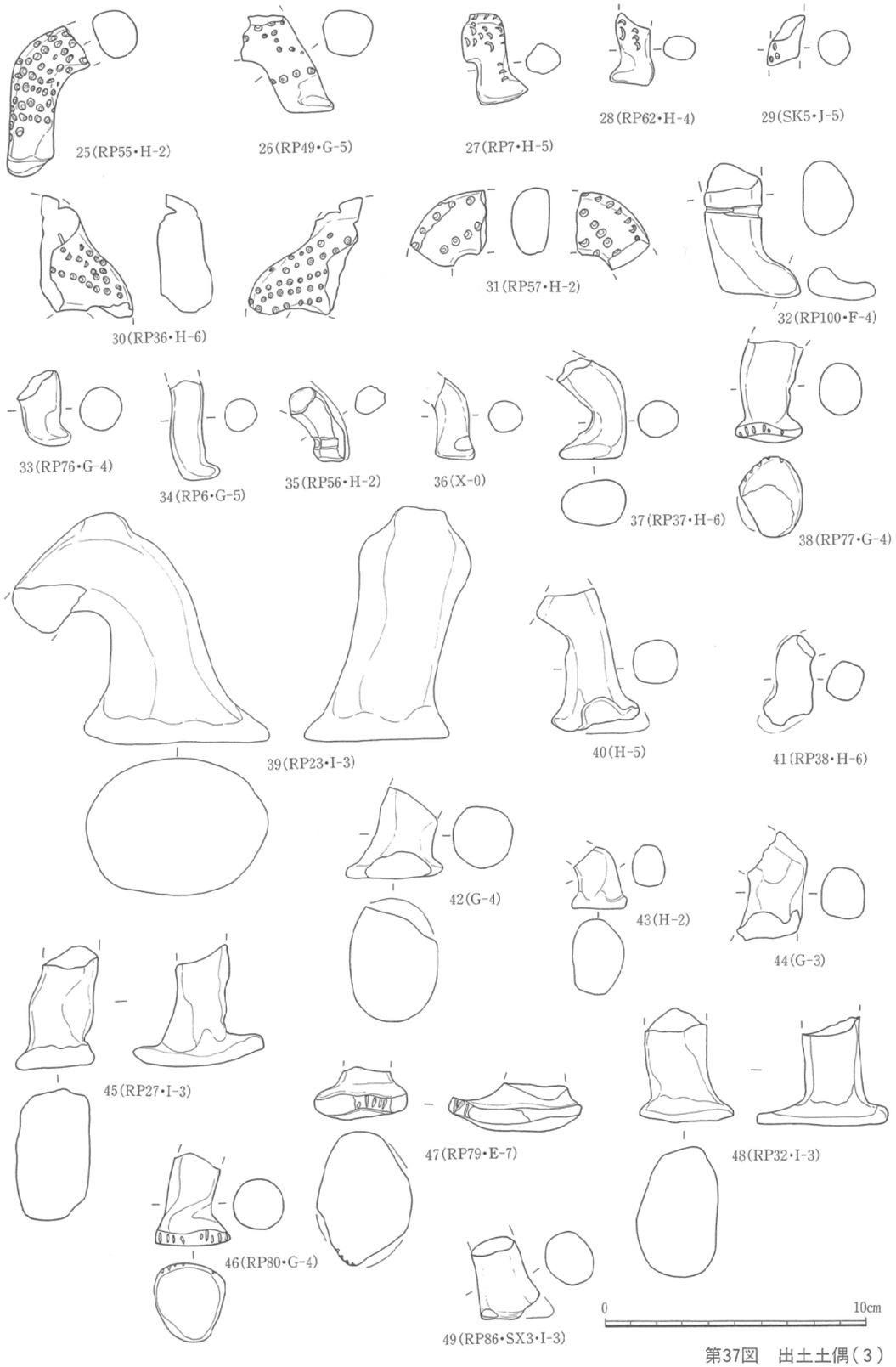
第34図　土偶分布図



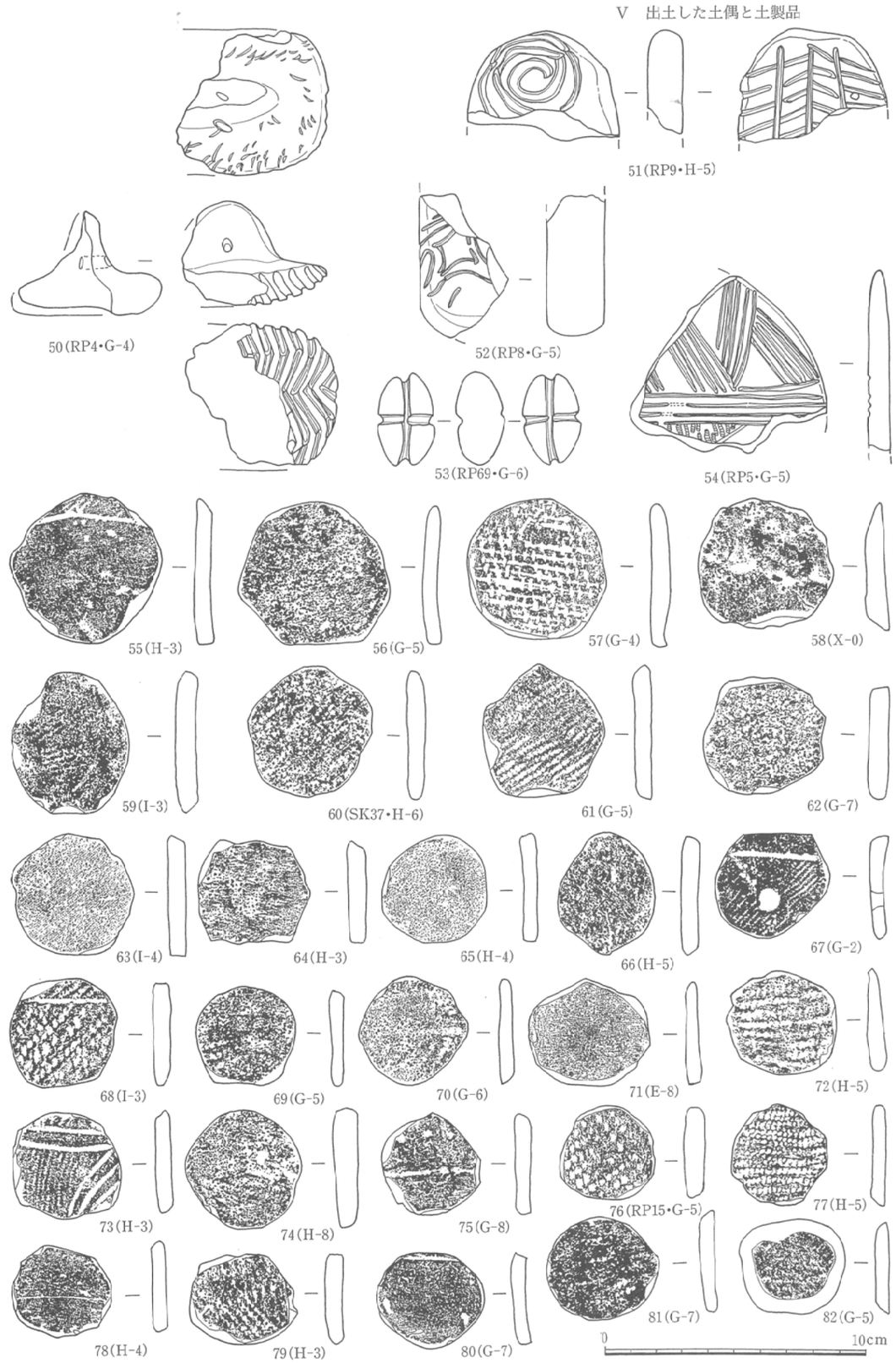
第35図　出土土偶（１）



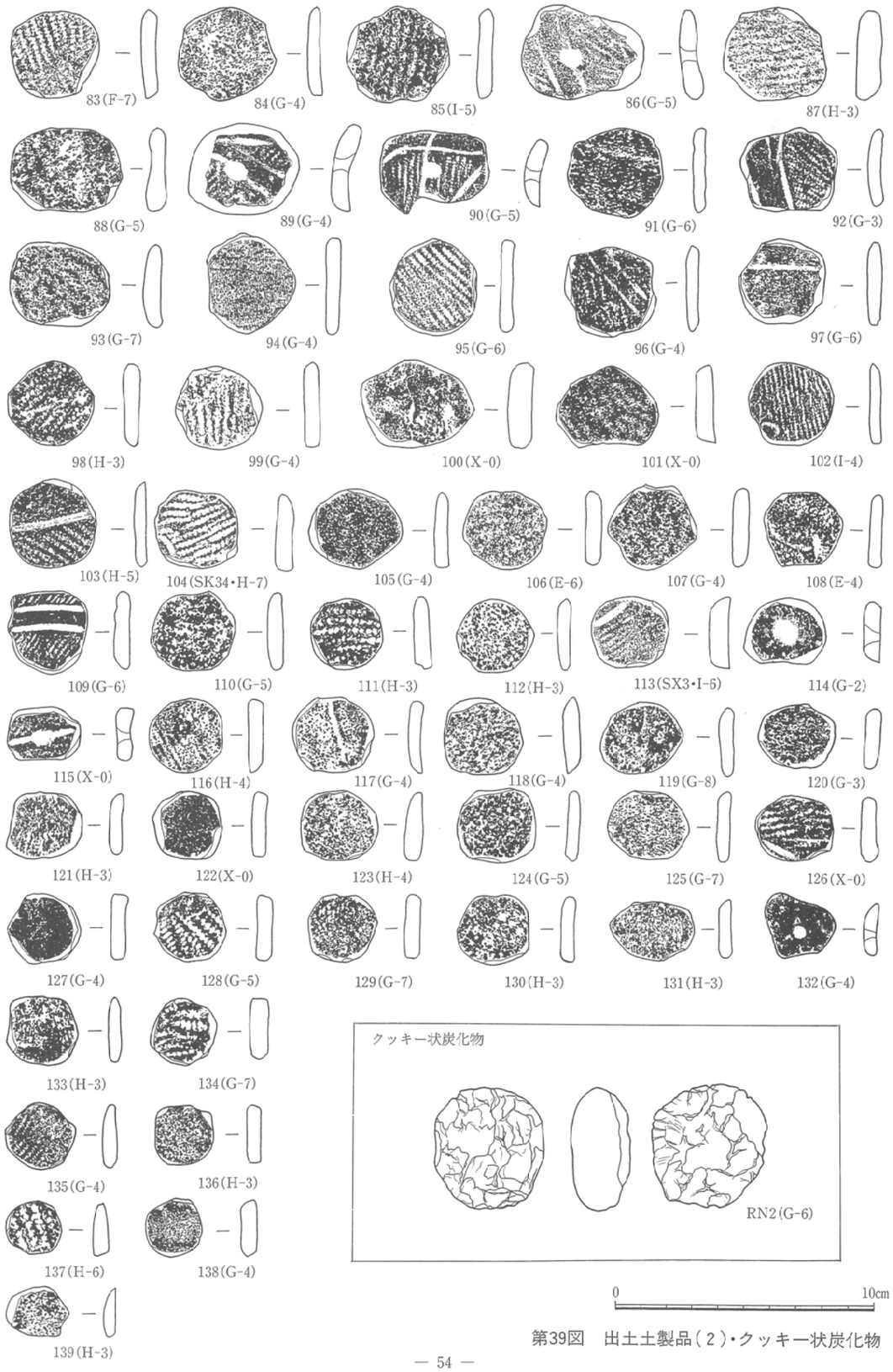
第36図　出土土偶（２）



第37図　出土土偶(3)



第38図　出土土製品(1)



第39図　出土土製品（２）・クッキー状炭化物

表３　土偶・土製品計測値一覧表（凡例）

・土偶についてのみ部位の注記を設けたが、①は頭部、②は体部、③は手、④は脚を表す。
・長さはその全長、みかけの幅を幅、最大厚を厚さとした。尚（　）とした数字は残存値を表す。

No.	種別	出土区	部位	大きさ（cm）			重量(g)	挿図	備考
				長	幅	厚			
1	土偶	G－8	①	(6.5)	(9.1)	(8.0)	192.7	35—1	
2	〃	I－3	〃	(4.4)	(3.0)	(3.5)	21.3	35—6	(RP22＋RP55)同一か
3	〃	J－4	〃	6.5	5.7	(3.6)	59.3	35—8	SK 7　RP96
4	〃	H－2	〃	(5.3)	5.3	(4.5)	51.7	35—2	RP54
5	〃	J－3	〃	(5.2)	(5.1)	(3.1)	56.9	35—5	RP106
6	〃	H－7	〃	(5.7)	(4.9)	(4.5)	63.2	35—4	RP35
7	〃	G－5	〃	4.1	4.3	(3.1)	33.8	35—3	(RP61＋RP12)同一か
8	〃	G－4	〃	5.4	6.2	(2.5)	39.5	35—7	(RP53+RP83+G－6)同一か
9	〃	G－3	〃	(3.7)	(3.0)	(2.7)	19.0	35—9	(F２＋H－３)同一か
10	〃	G－6	〃	(3.9)	(3.2)	(2.3)	16.7	35—10	RP51
11	〃	G－6	②	(6.7)	(5.6)	(2.7)	77.5	36—22	(RP12＋RP61)同一か
12	〃	G－5	〃	(8.6)	(6.5)	(3.4)	141.1	36—15	RP70
13	〃	G－4	〃	(8.6)	5.2	2.5	85.4	36—21	RP48
14	〃	H－4	〃	(8.0)	(5.9)	2.8	93.7	36—16	
15	〃	G－7	〃	(10.5)	(8.2)	3.5	238.6	36—19	RP50
16	〃	G－4	〃	(8.4)	(9.4)	(2.5)	69.2	35—12	RP83
17	〃	I－3	〃	(9.5)	(6.8)	2.6	95.5	35—14	(RP22＋RP55)同一か
18	〃	H－4	〃	(8.9)	(10.3)	3.3	130.6	36—17	RP24
19	〃	H－3	〃	(3.9)	(7.2)	(1.9)	49.0	35—13	
20	〃	G－7	〃	(4.8)	(6.1)	(2.7)	55.1	36—20	RP25
21	〃	G－5	〃	(3.8)	(4.9)	2.6	40.5	35—11	
22	〃	G－6	〃	(2.8)	(4.3)	(1.9)	17.4	36—18	RP47
23	〃	G—4 G—6	③	(6.0)	5.6	(4.0)	55.1	36—24	(RP83+G－6＋RP53)同一か
24	〃	F－4	〃	(5.1)	3.6	3.0	40.3	37—32	RP100
25	〃	H－6	〃	6.9	5.7	2.0	60.1	36—23	SK37 RP87
26	〃	H－6	〃	(4.5)	(4.4)	(2.1)	23.2	37—30	RP36
27	〃	H－2	〃	(6.0)	(3.0)	1.9	22.6	37—25	(RP55＋RP22)同一か
28	〃	H－2	〃	(3.0)	(3.8)	1.9	13.4	37—31	RP57
29	〃	G－5	〃	(3.9)	(3.4)	(1.9)	16.2	37—26	RP49
30	〃	H－4	〃	(2.9)	(1.7)	1.4	4.7	37—28	RP62
31	〃	H－5	〃	(3.6)	(2.4)	1.5	8.1	37—27	RP７
32	〃	X－0	〃	(3.0)	(1.7)	1.3	4.9	37—36	
33	〃	H－6	〃	(3.5)	(2.0)	1.8	8.4	37—41	RP38
34	〃	G－4	〃	(2.9)	(1.9)	1.7	7.1	37—33	RP76
35	〃	G－5	〃	(3.9)	(1.9)	1.6	8.1	37—34	RP６
36	〃	H－2	〃	(2.8)	(2.3)	1.4	6.0	37—35	RP56
37	〃	J－5	〃	(1.4)	(1.9)	(1.5)	2.4	37—29	SK５F
38	〃	I－3	④	(8.9)	(9.8)	5.6	217.5	37—39	RP23
39	〃	I－3	〃	(4.6)	3.3	5.2	39.1	37—45	RP27
40	〃	I－3	〃	(4.4)	3.6	4.8	35.6	37—48	RP32
41	〃	G－4	〃	(3.5)	2.9	3.1	18.4	37—46	RP80
42	〃	E－7	〃	(2.0)	(3.5)	5.0	22.4	37—47	RP79
43	〃	G－4	〃	(3.5)	3.8	3.7	27.4	37—42	F２
44	〃	G－3	〃	(4.3)	(2.7)	(2.5)	20.0	37—44	
45	〃	G－4	〃	(3.9)	(2.8)	3.1	19.7	37—38	RP77
46	〃	H－5	〃	(5.5)	(3.8)	(2.2)	26.2	37—40	
47	〃	H－6	〃	(3.9)	(2.6)	1.8	14.9	37—37	RP37
48	〃	I－3	〃	(3.2)	(2.6)	(2.5)	17.5	37—49	SX３F　RP86
49	〃	H－2	〃	(2.4)	(2.1)	3.0	9.1	37—43	
50	土版	H－5		(4.2)	(5.9)	1.4	32.8	38—51	RP９
51	〃	G－5		(6.9)	(7.1)	1.0	46.1	38—54	RP５
52	〃	G－5		(5.6)	(3.1)	2.3	34.6	38—52	RP８
53	スタンプ状土製品	G－4		(6.0)	(5.5)	4.0	61.1	38—50	RP４
54	土錘	G－6		3.6	2.2	1.8	14.8	38—53	RP69
55	円盤状土製品	H－3		5.7	5.8	0.7	27.5	38—55	
56	〃	G－5		5.4	5.7	0.6	22.9	38—56	
57	〃	G－4		5.5	5.3	0.8	25.7	38—57	
58	〃	X－0		4.9	5.1	0.7	21.3	38—58	
59	〃	I－3		5.3	4.5	0.8	23.1	38—59	
60	〃	H－6		5.0	4.7	0.7	17.8	38—60	SK37F
61	〃	G－5		5.1	4.7	0.7	19.3	38—61	
62	〃	G－7		4.4	4.3	0.8	18.0	38—60	F２
63	〃	I－4		4.6	4.5	0.7	18.0	38—53	
64	〃	H－3		4.0	4.1	0.8	16.9	38—54	
65	〃	H－4		4.2	4.0	0.6	15.1	38—55	
66	〃	H－5		4.6	3.7	0.7	11.8	38—56	
67	〃	G－2		4.1	4.3	0.5	9.3	38—57	
68	〃	I－3		4.0	3.9	0.7	14.8	38—68	
69	〃	G－5		3.7	3.8	0.6	11.4	38—69	
70	〃	G－6		4.0	4.1	0.6	11.5	38—70	
71	〃	E－8		4.0	4.5	0.5	10.1	38—71	
72	円盤状土製品	H－5		3.9	4.0	0.6	12.4	38—72	
73	〃	H－3		3.9	4.1	0.6	14.6	38—73	
74	〃	H－8		4.6	4.4	1.0	22.7	38—74	
75	〃	G－8		3.9	3.8	0.7	11.8	38—75	
76	〃	G－5		3.6	3.5	0.8	11.6	38—76	RP15
77	〃	H－5		3.9	3.5	0.6	10.4	38—77	
78	〃	H－4		3.5	3.7	0.6	10.4	38—78	
79	〃	H－3		3.4	4.0	0.7	11.8	38—79	
80	〃	G－7		3.7	4.1	0.6	10.3	38—80	
81	〃	G－7		3.9	4.3	0.6	11.7	38—81	
82	〃	G－5		3.6	3.9	0.6	10.8	38—82	
83	〃	F－7		3.4	3.3	0.6	8.1	39—83	
84	〃	G－4		3.5	3.6	0.5	8.5	39—84	
85	〃	I－5		3.7	4.0	0.7	10.7	39—85	
86	〃	G－5		3.5	4.7	0.6	10.7	39—86	
87	〃	H－3		3.6	3.3	1.0	16.3	39—87	
88	〃	G－5		3.3	4.3	0.6	9.9	39—88	F２
89	〃	G－4		3.5	4.2	0.6	10.6	39—89	
90	〃	G－5		2.7	4.2	0.6	7.8	39—90	
91	〃	G－6		3.3	3.7	0.5	8.2	39—91	F２
92	〃	G－3		3.0	3.6	0.5	7.1	39—92	
93	〃	G－7		3.2	3.8	0.6	9.2	39—93	
94	〃	G－4		3.8	3.4	0.6	8.9	39—94	
95	〃	G－6		3.7	3.4	0.5	7.8	39—95	
96	〃	G－4		3.4	3.9	0.5	7.5	39—96	
97	〃	G－6		3.2	3.3	0.6	7.5	39—97	F２
98	〃	F－3		3.2	3.3	0.6	7.2	39—98	
99	〃	G－4		3.1	3.4	0.7	8.8	39—99	F２
100	〃	X－0		3.4	4.2	1.0	13.5	39—100	
101	〃	X－0		2.9	3.9	0.8	11.8	39—101	
102	〃	I－4		3.2	3.3	0.5	6.6	39—102	
103	〃	H－5		3.4	3.3	0.5	6.9	39—103	
104	〃	H－7		2.9	3.2	0.6	8.1	39—104	SK34F
105	〃	G－5		3.0	3.6	0.5	6.8	39—105	
106	〃	E－6		3.0	3.2	0.7	7.8	39—106	
107	〃	G－4		3.1	3.4	0.7	8.2	39—107	
108	〃	E－4		2.8	3.0	0.5	5.6	39—108	
109	〃	G－6		3.2	2.9	0.6	6.9	39—109	
110	〃	G－5		3.1	3.3	0.6	6.7	39—110	F２
111	〃	H－3		2.7	2.8	0.6	6.1	39—111	
112	〃	H－3		2.7	2.9	0.5	5.2	39—112	
113	〃	I－6		2.7	3.0	0.7	7.8	39—113	SK３F
114	〃	G－2		2.4	3.0	0.7	4.9	39—114	
115	〃	X－0		1.9	2.8	0.6	4.1	39—115	
116	〃	H－4		2.9	2.9	0.6	6.0	39—116	
117	〃	G－4		2.3	3.2	0.6	6.6	39—117	
118	〃	G－4		2.8	3.0	0.6	5.1	39—118	
119	〃	G－8		2.7	3.1	0.5	4.8	39—119	
120	〃	G－3		2.5	3.0	0.6	4.5	39—120	
121	〃	H－3		2.5	2.7	0.5	4.4	39—121	
122	〃	X－0		2.6	2.6	0.6	5.3	39—122	
123	〃	H－4		2.7	2.9	0.7	6.6	39—123	
124	〃	G－5		2.8	3.1	0.5	5.4	39—124	F２
125	〃	G－7		2.6	3.1	0.5	5.3	39—125	
126	〃	X－0		2.5	3.0	0.6	6.5	39—126	
127	〃	G－4		2.6	2.8	0.6	5.7	39—127	
128	〃	G－5		2.6	2.7	0.6	6.2	39—128	
129	〃	G－7		2.6	2.6	0.6	5.5	39—129	
130	〃	H－3		2.6	2.8	0.5	5.0	39—130	
131	〃	H－3		2.3	3.2	0.5	3.7	39—131	
132	〃	G－4		2.0	2.6	0.5	3.0	39—132	
133	〃	H－3		2.6	2.7	0.5	4.4	39—133	
134	〃	G－7		2.6	2.5	0.7	5.4	39—134	
135	〃	G－4		2.6	2.6	0.5	4.8	39—135	
136	〃	H－3		2.3	2.3	0.6	3.9	39—136	
137	〃	H－6		2.0	2.1	0.6	3.1	39—137	
138	〃	G－4		2.2	2.2	0.6	3.5	39—138	
139	〃	H－3		1.9	2.4	0.5	2.4	39—139	
140	円盤状石製品	H－3		2.2	2.3	0.7	3.8	42—69	RQ27
141	〃	H－3		3.3	3.4	0.9	11.7	42—70	

Ⅵ　出土した石器と石製品

出土した石器と石製品（第40図～第46図）は、土器に比べると非常に少ない。これらは主として、G・H―２～８グリッドを中心とする、遺物廃棄場から得られている。

出土した石器と石製品の種類は、石鏃・石槍・石錐・石匙・不定形石器・石篦・磨製石斧・磨石・凹石・砥石・石皿・石棒、である。このうち石匙・不定形石器・磨製石斧・磨石・凹石・砥石・石皿が多い。石材は石鏃・石槍・石錐・石匙・不定形石器・石篦には硬質頁岩が多用される。磨製石斧の石材は蛇紋岩と粘板岩がある。磨石・凹石・石皿・石棒には硬質の安山岩と砂岩が選ばれている。砥石にはやや軟質の凝灰岩質の砂岩が選ばれている。

その他の石材としては、メノウ・石英・黒曜石などが少数あるに過ぎない。これらの石材の中で蛇紋岩や黒曜石は、渡戸遺跡の周辺では産出しないものであるため、交易などによって入手していたものであろう。特に黒曜石は２点のみの出土である。

出土した石器と石製品の機種を見てみると、砥石が６点出土し、発掘面積に比較して多い傾向にある。石皿もまた多い。このうち89や93として提示した石皿は、離れて出土した個体同士が接合したものである。特に93ではH―６グリッドから出土したRQ17と、G―３グリッドから出土したRQ22が接合したもので、両者は約20m離れて接合した。渡戸遺跡での最も長い距離での接合した事例となった。その他の資料では接合はほとんどなかった、また88のように据えられたような状態で、出土した石皿もある。

・石鏃（１～18）

石鏃はここに18点図示することができた。石材が頁岩が主体であり、一部にメノウや石英などが使用されている。大きさは全体的に小さい。形態は、茎のあるもの（１～９）、茎のないもの（16～18）、さらには茎の状態がはっきりしないもの（７～13）や、全体がアーモンド型をなすもの（14～16）がある。アーモンド型をなすもの以外は概して小さい。

特徴的な石鏃として、石英製の長脚鏃（18）や、メノウ製の石鏃（２）がある。着柄のためと思われる、アスファルトの付着が認められるもの（17、図版18左下）がある。

・石槍（20）

石槍は１点のみの出土した。硬質頁岩製であり、先端と基部が欠損している。

・石錐（21～31）

棒状（28～31）やT字型（21～24）の形態のものを中心とし、不定形の剥片の先端を錐状に作出したもの（27）、その他（25、26）などがある。27には全面にアスファルト付着の痕跡がある。いずれも頁岩製である。

・石匙（32～49）

石匙は横型（32～37）のものと、縦型（38～49）の２種類がある。大きさは５～６cmのものが多い。丁寧な剥離によって作製されているものと、剥片の先端に両側から剥離を加えただけのもの（41～44、47）がある。いずれも頁岩製である。石匙には着柄のためと思われる、アスファルトの付着が認められる（図版18右下）。機種としては最も多く出土している。

・不定形石器（50～56）

剥片に剥離を加え、一側辺あるいは両側辺に加工してあるものであるが、定形的な石器でないものをまとめた。石材は硬質頁岩である。

・石篦（57、58）

篦状の形態をし５～６cmの大きさのものである。材質は頁岩製（57）と石英製（58）がある。

・磨製石斧（59～68）

粘板岩製（59、61、62、63、67）と、蛇紋岩製（60、64、65、66、68）のものがある。再使用されているもの（65、66）もみられる。

・円盤状石器（69、70）

材質は凝灰岩質の砂岩である。周囲を打ち欠いた後、全面を磨いている。

・線刻礫（71）

軟質の凝灰岩質砂岩を使用し、細かな線を刻み込んでいる。

・凹石、磨石（72～81）

安山岩質の礫を利用し、一面あるいは両面に、一個から数個の凹みをつけたもの（72、74、75、79～81）と、両面を磨いたもの（73、76～78）である。

・砥石（82～87）

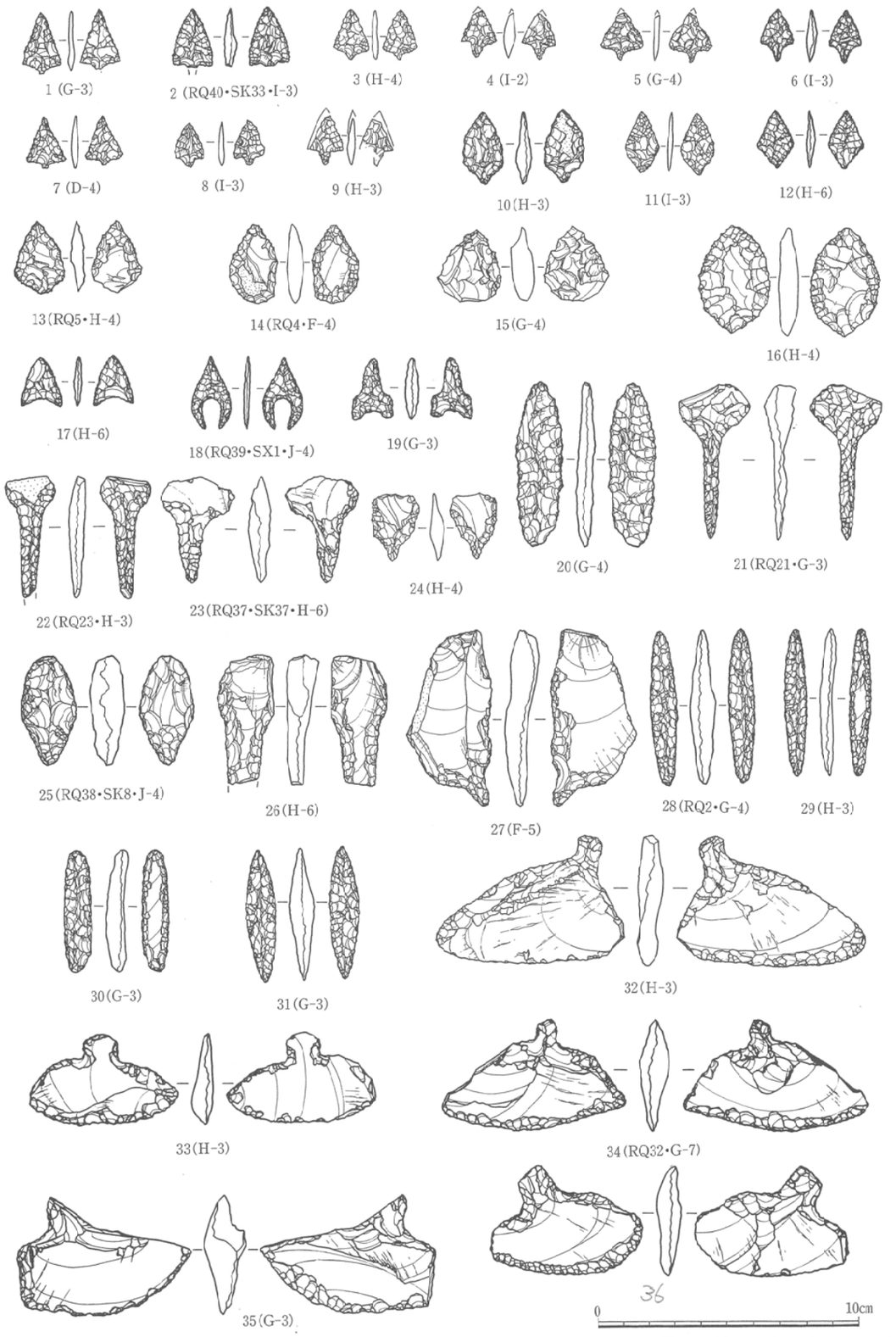
凝灰岩質の砂岩の礫の表面に、条線を刻み込んでいるものである。大ぶりの礫を使用して加工しているもの（82、86、87）と、小さめのもの（83～85）がある。

・石皿（88～93）

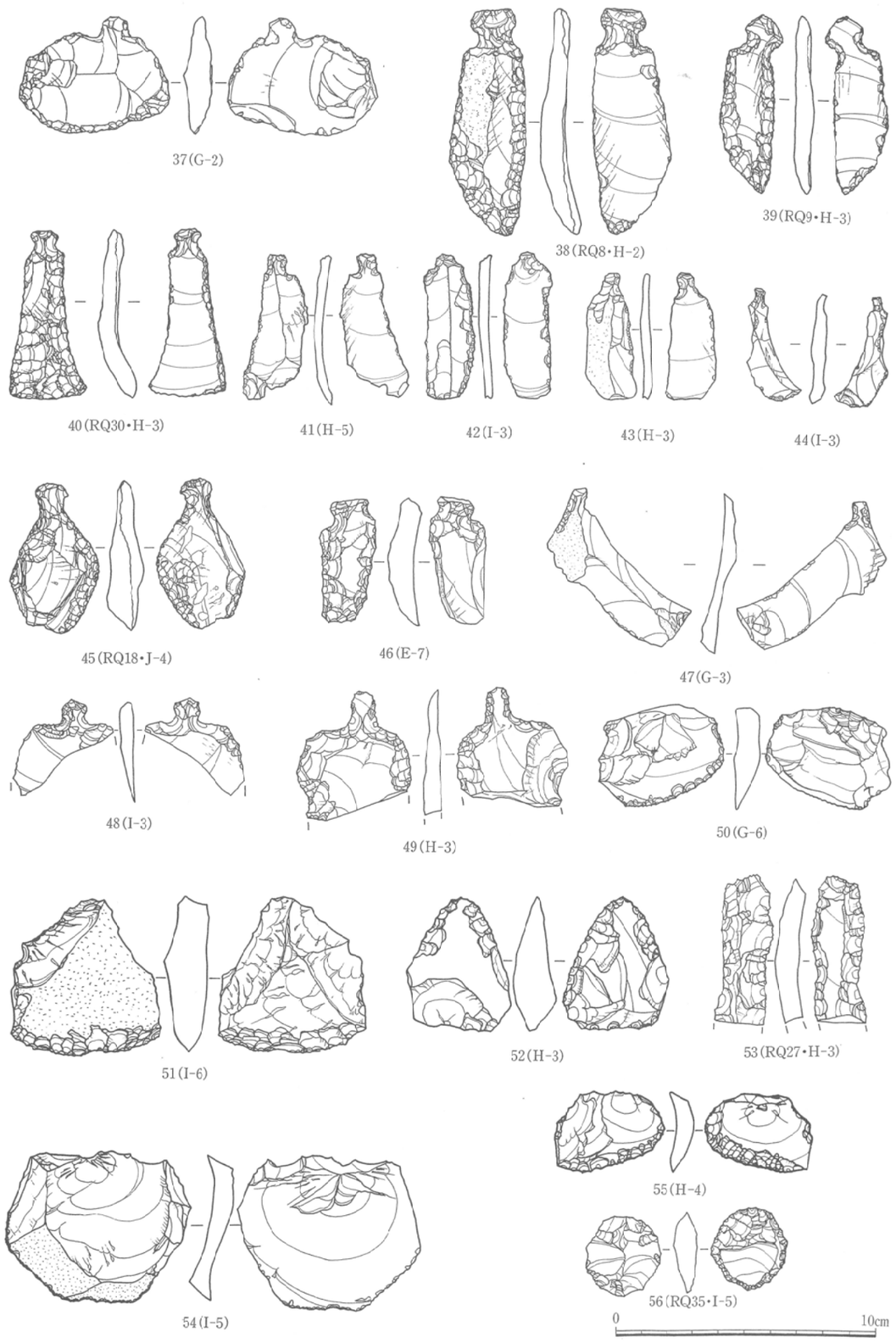
砂岩（88）や、凝灰岩質（89～93）の石を使用し、中央付近に凹みを施す、周囲には高まりを作り出している。

・石棒（94）

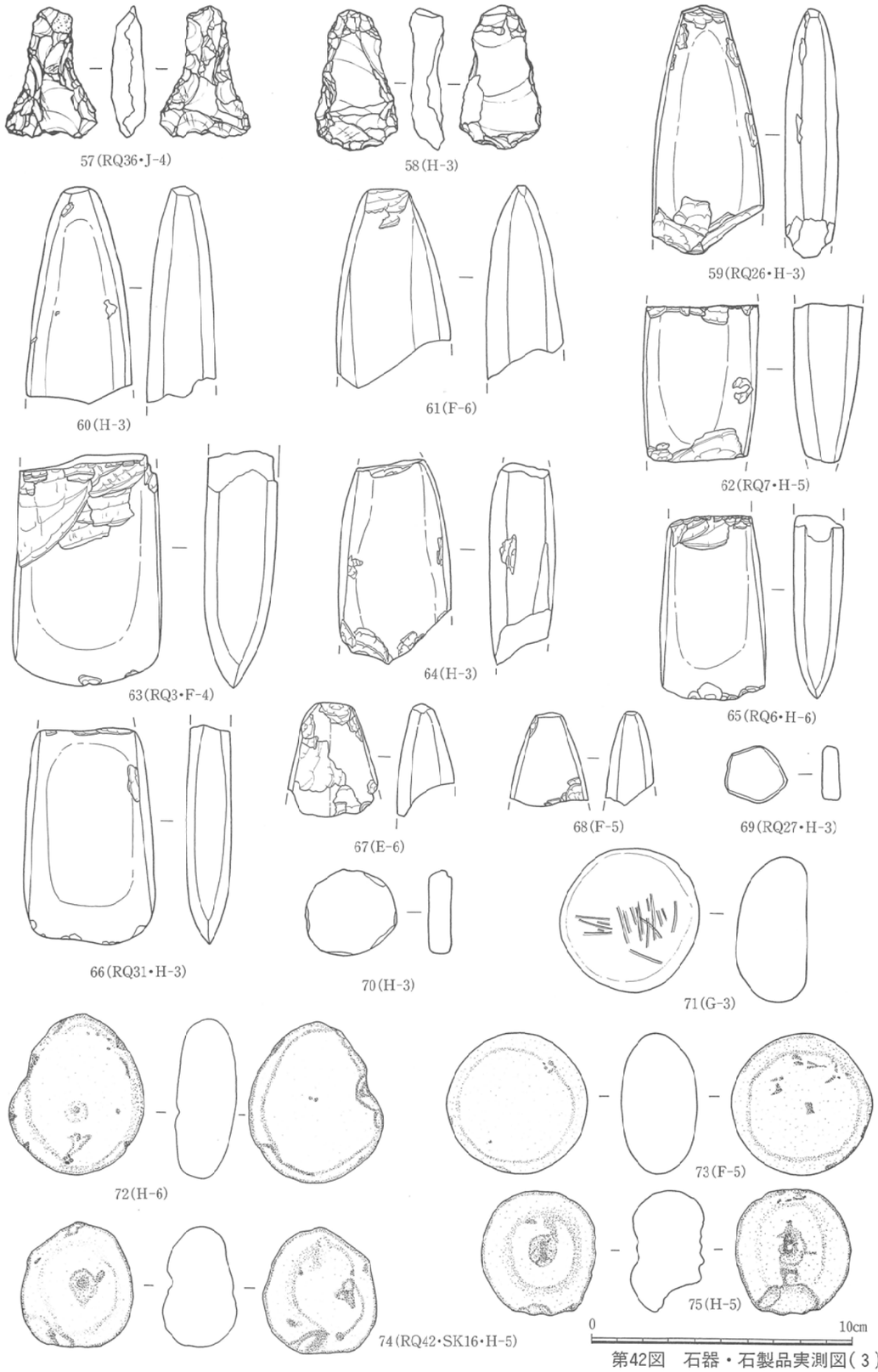
凝灰岩製のものが一点出土している。



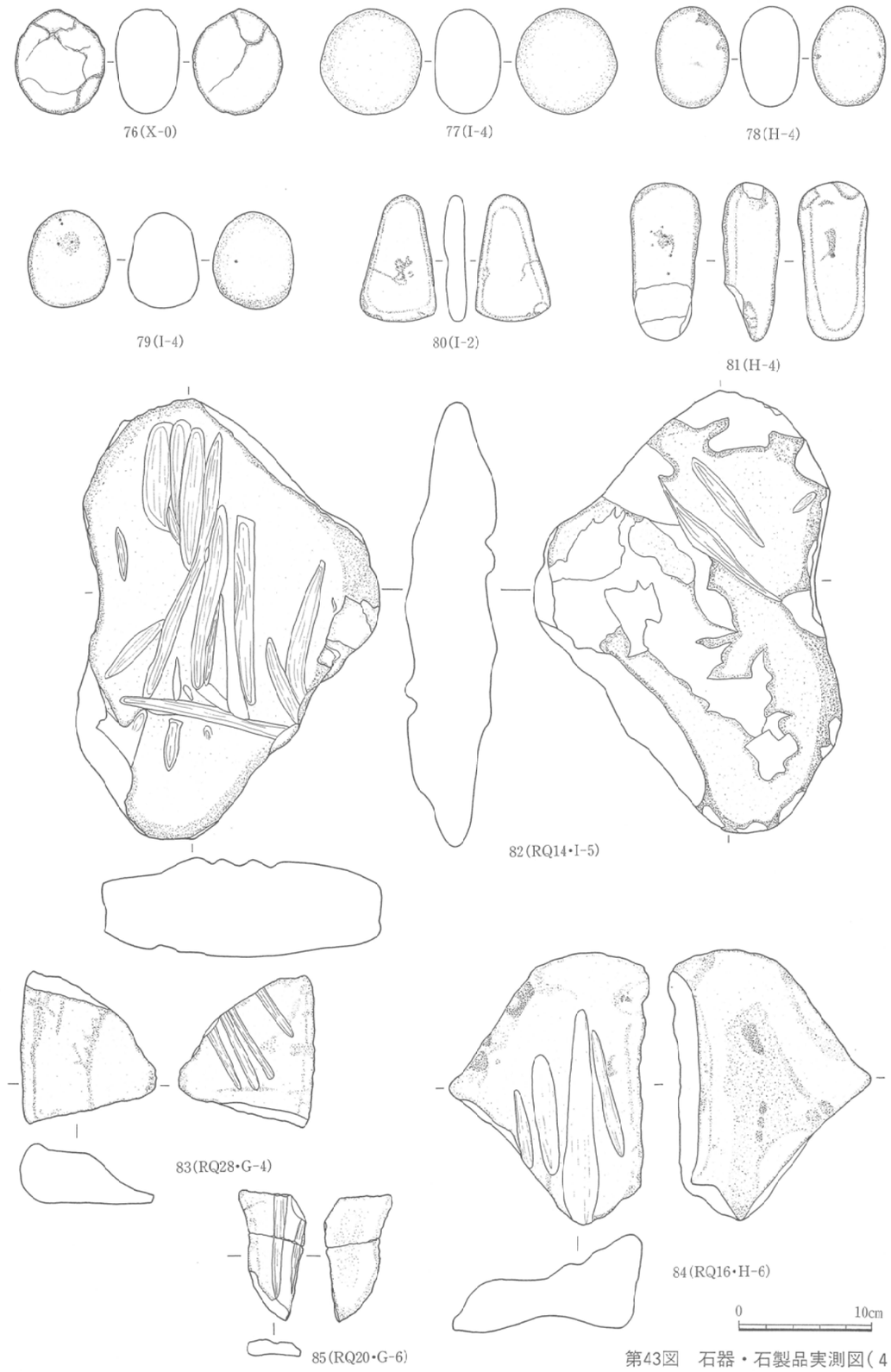
第40図　石器・石製品実測図(Ⅰ)



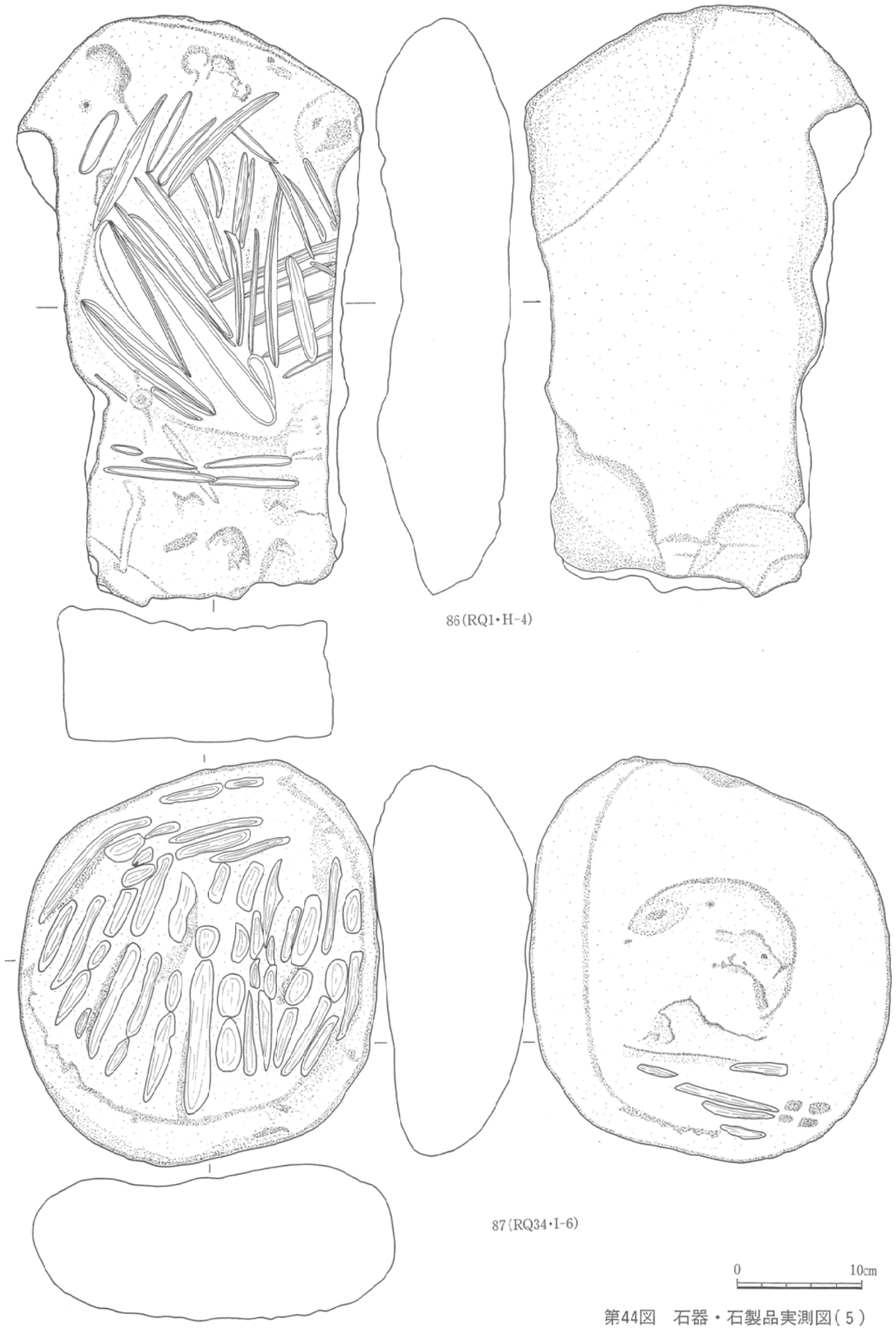
第41図　石器・石製品実測図(２)



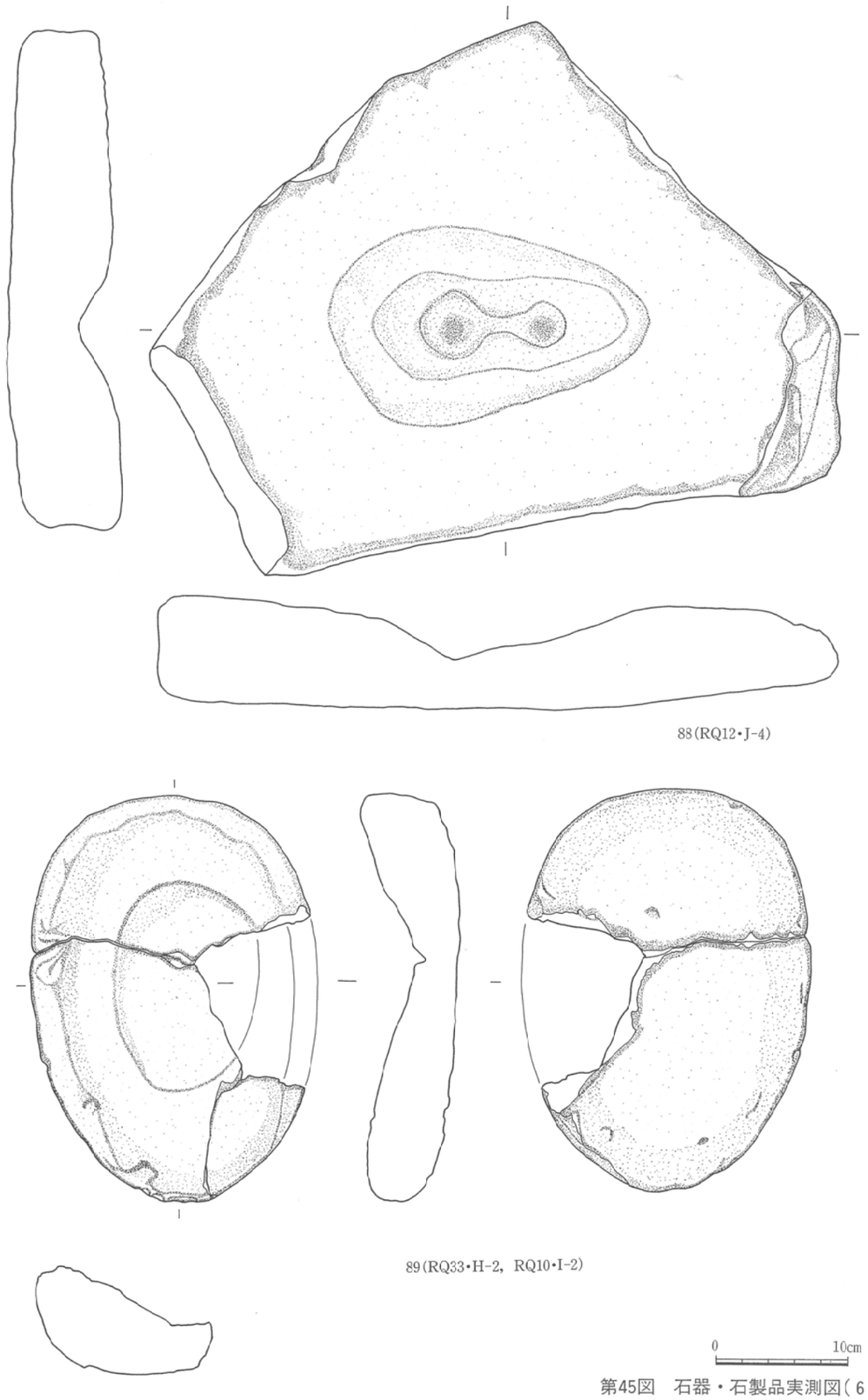
第42図　石器・石製品実測図(３)



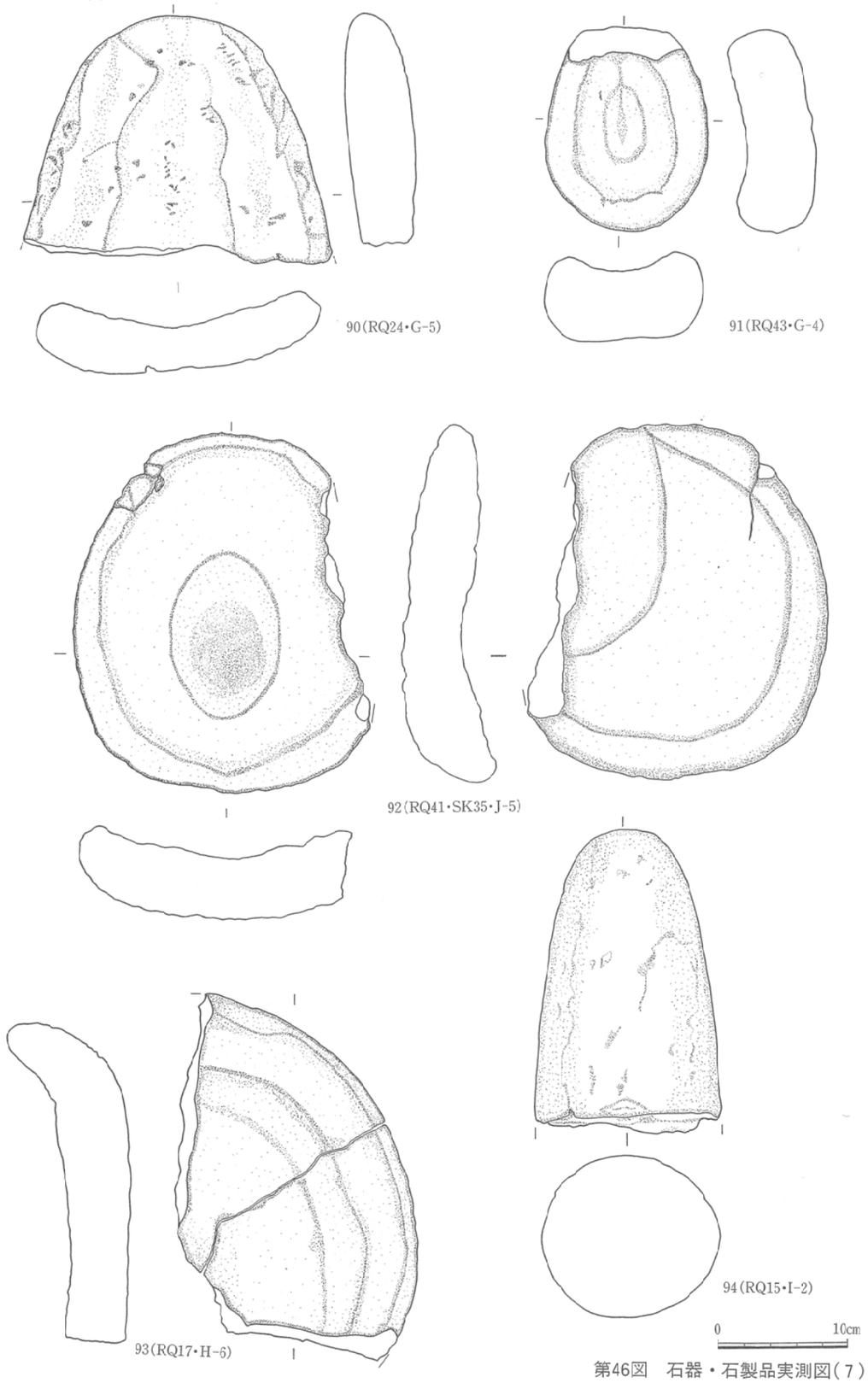
第43図　石器・石製品実測図(４)



第44図　石器・石製品実測図(５)



第45図　石器・石製品実測図(６)



第46図　石器・石製品実測図(７)

表４　石器・石製品計測値一覧表（凡例）

・出土石器・石製品について、長さはその全長、みかけの幅を幅、最大厚を厚さとして記した。
・出土区、RPナンバーについても記した。

No.	種別	出土区	計測値（cm）			重量(g)	挿図	備考
			長	幅	厚			
1	石鏃	G—4	6.2	1.8	0.6	6.7	40—20	
2	〃	H—4	4.1	2.7	0.7	6.0	40—16	
3	〃	F—4	3.1	1.8	0.6	3.7	40—14	RQ 4
4	〃	G—4	2.5	1.9	0.8	3.4		
5	〃	H—4	2.7	1.9	0.6	2.7	40—13	RQ 5
6	〃	H—4	2.6	1.8	0.5	1.8	40—22	
7	〃	G—4	2.2	1.4	0.4	1.4		
8	〃	G—6	2.0	1.4	0.7	1.2		
9	〃	G—4	1.3	1.2	0.3	0.4		
10	〃	H—3	2.8	1.5	0.6	1.8	40—10	
11	〃	I—3	2.2	1.5	0.5	1.2	40—2	SK33　RQ40
12	〃	G—3	2.3	1.4	0.4	0.8	40—1	
13	〃	H—6	2.2	1.4	0.4	0.7	40—12	
14	〃	I—4	2.3	1.3	0.3	0.6	40—11	
15	〃	H—6	1.8	1.5	0.3	0.6	40—17	
16	〃	G—3	2.2	1.5	0.5	1.2	40—19	
17	〃	J—4	2.8	1.5	0.2	0.5	40—18	SX 1　RQ39
18	〃	G—4	1.9	1.7	0.3	0.7	40—5	
19	〃	H—4	1.9	1.3	0.3	0.6	40—3	
20	〃	I—2	1.8	1.3	0.4	0.6	40—4	
21	〃	F—4	2.0	1.2	0.3	0.4		
22	〃	I—3	1.8	1.2	0.3	0.4	40—8	
23	〃	I—3	2.0	1.2	0.4	0.6	40—6	
24	〃	H—3	1.7	1.2	0.3	0.4		
25	〃	H—3	1.8	1.3	0.3	0.5	40—9	
26	石錐	F—5	6.8	3.3	1.1	20.4	40—27	
27	〃	H—6	5.1	2.1	0.9	11.4	40—26	
28	〃	J—4	4.1	2.1	1.3	11.4	40—25	SK 8 F　RQ38
29	〃	H—6	4.0	2.7	0.8	4.4	40—23	SK37 F　RQ37
30	〃	I—2	6.0	2.8	1.1	7.5	40—21	RP21
31	〃	H—3	4.7	1.9	0.6	3.1	40—24	RQ23
32	〃	G—3	5.0	1.2	1.0	3.6	40—31	
33	〃	G—3	4.7	1.0	0.8	4.0	40—30	
34	〃	G—4	5.9	1.0	0.8	5.0	40—28	RQ 2
35	〃	H—3	5.6	0.8	0.5	2.4	40—29	
36	石匙	H—2	8.7	2.9	1.0	23.4	41—38	RQ 8
37	〃	J—4	5.8	3.3	1.2	18.2	41—45	RQ18
38	〃	H—3	6.9	2.0	0.7	10.2	41—39	RQ 9
39	〃	H—3	6.4	2.9	0.7	12.2	41—40	RQ30
40	〃	I—3	5.6	1.9	0.5	6.5	41—40	
41	〃	H—5	5.7	2.1	0.5	4.8	41—41	
42	〃	E—7	5.1	2.2	1.1	11.9	41—46	
43	〃	G—3	6.6	2.4	0.8	12.1	41—47	
44	〃	H—3	4.9	1.9	0.5	4.3	41—43	
45	〃	I—3	4.4	1.4	0.6	2.3	42—44	
46	〃	G—3	4.7	6.8	1.3	29.1	40—35	
47	〃	H—3	4.8	7.3	0.9	23.1	40—32	
48	〃	G—2	4.3	5.7	1.0	21.8	41—37	
49	〃	H—7	4.1	6.0	0.8	16.8	40—35	
50	〃	G—7	4.0	7.1	1.1	20.5	40—34	RQ32
51	〃	H—3	4.4	4.3	0.9	18.2	41—49	
52	〃	H—3	3.4	5.7	0.8	11.5	40—33	
53	〃	H—7	3.5	3.8	1.1	15.0		
54	〃	I—3	2.0	3.7	0.7	5.1	41—48	
55	石篦	H—3	5.4	3.2	1.1	24.1	42—58	
56	〃	J—6	5.0	3.5	1.2	16.9	42—57	
57	不定形石器	G—6	5.5	5.8	1.7	50.7		
58	〃	G—4	3.0	3.0	1.1	9.9		
59	〃	H—4	2.6	3.3	0.8	7.5		
60	〃	I—3	3.3	2.9	0.9	6.7		SX 3
61	〃	J—5	3.3	3.0	1.1	7.2	41—56	RQ35
62	〃	G—4	2.8	2.4	0.9	5.6	40—15	
63	〃	H—5	3.1	2.5	0.8	5.4		
64	〃	H—2	3.0	2.2	0.7	3.3		
65	〃	I—3	3.1	2.1	0.5	2.8		
66	〃	G—3	2.7	1.7	0.7	3.1		
67	〃	H—3	3.3	1.2	0.4	1.5		
68	〃	I—6	5.6	6.0	1.7	53.9	41—51	
69	〃	H—3	5.4	4.7	1.1	20.0		
70	〃	G—6	3.3	5.0	1.0	18.6	41—50	
71	〃	C—6	5.5	3.2	0.9	17.0		
72	〃	H—3	5.7	1.9	1.1	13.7	41—53	RQ27
73	〃	I—5	5.8	6.6	1.0	51.3	41—54	
74	不定形石器	B—4	4.1	4.8	1.0	20.7		
75	〃	H—3	5.1	3.9	1.5	26.5	41—52	
76	〃	H—4	4.2	2.9	0.7	10.9	41—55	
77	〃	H—4	2.8	1.5	0.9	3.6		
78	凹石	H—6	8.6	7.9	4.4	315		
79	〃	I—4	9.5	7.8	7.5	616		
80	〃	G—3	8.3	7.5	4.9	422		
81	〃	I—6	9.1	9.1	6.7	667		
82	〃	H—6	12.2	10.0	5.2	855	42—72	
83	〃	H—5	9.3	8.6	5.8	692	42—75	
84	〃	G—4	9.5	8.3	4.5	500		
85	〃	H—4	12.0	5.2	4.3	360	43—81	
86	〃	X—0	11.0	7.5	4.6	484		
87	〃	I—2	9.5	5.6	1.7	79	43—80	
88	〃	H—4	9.5	8.3	5.2	505		
89	〃	H—4	11.1	7.8	3.6	380		
90	〃	X—0	7.9	5.9	5.2	246		
91	〃	C—4	9.7	6.7	4.4	318		
92	〃	H—5	9.7	8.8	6.2	563	42—74	SK16　RQ42
93	〃	G—3	9.4	9.2	6.7	839		
94	〃	H—6	10.3	8.4	4.9	458		
95	〃	I—3	8.3	7.6	3.4	289		SX 3
96	〃	H—3	10.3	6.4	2.3	182		F 2
97	〃	H—7	8.7	7.6	5.3	405		
98	〃	H—4	9.4	8.8	5.6	517		
99	〃	I—3	12.4	3.8	3.7	205		SX 3
100	〃	G—6	8.6	6.4	2.8	179		
101	〃	G—4	11.0	5.3	3.2	114		
102	磨石	G—5	7.8	4.8	5.9	269		
103	〃	I—3	8.3	7.8	6.4	600		
104	〃	G—5	10.0	9.2	6.0	805		
105	〃	G—7	8.4	7.8	5.6	338		
106	〃	H—6	9.1	6.8	4.5	405		
107	〃	H—5	7.0	5.6	3.7	170		
108	〃	I—4	12.5	7.3	4.1	605		
109	〃	G—5	8.5	7.2	6.1	560		
110	〃	C—4	10.4	7.6	5.2	470		
111	〃	I—4	9.0	6.3	5.7	415		
112	〃	H—2	10.1	8.0	6.1	492		
113	〃	G—2	7.5	7.0	4.9	363		
114	〃	G—6	10.3	7.6	3.9	300		
115	〃	F—5	10.7	10.6	5.8	970	42—73	
116	〃	H—4	7.5	5.5	4.5	228	43—78	
117	〃	I—4	7.8	7.5	4.9	410	43—77	
118	〃	I—4	7.3	6.1	6.0	337	43—79	
119	〃	X—0	8.0	6.9	4.5	352	43—76	
120	〃	I—5	9.1	8.3	5.7	665		
121	〃	J—3	9.5	8.0	7.2	890		
122	石皿	J—4	46.0	39.5	9.0	18,500	45—88	RQ12
123	〃	J—5	28.0	21.5	5.5	4,700	46—92	RQ41　SK35
124	〃	H—2	29.5	21.0	5.6	4,500	45—89	RQ33
125	〃	H—6 G—3	31.3	18.0	5.0	3,750	46—93	RQ17＋RQ22
126	〃	G—4	15.5	12.6	6.9	1,840	46—91	F 2　RQ43
127	〃	G—5	17.7	23.0	5.5	3,400	46—90	RQ24
128	石棒	I—2	23.5	14.2	13.0	5,200	46—94	RQ15
129	砥石	H—4	46.5	28.0	12.5	15,600	44—86	RQ 1
130	〃	I—6	31.2	28.5	12.8	15,400	44—87	RQ34
131	〃	I—5	27.5	24.6	8.3	5,100	43—82	RQ14
132	〃	H—6	22.0	15.1	7.8	1,920	43—84	RQ16
133	〃	G—4	10.4	10.15	4.2	465	43—83	RQ28
134	〃	G—6	9.4	4.5	1.8	50		RQ20
135	線刻礫	G—3	5.7	5.3	2.6	100	42—71	
136	石斧	H—3	9.6	4.3	2.0	131.5	42—59	RQ26
137	〃	H—3	8.4	4.1	2.7	130.7	42—60	
138	〃	F—6	7.6	4.3	3.0	125	42—61	
139	〃	H—5	6.1	4.4	2.6	138	42—62	RQ 7
140	〃	F—4	9.0	5.6	3.2	255	42—63	RQ 3
141	〃	H—3	7.9	4.3	2.5	147	42—64	
142	〃	H—6	7.1	4.1	1.9	109	42—65	RQ 6
143	〃	H—3	8.3	5.1	1.3	164	42—66	RQ31
144	〃	F—5	3.6	3.0	1.8	26	42—68	
145	〃	E—6	4.4	3.4	2.2	34	42—67	

Ⅶ　まとめ

渡戸遺跡は押切川左岸の河岸段丘上に立地している。押切川の現川床との比高は約５ｍである。渡戸遺跡の発掘調査では遺跡範囲約100,000㎡のうち、北西の隅に当たる1,500㎡を調査した。調査では縄文時代の墓坑・遺物廃棄場などが検出された。出土遺物は229箱を数えそのほとんどは土器であり遺物廃棄場を中心として出土している。今回の発掘地点は遺跡の周辺部であり、中心的な部分はもっと東側寄りであると考えらえる。

営まれた時期は断続的であったが縄文時代後期、縄文時代晩期、弥生時代、平安時代の４時期となり、縄文時代後期中葉に最大の発展を見せ、遺物の98％以上がこの時期のものである。その他の時期については、遺物の量は極端に少ない。

路線幅に沿って、南北に長く設定した発掘区では、中央やや北側に旧河道を検出した。旧河道は発掘区を横断するように確認され、内部に向かって、遺物の廃棄場が形成されていた。遺物廃棄場は面積約175㎡であり、遺物包含層の最大の厚さは約50㎝であった。廃棄された遺物は、ほぼ縄文時代後期の中葉に限定される。遺物の内容には、土器・石器・土製品・石製品があった。その中で、大きさ３㎝ほどのクッキー状の炭化物の資料は特筆されるであろう。また、川跡の一部には泥炭層が形成され、自然木や各種の種子類が検出され、当時の植物利用の実態が分かる資料が得られた。

廃棄は北側の川岸から行われ、そこには墓坑と思われる、集石を持つ40基ほどの土坑群が形成されていた。上面に２～８個程の配石を配置し、平面形は大部分が大体が１ｍ以内の小さな円形のもので、深さ50㎝程度の半円形の掘り方を持っている。この時期の墓坑は山形県内では明確なものとして検出されたことはなかった。副葬品あるいは供献品と考えられる遺物の出土はほとんどなかった。埋設土器も検出されない。

黒曜石の剝片、蛇紋岩製の磨製石斧、あるいは土偶や石器に付着したアスファルトは、遺跡の周辺には産出しない。交易によってもたらされたものであろう。

出土した土器群は整理箱で200箱以上にもなり、かつ非常に近接した時期であると考えられる。出土した土器群は、時期別に第Ⅰ～Ⅴ群に分け、さらに第Ⅰ群を第１～第17類まで細別した。第Ⅰ群土器群は縄文時代後期の中葉、第Ⅱ群は縄文時代後期中葉から末葉、第Ⅲ群土器群は縄文時代晩期、第Ⅳ群土器群は弥生時代中期、第Ⅴ群土器群は古代の各時期に比定できよう。第Ⅰ群土器群の内、第１類と第２類とはほぼ十腰内Ⅰ式の後半段階併行と考えたい。第３類～第７類とは大湯式などの一群に併行するものであろう。第８類から第12類はほぼ加曽利B_1式に併行する一群であると考えられる。第13類はほぼ宝ケ峯式に併行する一群であると考えられる。このうち、出土土器群の主体をなすのは、第８類～第13類までの土器群である。これらは、山形県内ではまとまった資料の報告はほとんどない時期の資料である。村山市川口遺跡出土土器の一群からつながる時期の資料であり、貴重な成果を得た。

報告書抄録

ふりがな	わたど いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	渡戸遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第35集
編著者名	山口　博之・渡辺　　薫
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL0236-72-5301
発行年月日	西暦1995年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
わたどいせき 渡戸遺跡	やまがたけん 山形県 てんどうし 天童市 おおあざやまぐち 大字山口 あざぼうしょ 字坊所	6621	335	38度 22分	140度 22分 45秒	19950508 ～19950811	1,500	広域農道整備事業（村山東部地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
渡戸遺跡	捨場・墓地	縄文時代 後期 晩期	土坑 集石土坑 遺物廃棄場	縄文土器 石器 土偶 土製品 石製品	調査箇所の中央に旧河道が検出され、一部には泥炭層の形成があった。旧河道右岸に沿って遺物廃棄場が形成され、完形土器・土偶等が廃棄されていた。さらに、その上方の河原には集石土坑が営まれていた。
		弥生時代		弥生土器	
		平安時代		須恵器	

付　　編

渡戸遺跡　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

渡戸遺跡（天童市大字山口字渡戸所在）は、押切川の河岸段丘上に立地する遺跡であり、縄文時代（中期、後期、晩期）、弥生時代（中期）、平安時代の各時代にわたる遺構、遺物が検出されている。川跡とされる遺構には、河床礫のくぼみに泥炭層が堆積し、縄文時代後・晩期の遺物が包有されている。また泥炭層の最上部には材の幹が横たわっており、木道ではないかとみられている。今回の調査は、泥炭層堆積時の環境復元や植物利用について調べることを目的として、泥炭層中から検出された種実同定を行う。また、木道とされる木材の樹種同定や木道直下の土壌を対象とした花粉分析を併せて行い、種実遺体の情報と併せて古植生について検討する。

1．試料

種実同定の試料は、泥炭層を水洗選別して得られた試料20点である。また、樹種同定用試料は木道とされる幹材２点、花粉分析用試料は木道の直下の土壌を採取してそれぞれ分析に用いる。分析試料については、表１にまとめた。

2．方法

1）花粉分析

試料約15ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、0.25㎜の篩による篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

2）樹種同定

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行い、その特徴から種類を同定する。

3）種実同定

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定する。試料は、種類ごとに分別し、

ほう酸とほう砂の混合液中に保存した。

表１　分析試料一覧

試　料　名	試料の質（分析手法）
RN—10　花粉分析土壌	土壌（花粉分析）
RN—10	木材（樹種同定）
RN—20　E—６G	木材（樹種同定）
1　土壌サンプル河跡　渡戸No.１	種実（種実同定）
2　土壌サンプル河跡　渡戸No.１	種実（種実同定）
3　土壌サンプル河跡　渡戸No.２	種実（種実同定）
4　土壌サンプル河跡　渡戸No.２	種実（種実同定）
5　土壌サンプル河跡　渡戸No.２	種実（種実同定）
6　土壌サンプル河跡　渡戸No.２	種実（種実同定）
7　土壌サンプル河跡　渡戸No.２	種実（種実同定）
8　土壌サンプル河跡　渡戸No.３	種実（種実同定）
9　土壌サンプル河跡　渡戸No.３	種実（種実同定）
10　E—６G　木のまわり　渡戸No.４	種実（種実同定）
11　E—６G　木のまわり　渡戸No.４	種実（種実同定）
12　E—６G　木のまわり　渡戸No.５	種実（種実同定）
13　E—６G　木のまわり　渡戸No.５	種実（種実同定）
14　E—６G　木のまわり　渡戸No.５	種実（種実同定）
15　E—６G　木のまわり　渡戸No.５	種実（種実同定）
16　E—６G　河跡　自然遺物	種実（種実同定）
17　E—６G　河跡　自然遺物	種実（種実同定）
18　RN—９　E—６G　河跡	種実（種実同定）
19　RN—９　E—６G　河跡	種実（種実同定）
20　E—３G　河跡	種実（種実同定）

・試料に付した丸付きの数字は丸を取って表記する。

３．結果

１）花粉分析

結果を表２・図１に示す。花粉化石群集は、木本花粉の割合が高く、草本花粉は少ない。木本花粉は、マツ属（主に複維管束亜属）が最も多く、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などの比較的多い。草本花粉は、イネ科やヨモギ属などが検出されるが、いずれも個数が少ない。

２）樹種同定

試料は、２点ともケヤキに同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・ケヤキ（Zelkova serrata(Thunb.)Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は１～６列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合す

種　類　　試料番号	RN—10
木本花粉	
モミ属	1
ツガ属	2
トウヒ属	1
マツ属	130
スギ属	1
クルミ属	12
カバノキ属	1
ハンノキ属	1
ブナ属	3
コナラ属コナラ亜属	32
コナラ属アカガシ亜属	1
クリ属	3
ニレ属—ケヤキ属	44
エノキ属—ムクノキ属	1
トチノキ属	4
シナノキ属	1
ウコギ科	2
草本花粉	
イネ科	5
カヤツリグサ科	2
マメ科	1
ヨモギ属	1
他のキク亜科	1
不明花粉	2
シダ類胞子	
シダ類胞子	78
合　計	
木本花粉	240
草本花粉	10
不明花粉	2
シダ類胞子	78
総計（不明を除く）	328

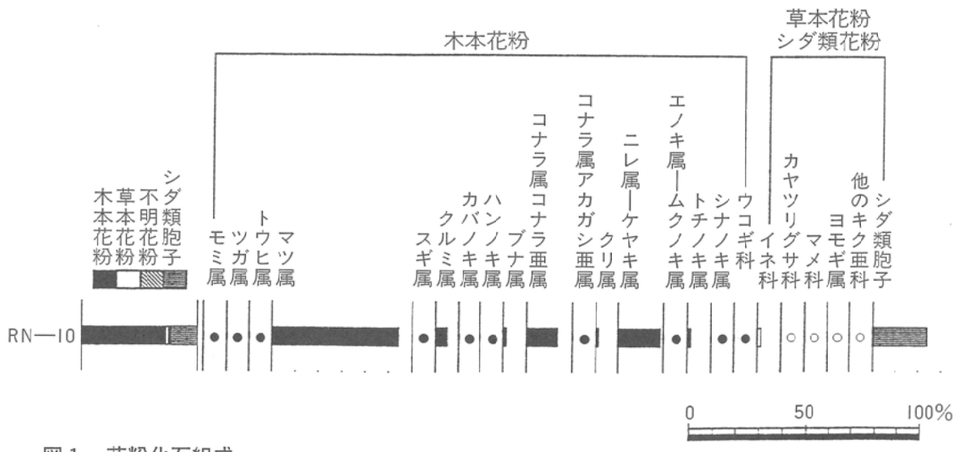


図１　花粉化石組成

出現率は、木本花粉はその総数、草本花粉は総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。なお、○●は１％未満を示す。

る。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～６細胞幅、１～30細胞高で、しばしば結晶を含む。

以上の特徴から、幹材ではなく根株材と考えられる。

３）種実同定

結果を表３に示す。検出された種類はほとんどが木本類である。以下に検出された種類の形態的特徴について記す。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana(Maxim) Kitamura）
クルミ科クルミ属

核が検出された。褐灰色で大きさは３㎝程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部はやや尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。

・クマシデ（Carpinus japonica Blume）　カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。黒褐色で、大きさは５㎜程度。側面観は涙型、上面観は凸レンズ型。表面には縦方向に数本の筋が存在する。

・クロモジ属（Lindera sp.）　クスノキ科

種子が検出された。黒褐色で、大きさは６㎜程度。球形で一端に「へそ」がある。種皮は薄くて堅く、表面は平滑で光沢がある。.

・カジノキ属（Broussonetia sp.）　クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは1.5㎜程度。倒卵型、表面にはいぼ状の模様が粗く配列し、側面の隅に突起がみられる。

・クワ属（Morus sp.）　クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは２㎜程度。倒卵型、表面は平滑で側面の隅に突起がみられる。

・ホウノキ（Magnopria obovata Thunb.）　モクレン科コブシ属

種子が検出された。大きさは１㎝程度。黒褐色、偏平な楕円形で、片側が凸である。片面は中心部が溝状にへこみ、下端に大きな「へそ」がある。種皮はやや薄くて堅く、全体に粗いしわ状模様があるが、凸面で顕著である。

・マタタビ属（Actinidia sp.）　マタタビ科

種子が検出された。黒色。側面観は長楕円形。大きさは３㎜程度。表面は硬質で光沢があり、丸いへこみが不規則に配列しているように見える。

・ミツバウツギ（Staphylea Bumalda DC.）　ミツバウツギ科ミツバウツギ属

種子が検出された。黄褐色で、大きさは６㎜程度。楕円形で、一端に大きな「へそ」があり、楕円が欠損しているようにみえる。種皮は厚くて堅く、表面は平滑で光沢がある。

・サンショウ（Zanthoxylum piperitum DC.）　ミカン科サンショウ属

果実が検出された。黒褐色、楕円形で大きさは４㎜程度。表面には浅い不規則な網目模様がみられる。

表３　種実同定結果

種類・部位	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
オニグルミ	核			10											2						
クマシデ	果実		3		10									1	1						
クロモジ属	種子						145													23	
カジノキ属	種子	2						5	4		3			5				1			
クワ属	種子	1						1													
ホウノキ	種子				1					1					2						
マタタビ属	種子	約350						24	多数		多数	2		約400	2			41	4		18
ミツバウツギ	種子				2							30									
サンショウ	核														6						
ブドウ属	種子		2		1					1					6						
ブドウ科	種子													2							
クサギ	核						2					1									
トチノキ	種子			1												3					
タラノキ	種子	約500						多数	多数		多数			約500				約150	約100		32
ミズキ	核			1											1						
エゴノキ属	核		6			16							8								
ニワトコ	種子	12						19	66		91			26					1		1
タデ属	果実							1													
ナデシコ科	種子	1						1			1			1							
マメ科	種子				1																
ナス科	種子										1			3							

・ブドウ属（Vitis sp.）　ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは5㎜程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

・クサギ（Clerodendron trichotomum Thunb.）　クマツズラ科クサギ属

種子が検出された。黒褐色、半球状で、大きさは6㎜程度。種皮は薄くてやや堅い。球面側には粗い網目状の模様があり、反対側はやや内側に凹む。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume.）　トチノキ科トチノキ属

種子の破片が検出された。黒色で、薄くて堅く、大きなもので3㎝程度。表面には黒く艶のある部分と、黒褐色でざらつく部分とがある。

・タラノキ（Aralia elata(Miq) Seemann）　ウコギ科

核が検出された。茶褐色で側面観は半円形、上面観は卵形。長さ2㎜程度。核はやや厚くて硬い。核の表面には不規則な瘤状突起がある。

・ミズキ（Cornus controversa Hemsley）　ミズキ科ミズキ属

核の破片が検出された。褐色で大きさは4㎜程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る溝がみられるがほとんど磨耗している。

・エゴノキ属（Styrax sp.）　エゴノキ科

核が4個体検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ1㎝程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・ニワトコ（Sambucus rasemosa L. subsp. sieboldiana(Miquel) Hara）
スイカズラ科ニワトコ属

種子が検出された。黒色。長楕円形で、長さ2㎜程度。下側に臍があり、表面には横軸に平行なしわ状の模様が存在する。

・タデ属（Polygonum sp.）　タデ科

果実が検出された。黒褐色で大きさは3㎜程度。3稜形で、表面はざらつく。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae sp.）

種子が検出された。黒色で、大きさは2㎜程度。表面には細かい突起が密に配列する。

・マメ科（Leguminosae sp.）

果実が検出された。褐色、腎臓形で、大きさ3㎜程度。側面に縦長のへそが存在する。

・ナス科（Solanaceae sp.）

種子が検出された。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」を中心として同心円状に網目模様が発達する。大きさは2㎜程度。黒褐色。表面は柔らかい。網目模様はやや細かく、畝は波うっている。

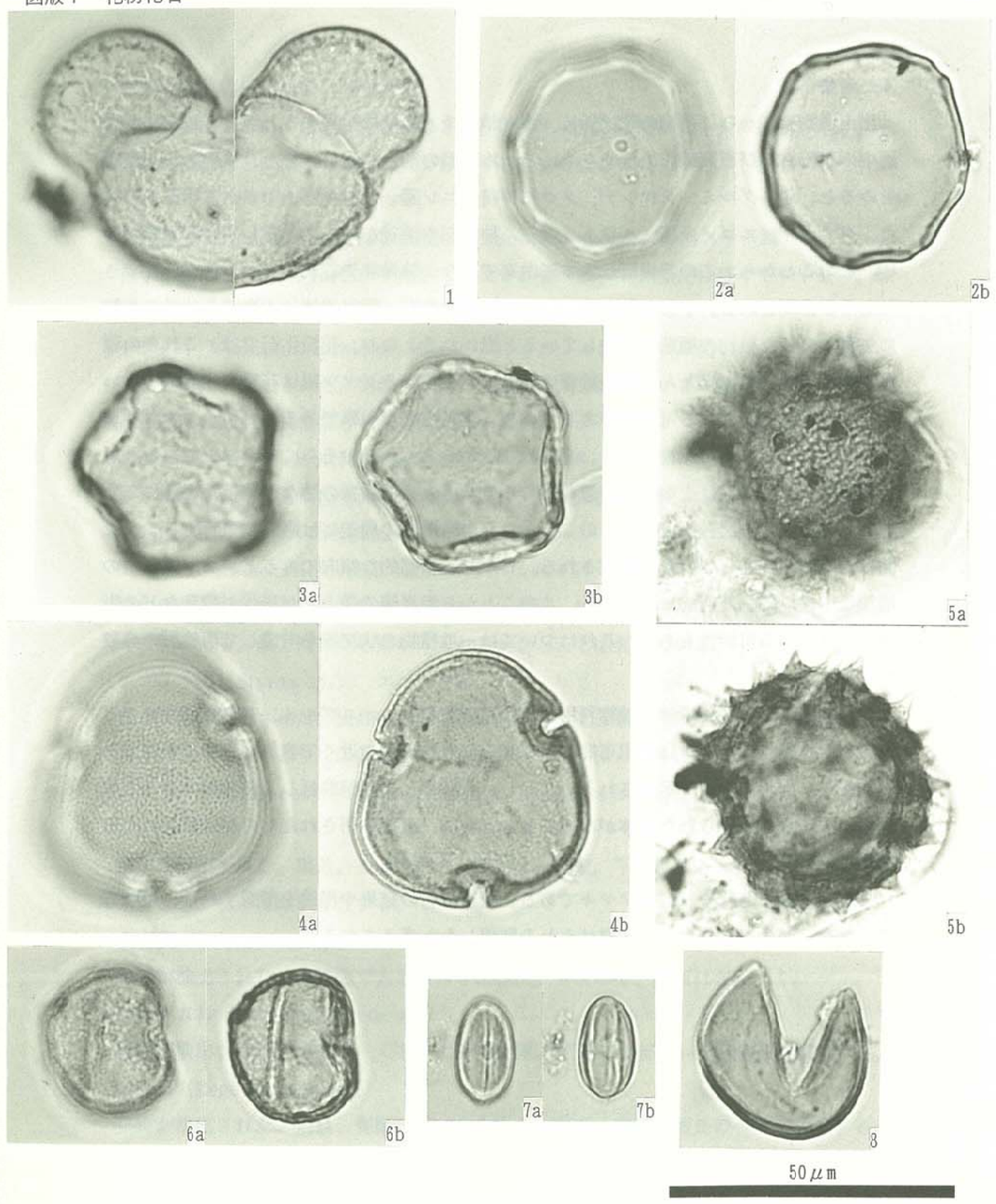
4．考察

出土遺物などから、遺構の時代性は、縄文時代後・晩期に相当すると考えられる。泥炭層中の花粉および種実遺体の組成をみると、木本類の割合が高い。また、検出される種類をみると、オニグルミ、クマシデ、クロモジ属、ニレ属―ケヤキ属、マタタビ属、トチノキ、タラノキ、エゴノキ属、ニワトコなど、林縁部や渓谷を中心に分布している種類が多い。このことから、この泥炭層は木本質由来であり、林縁部や谷筋などから流れ込んできたものと推測される。すなわち、今回得られた花粉化石・種実遺体は、当時の林縁や谷筋に生育していた植物の種類を反映していると思われる。なお、花粉化石では、これらの種類に加えてマツ属（ほとんどが複維管束亜属）が多産する。マツ属は花粉の生産量が多いので、過大に評価される可能性があるものの、50％強の出現率であることから、マツ林が近くに存在していた可能性がある。遺跡の立地からすれば、おそらくアカマツであると思われるが、アカマツは土地条件の悪いところや、山火事や伐採の跡など開けた場所に二次林として存在する場合が多い。このことから、当時遺跡の周辺には陽樹が生育するような開けた空間が存在していたと推定される。しかし、全国的な傾向でみると、マツ属花粉の増加は中世以降、普遍的にみられる。このことから泥炭層の最上部が後代の撹乱などの影響を受けている可能性もある。これについては、堆積物の状況等を考慮して再検討の必要がある。

今回検出された種実遺体を植物利用の面から考えると、オニグルミ、クワ属、マタタビ属、ブドウ属、トチノキは食用可能である。これらは遺跡の近くで容易に入手できたであろうから、当時の利用が示唆される。しかし、今回は、表面が磨耗した個体があることや、食用とするために割られた個体がないことなどから、直接利用されたものが破棄された可能性は低い。

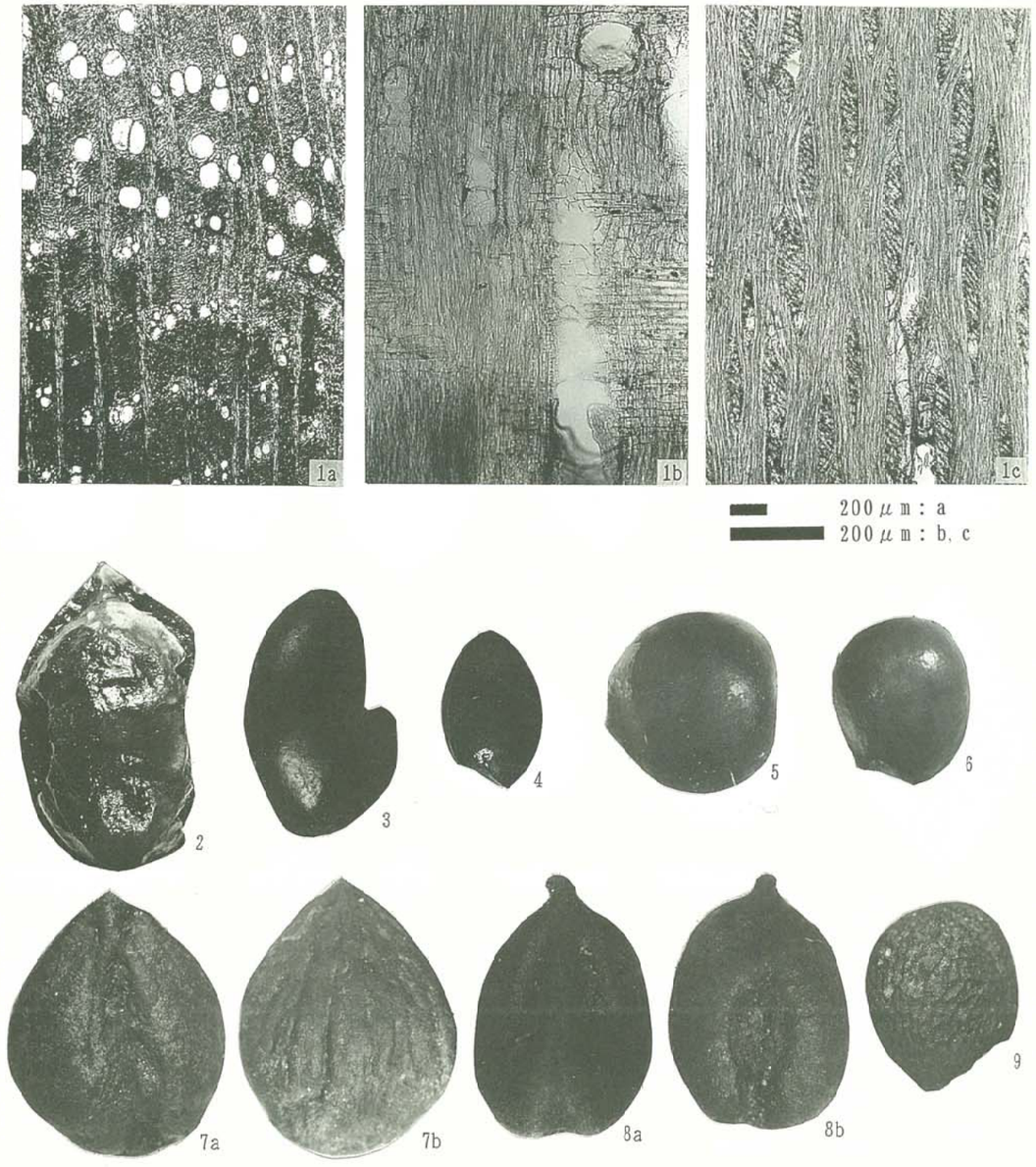
また、木道とされる試料はケヤキである。花粉分析の結果や用途を考慮すれば、遺跡周辺にケヤキが生育しており、木材はそれを利用したと考えられる。

図版１　花粉化石



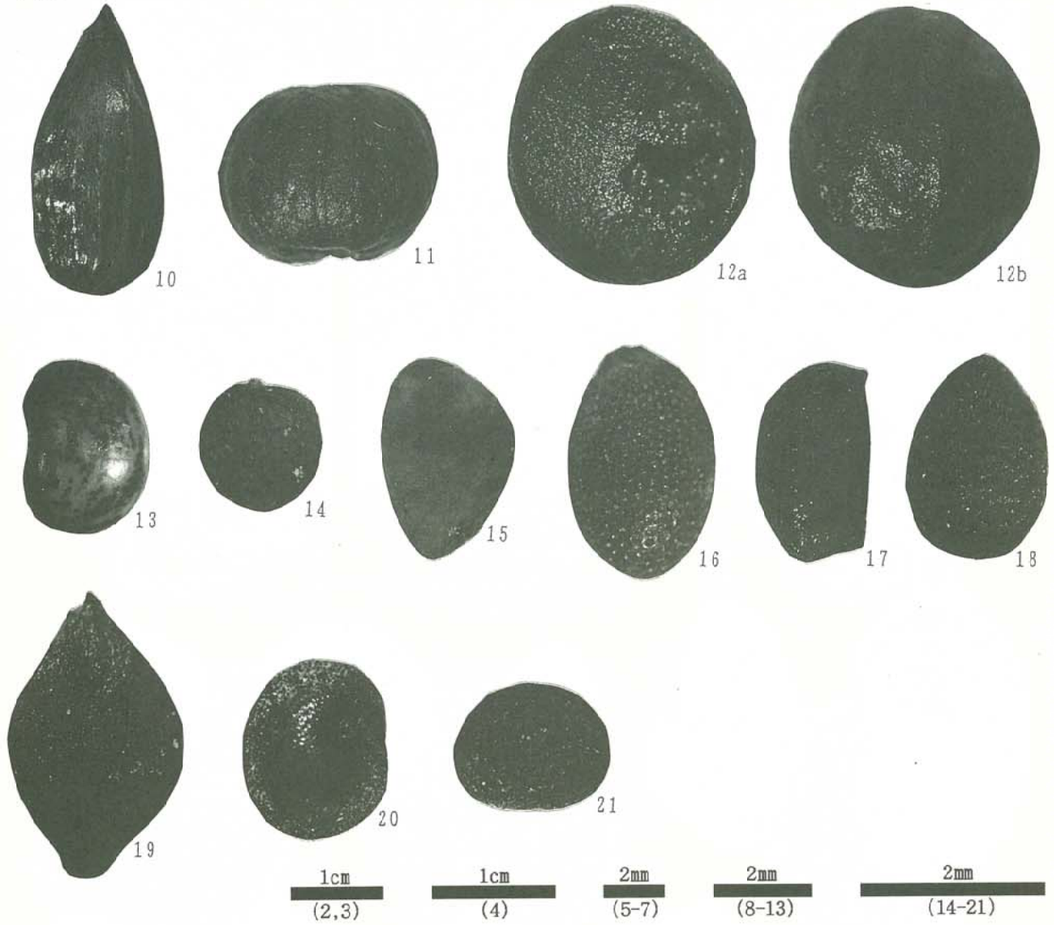
1．マル属（RN—10）
2．クルミ属（RN—10）
3．ニレ属—ケヤキ属（RN—10）
4．シナノキ属（RN—10）
5．キク科（RN—10）
6．コナラ属コナラ亜属（RN—10）
7．クリ属（RN—10）
8．スギ属（RN—10）

図版２　木材・種実遺体



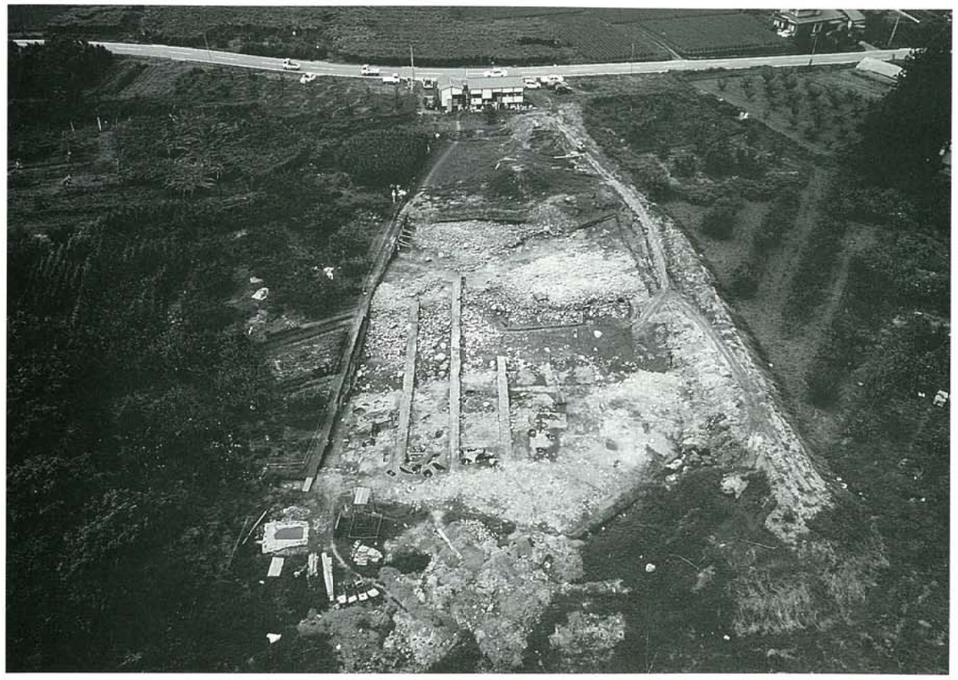
1．ケヤキ（a：木口　b：柾目　c：板目：RN—20 E—6 G）
2．オニグルミ（3）
3．トチノキ（15）
4．エゴノキ属（16）
5．クロモジ属（6）
6．ミツバウツギ（11）
7．ホウノキ（14）
8．ブドウ属（14）
9．サンショウ（14）

図版 3　種実遺体

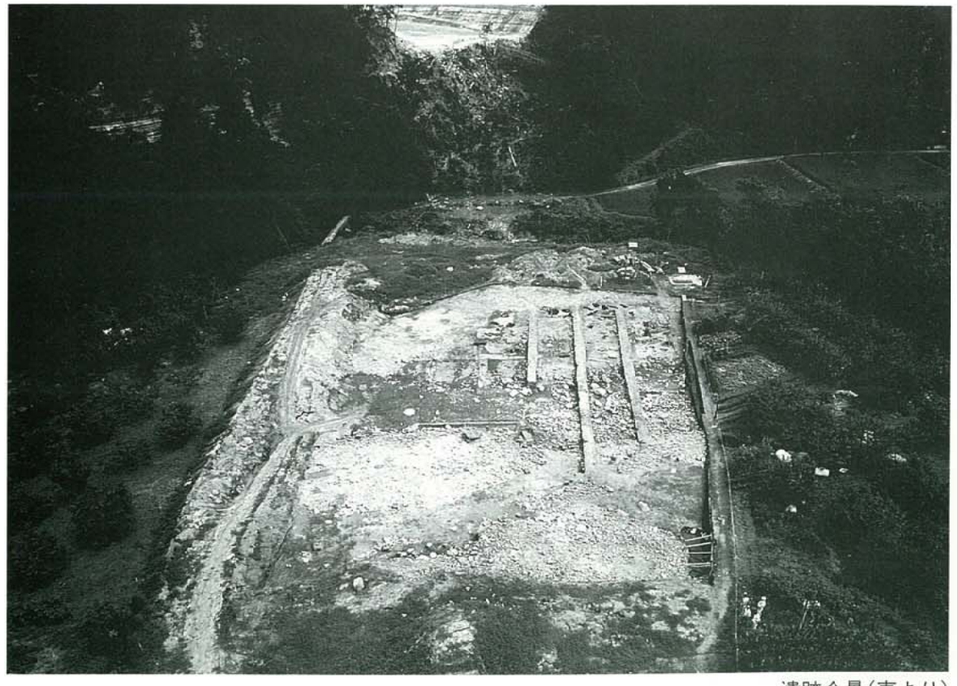


10. クマシデ（4）
11. ミズキ（14）
12. クサギ（6）
13. マメ科（4）
14. カジノキ属（1）
15. クワ属（1）
16. マタタビ属（1）
17. タラノキ（1）
18. ニワトコ（1）
19. タデ属（7）
20. ナデシコ科
21. ナス科（13）

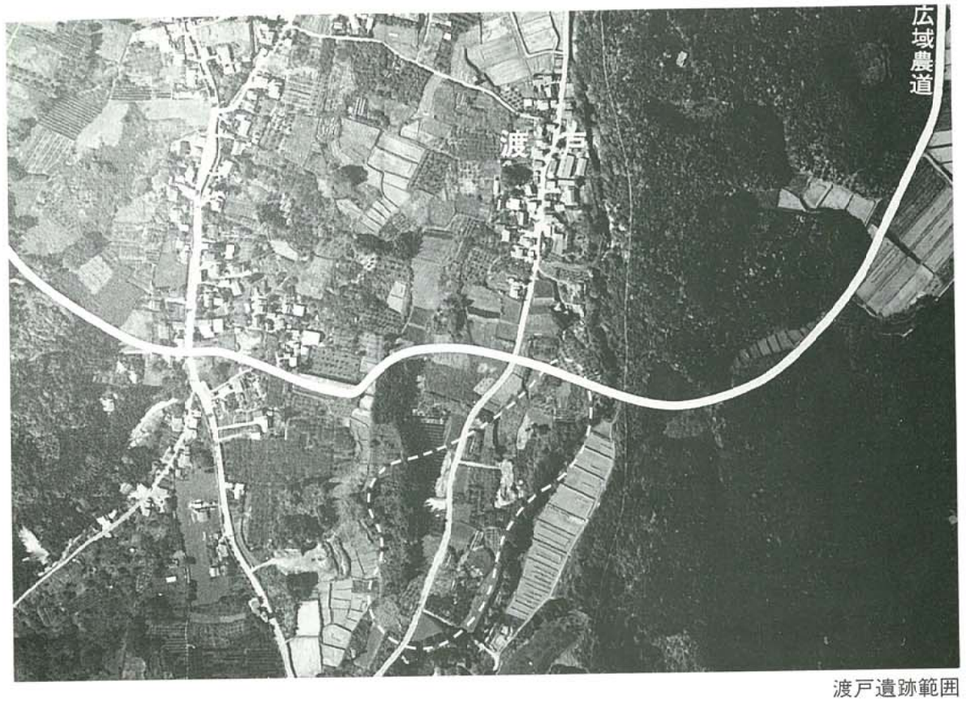
図　　版



遺跡全景(北より)



遺跡全景(東より)



渡戸遺跡範囲

遺跡遠景（北より）

F—4・E—4グリッド南北壁

調査区東壁

調査区東壁

調査区東壁

調査区東壁

遺物廃棄場調査状況

遺物廃棄場調査状況

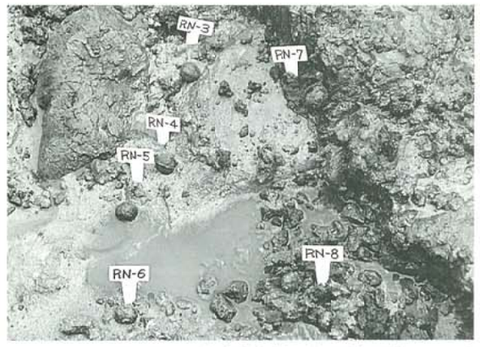
土偶(RP83)出土状況

土器(RP42・43)出土状況

自然木検出状況(G—6 グリッド)

自然木検出状況(上図の直下)

泥炭層(自然木)調査状況(G—6 グリッド)

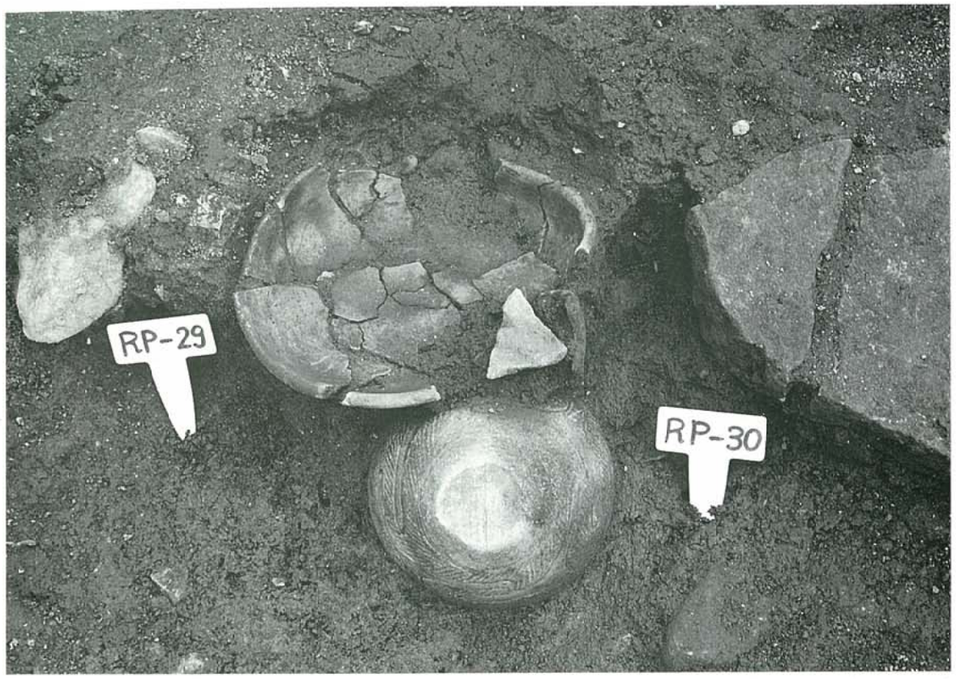


同上自然遺物出土状況(クルミ)

同上自然遺物出土状況(種子)

同上土器出土状況(RP98)

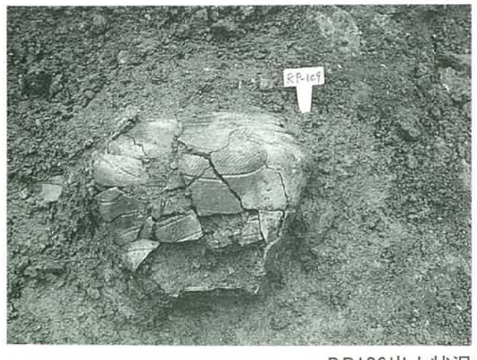
同上完掘状況



遺物出土状況(RP29・30)

RP34出土状況

RP16出土状況

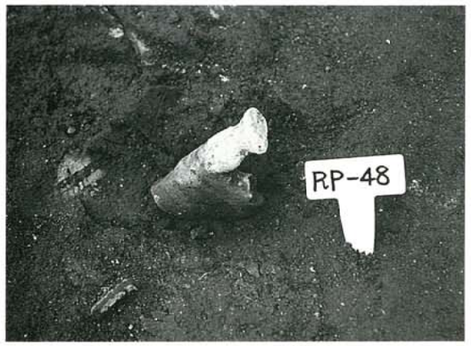


RP109出土状況

RP88出土状況

RP54出土状況

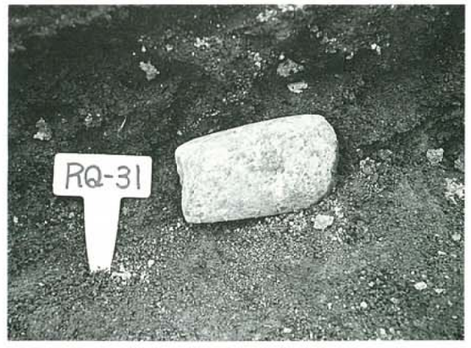
RP53出土状況



RP48出土状況

RP60出土状況

クッキー状炭化物出土状況

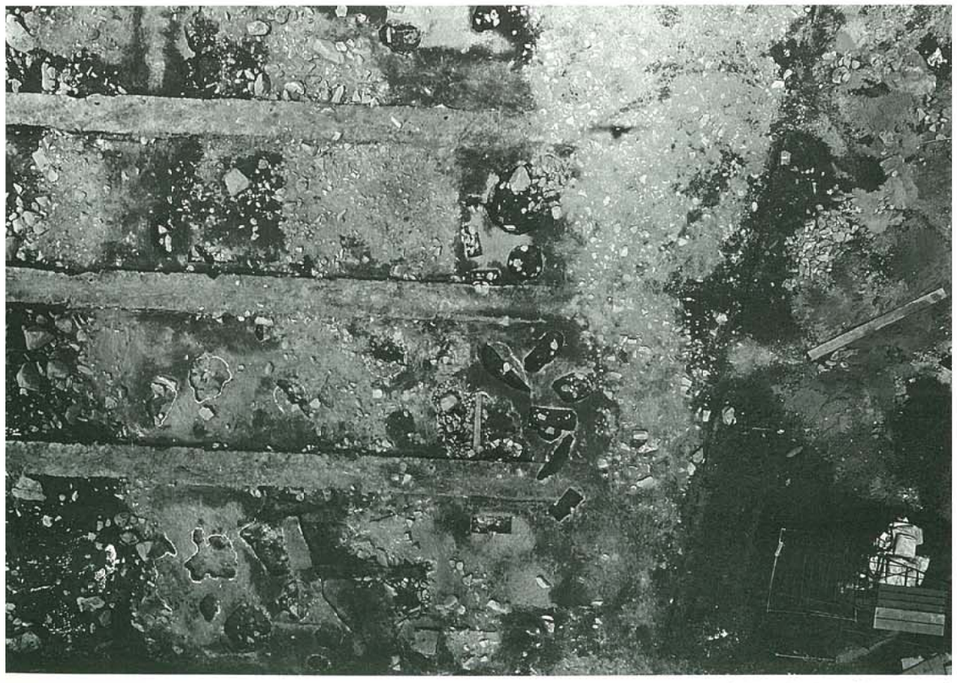


石斧出土状況

石皿出土状況

砥石出土状況

遺構調査状況(西より)



遺構調査状況(真上より)

遺構調査状況(東より)

SK I 検出状況

SK I 調査状況

SK39調査状況

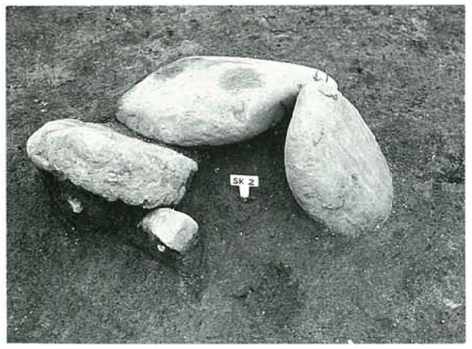
SK40調査状況

SK 9 検出状況

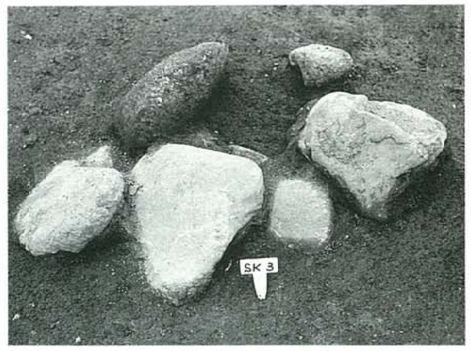
SK 9 完掘状況

SK35調査状況

SK35完掘状況



SK 2 検出状況



SK 3 検出状況

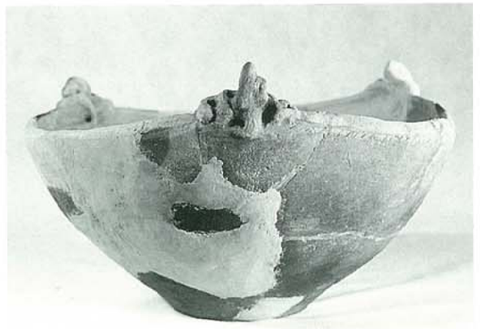
SK 2 ・ 3 調査状況

SK38調査状況

出土土器(RP34)

出土土器(RP14)

出土土器(RP60)



出土土器(H・G—3 グリッド)

同左内面写真

出土土器(RP43)

出土土器(RP16)

出土土器(G—6)

出土土器(F—5)

出土土器(RP98)

出土土器(RP109)

出土土器(RP99)

出土土器(G—5)

出土土器(H—3)

出土土器(G—5)

出土土器(RP78)

出土土器(H—5)

出土土器(RP90)

出土土器(RP88)

出土土器(G—3)

出土土器(X—0)

出土土器(RP30)

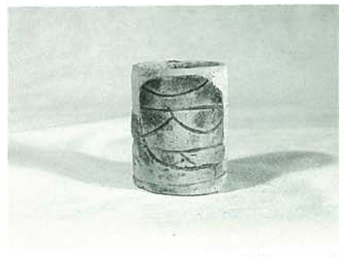
出土土器(G—6)

出土土器(E—5)

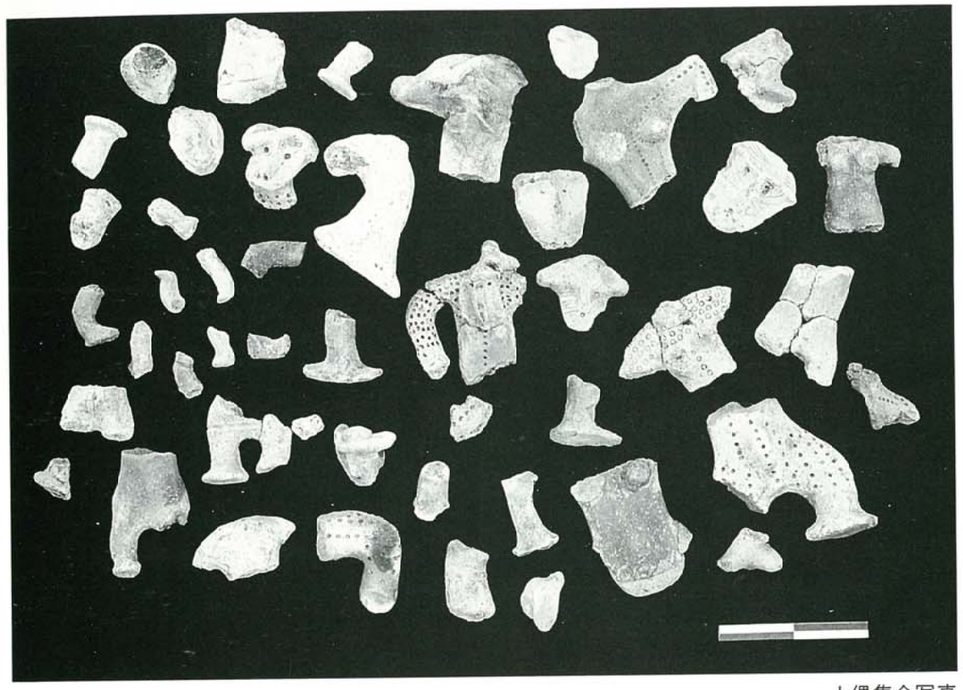
出土土器(H—4)

出土土器(H—4)

出土土器(RP89)

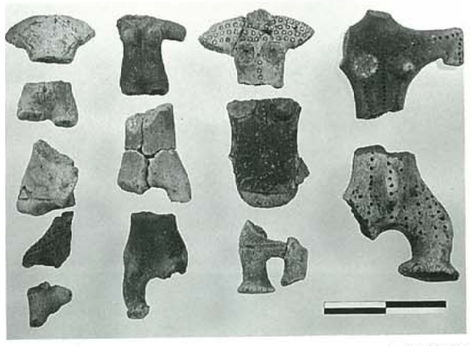


出土土器(G—5)



土偶集合写真

土偶頭部



土偶体部

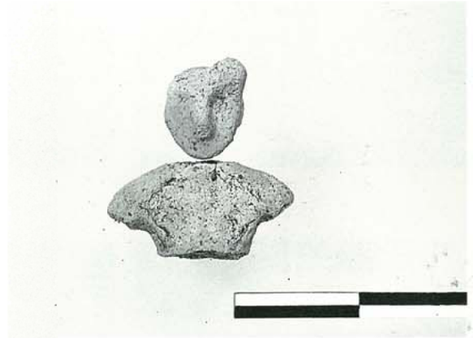
土偶下肢

円板状土製品

出土土偶(RP22)

出土土偶(RP53+RP83)

出土土偶(RP61+RP12)

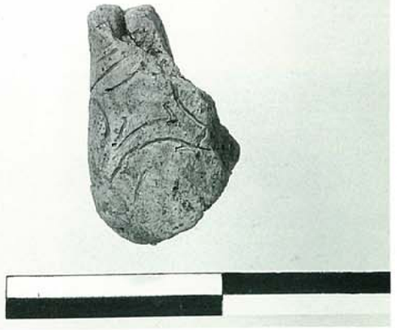


出土土偶(G—3+H—3)

スタンプ状土製品(RP50)

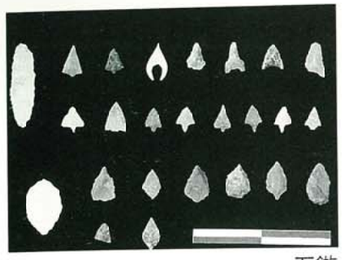
土版(RP 9)

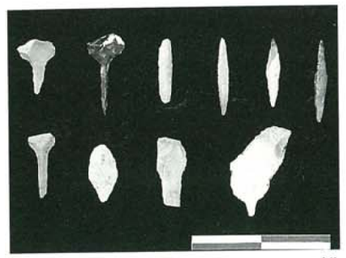
土版(RP 5)

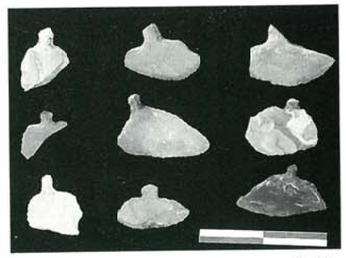


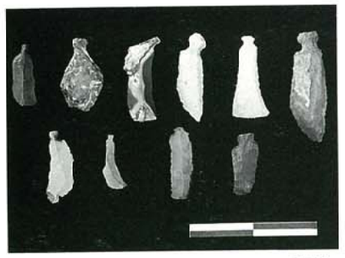
土版(RP 8)

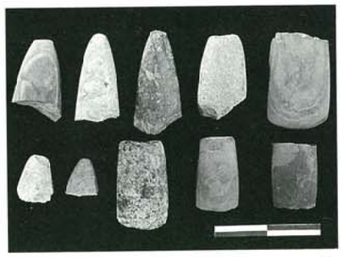
図版18

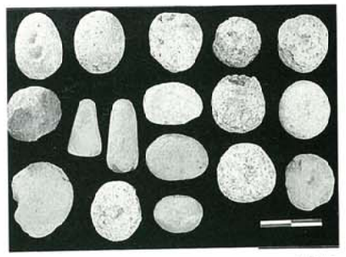

石鏃

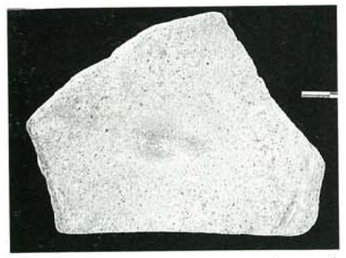

石錐

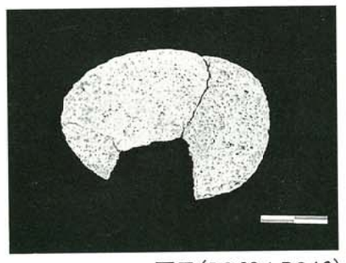

石匙

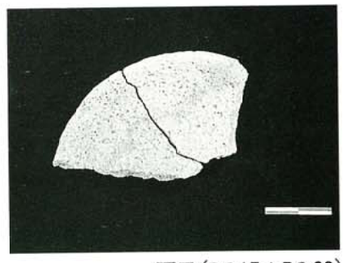

石匙

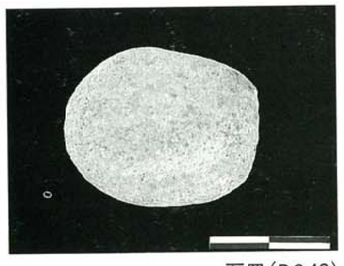

石斧


凹石

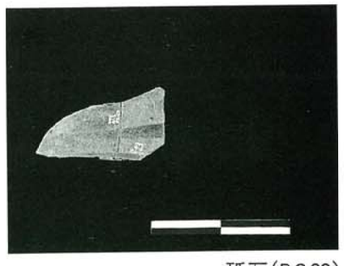

石皿(RQ12)


石皿(RQ33+RQ10)


石皿(RQ17+RQ22)


石皿(RQ43)

砥石(RQ14)


砥石(RQ20)

アスファルト付着石鏃(S＝100%)

アスファルト付着石匙(S＝88%)

アスファルト付着石匙(S＝54%)

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第35集

渡戸遺跡発掘調査報告書

1996年3月31日　発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　0236-72-5301
印刷　藤庄印刷株式会社

1996－580